石鏃（1～15）

調査区西側よりその多くが出土している。これらを観察すると、無茎鏃（1、2）、凸基有茎鏃（3～5、14）、凹基有茎鏃（6、7）、平基有茎鏃（8～13、15）の4形態に分類される。完形品は2点と少なく、欠損品は茎部を欠くものが多い。いずれも押圧剝離によりていねいに作られる。法量は最大長2.1cm～2.7cm、重さ0.7g～1.8gを計る。石材は珪（硬）質頁岩が多く、珪岩、蛋白石が続く。

石錐（16）

つまみ部と錐部の境のえぐれが浅いもので、錐部先端を欠く。石材は珪（硬）質頁岩。

掻器（17～26）

いずれも一次剝離によって得られた縦長剝片を用い、刃部は主要剝離面から背面方向への調整によって作りだされたものが多い。23は主要面、背面に刃部が作られている。刃部の位置を観察すると、一側縁に限定されるもの（17～22）、二側縁に及ぶもの（23）がある。最大長2.9cm～9.9cm、重さ10g～70gを計り、その大きさに規則性はみられない。石材は珪（硬）質頁岩、黒色頁岩の頁岩類である。

磨製石斧（27）

1点出土した。定角式磨製石斧で、最大長13.3cm、重さ280gを計る。刃部は丸みを帯び、使用頻度の高さが知られる。石材は玢岩である。

石錘（28～31）

4点出土した。5cm～10cm大の扁平な石を用い、その短軸両端を打ち欠いてえぐれを作りだしている。重さ50g～250gを計る。石材は流紋岩、石英安山岩、石英閃緑玢岩である。

敲石（32～38）

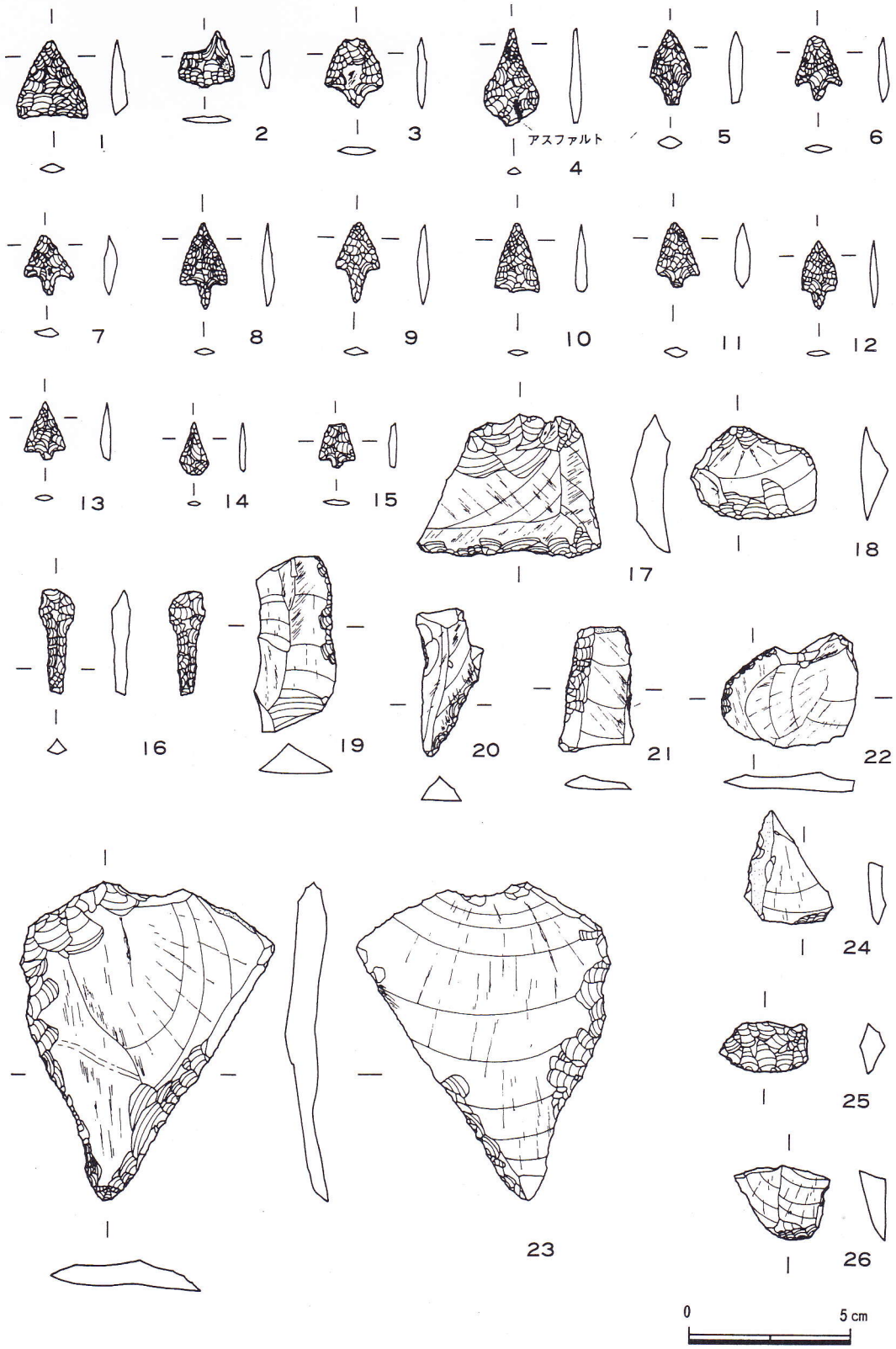
7点出土した。5cm～9cm大の扁平な川原石を用い、石の長軸一側縁を打ち欠くものである。重さ28g～155gを計る。石材は流紋岩が多く、緑色凝灰岩、石英玢岩が続く。32は凹石を転用もしくは併用したものである。なお、昨年度及び本年度に敲石としたものの中には、法量が小さく、敲打に適しないものが存在する。これらについては石錘またはその未完成品とみることも可能である。

凹石（39～43）

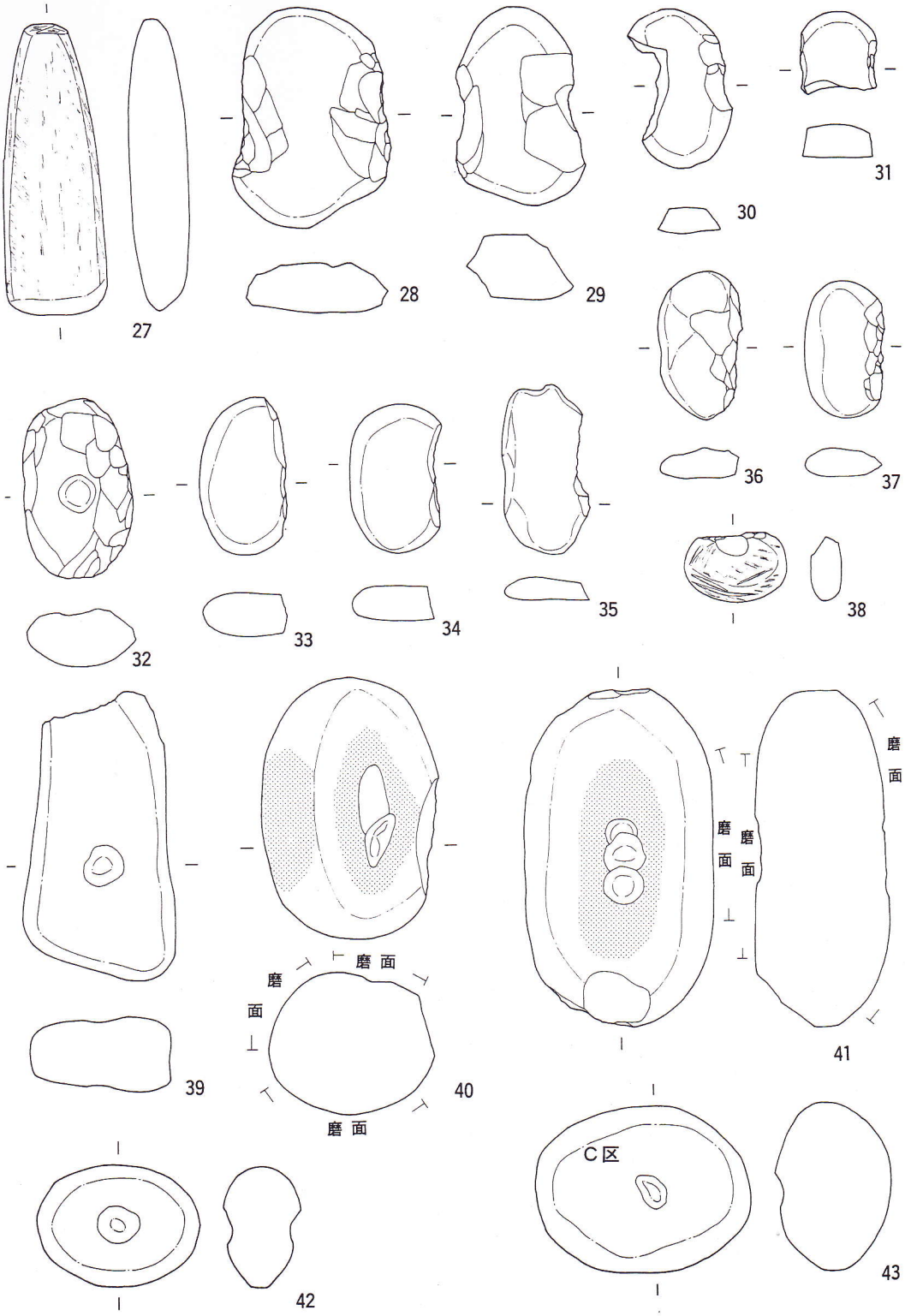
5点出土した。7.5cm～15.5cm大の楕円形または不定形の石を用い、その比較的平坦な面に1～3個の凹みを作りだしている。凹みは皿状を呈する。重さ210g～1200gを計る。40、41は磨石としても併用される。石材は石英閃緑岩、石英安山岩である。

磨石（44～56）

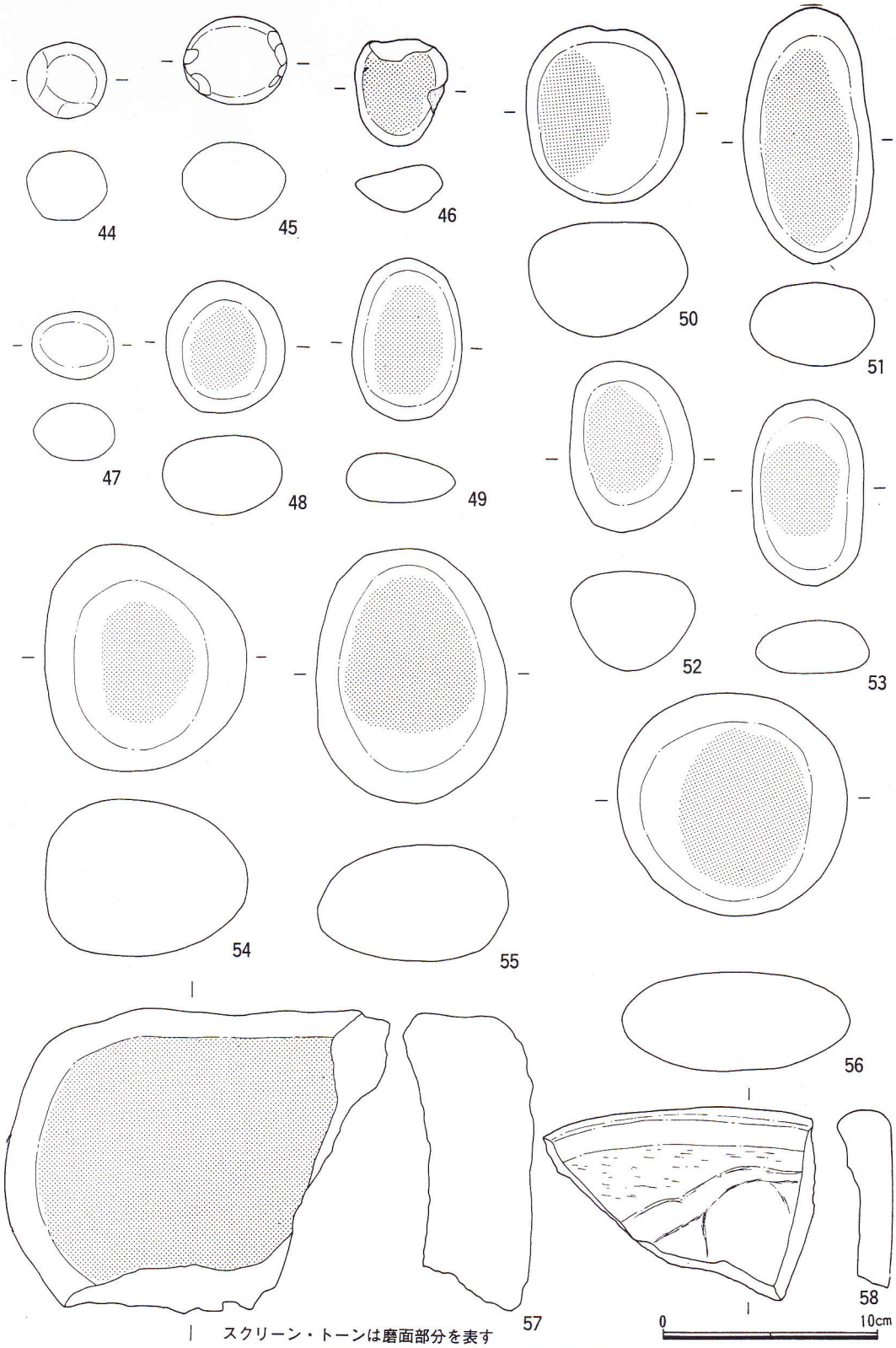
13点出土した。その多くは調査区西側からである。3.5cm～12cm大の石を用い、小型のもの



第48図　C区遺構外出土石器実測図(1)



第49図　C区遺構外出土石器実測図(2)



スクリーン・トーンは磨面部分を表す

第50図　C区遺構外出土石器実測図(3)

は全面を磨面とする。44は研磨が繰返されて多面体となっている。比較的大型のものは平坦な面を磨面とする。重さは44g ～ 660g を計る。石材は石英玢岩が多く、緑色凝灰岩、泥岩、玄武岩、流紋岩が続く。

石皿（57、58）

２点出土した。いずれも破損品である。57は楕円形の扁平な礫の平坦面を磨面とする。縁辺部までの変化に乏しい。石材は泥質凝灰岩。58は磨面と縁辺部が明瞭に区画されている。石材は流紋岩。

（藤井安正）

（3）　土製品・石製品（第51図～53図）

Ｃ区より出土した土製品・石製品は、円盤状土製品43点、土偶１点、茸形土製品１点、円盤状石製品３点、石剣１点の計49点である。これらの製品は万座環状列石寄りの発掘区南西側、Ⅲb ～ Ⅲd 層からの出土で、その分布は土器分布密度の比較的高い部分と一致する。

円盤状土製品（第51図、52図32～43）

土器破片を利用し、打ち欠き及び研磨加工により、円形、方形、三角形に整形しているものである。土器胴部片を利用しているものが42点、底部片を利用しているものが１点、合計43点が出土した。欠損品は14点で、全体の欠損率は33％である。なお、打ち欠き加工だけのものには判別しにくいものが多々あるが、ここでは明らかに人為的に打ち欠いたと考えられるものを対象とした。

形状により次のように分類した。

Ⅰ類……円形を呈するもの―― 全体の65％にあたる28点が出土した。

Ⅱ類……方形を呈するもの―― 全体の７％にあたる３点が出土した。

Ⅲ類……三角形を呈するもの―― 全体の28％にあたる12点が出土した。

加工方法により次のように分類した。

ａ類……全体及び一部を研磨加工しているもの―― 全体の23％にあたる10点が出土した。

ｂ類……打ち欠き加工だけのもの―― 全体の77％にあたる33点が出土した。

形状と加工方法との関係は、Ⅰa ４点、Ⅰb 24点、Ⅱa １点、Ⅱb ２点、Ⅲa ５点、Ⅲb ７点で、打ち欠き加工だけのものは選別基準が曖昧なものとなる感は否めないが、円形のものに比べ、方形、三角形のものは研磨加工率は高くなる。

文様は無文17点、縄文８点、沈線文６点、磨消縄文４点、撚糸文４点、連鎖状撚糸文３点、網目状撚糸文１点である。文様による選択はなされていないようで、当時利用されていた土器文様頻度が、円盤状土製品の文様頻度になるものと考えられる。また、文様と形状、加工方法による差異も認めがたい。

大きさは、最小2.8㎝、最大6.8㎝で、形状、加工方法の別なく、3～5㎝のものが多い。厚さは、最小厚0.5㎝、最大厚1.0㎝で、0.6～0.8㎝のものが多い。厚さもまた、形状、加工方法による差異はない。

土偶（第52図44）

右足部である。足の裏面は平坦で、土踏まずを表すかのような凹みがある。足の大きさは4.0×3.2㎝で、指の付け根の位置から周縁に沿って1条の沈線が巡る。焼成は良い。

茸形土製品（第52図45）

茸形土製品はかつてはスタンプ形土製品としたものの中に含まれる事が多かった。スタンプ形土製品は円形ないし楕円形の表面に簡単な沈線による文様がほどこされ、柄に小孔を穿ったものが多い。これに対し、本遺跡出土の土製品は沈線による文様、小孔ともなく、茸そのものを模倣したものと考えられ、茸形土製品として扱った。

「かさ」は円形を呈し、最大径2.5㎝、高さ3.0㎝、「茎」は最大径1.3㎝、高さ2.4㎝を計る。「かさ」はほぼ平坦で周縁部は薄く、部分的に欠け落ちている。「茎」はほぼ直立し、先細りしている。胎土は砂粒をやや多く含み、焼成は良い。

この土製品は当時食用に供していた茸の植生を反映したものと考えられる。茸形土製品の出土例は、秋田県鹿角市大湯遺跡、小坂町大地遺跡、杉沢環状列石遺跡、青森県大石平遺跡、韮窪遺跡等がある。

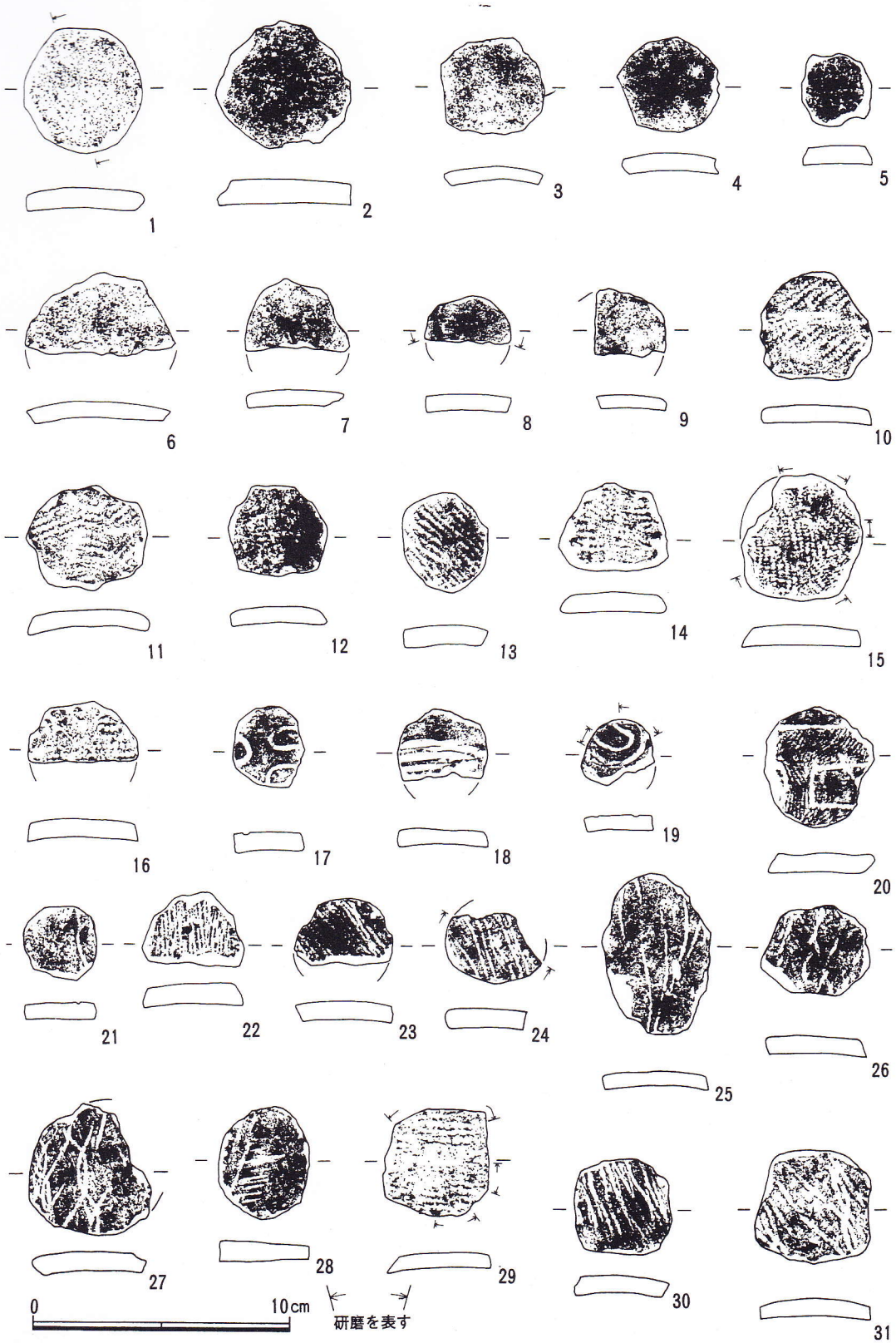
円盤状石製品（第53図1～3）

3点出土した。いずれも完形品で、打ち欠き加工だけのもの（1）と、全面を研磨加工しているもの（2、3）とに分けることができる。平面形は円形を呈し、大きさは、最大径3.6～3.7㎝、厚さ0.5～0.9㎝、重さ7.6～12.7g で、ほぼ同じような規格を呈する。石質は、全て泥質凝灰岩である。

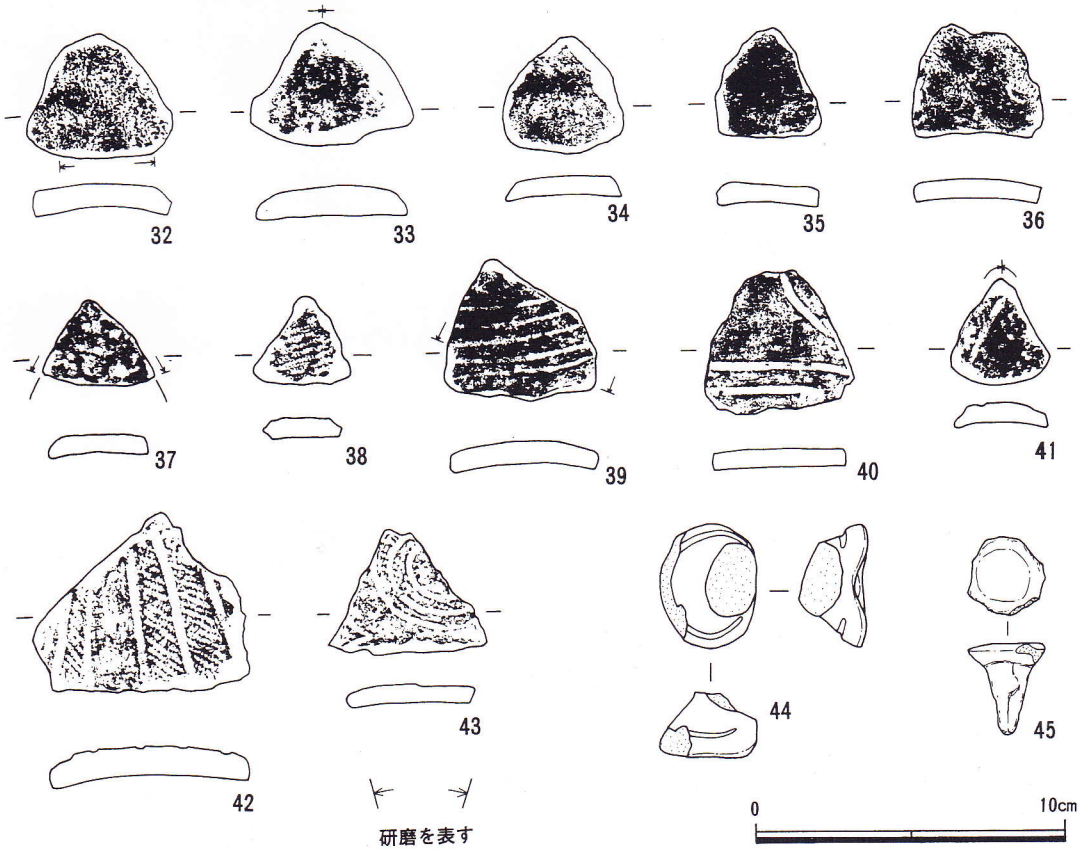
石剣（第53図4）

欠損品である。丹念な研磨によって板状に整形されている。柄幅1.9㎝、厚さ0.5㎝、現存長8.6㎝を計る。石質は粘板岩である。

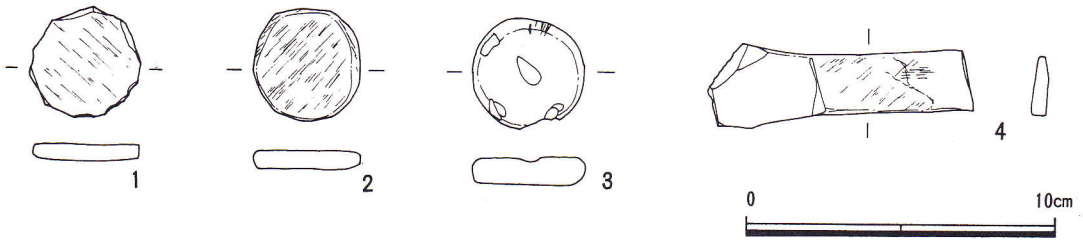
（佐藤　樹）



第51図　C区遺構外出土土製品実測図(1)



第52図　C区遺構外出土土製品実測図(2)



第53図　C区遺構外出土石製品実測図

第Ⅴ章　分析と考察

1．配石遺構群について

配石遺構については、調査報告書(2)において、1、2次調査の調査結果をまとめ、若干の考察を加えたが、今年度の調査結果を含め、再度分析と考察を試みたい。なお分析の対象とした遺構は、第1～3次調査で検出された配石遺構43基（未調査の9号配石を除く）である。

（1）　配石遺構の形態

配石遺構の形態については、次のように分類した。（第54図）

Ⅰ類……縁辺部に立石を巡らすもので、内・外部構造から4つに細分される。

a．縁辺部形態が楕円形を呈し、その内部に平石を数個置いたもの。

b．形態が楕円形を呈し、その内部中央に立石を立て、その隙間に平石を置くもの。

c．形態が円形を呈し、その内部に数個～十数個の平石を積み、さらに縁辺部外側に石を環状に巡らすもの。

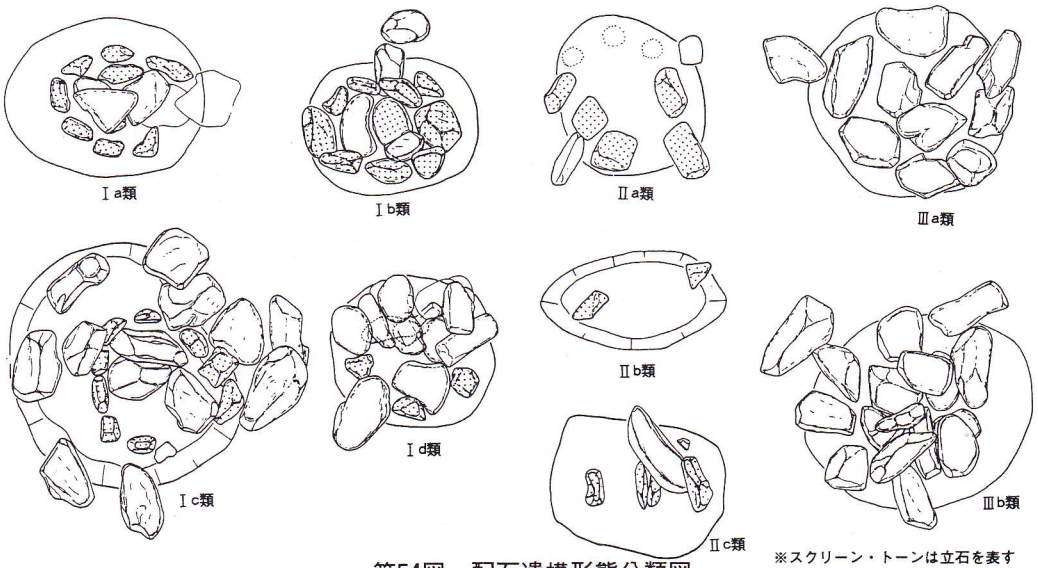
d．下部土壙の四方向に立石を立て、その内部に平石を数個置き、さらにその縁辺部に内部を覆うように斜めに立石を巡らすもの。

Ⅱ類……立石のみで配石が作られるもので、3つに細分される。

a．縁辺部に立石を楕円形に巡らすもの。（この類には、40号配石が該当する。しかしⅠa類の破壊過程のなかでこのような形態を作る可能性もある。）

b．配石下土壙の長軸両端に一対の立石を立てるもの。

c．配石下土壙の長軸両端に一対の立石を立て、そのほぼ中間（土壙中央部）に数個の小さな石を立てるもの。この類は今年度新たに検出した43号配石が相当する。



※スクリーン・トーンは立石を表す

第54図　配石遺構形態分類図

Ⅲ類……配石縁辺部に平石を巡らせるもので、２つに細分される。

ａ．石の長軸を連結させ、円形に一巡させるもので、その内部に石が雑然と積まれるもの。

ｂ．石の長軸を中心に向け、所謂放射状に置き、その内部には石が雑然と積まれるもの。

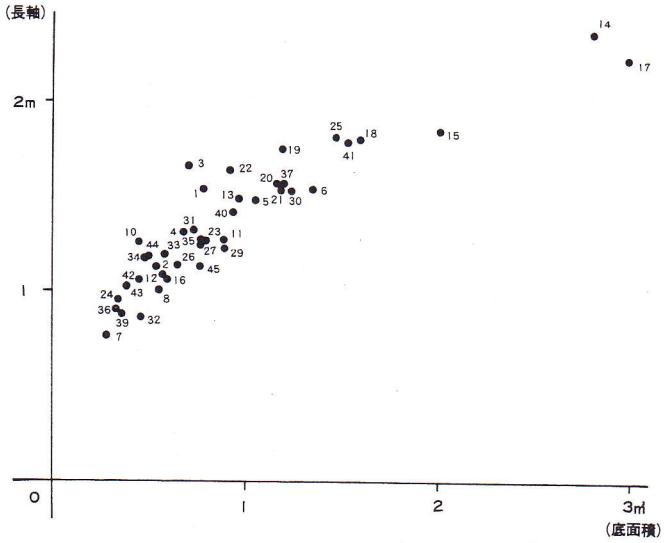
今年度、新たに10基の配石遺構が検出された。しかし、44号配石のように構築当時の様相を残すもの、35号配石のようにある程度まで復原できるものは数例である。これに対し破壊をうけ、分類、細分不可能なものが多い。

これまでに検出された配石遺構をもとに３型式９亜式に分類することができた。大概に配石の構造をみると、立石をもつもの（Ⅰ・Ⅱ類）と、平石のみのもの（Ⅲ類）とに、大別される。

（２）　配石下土壙の形態と規模

配石下に土壙が伴うか否か、これは配石の性格を考える上で非常に大きな比重を占めている。今年度、新たに検出した配石10基についても、配石下の調査を試みた。その結果10基すべてに土壙が伴うことが明らかとなった。

上部配石と下部土壙の位置は一致する。



第55図　配石下土壙長軸と底面積の相関図

土壙形態は、楕円形を呈するものが30基、円形11基、隅丸方形２基で、楕円形を呈するものが圧倒的に多い。楕円形のものには、配石平面形が楕円形を呈し、配石形態がⅠ、Ⅱ類のものが、円形のものには、配石平面形が円形、配石形態がⅢ類のものが伴う傾向がみられる。

第55図は、土壙長軸と底面積の相関関係を図化したものである。この図から、土壙長軸136㎝、底面積0.92㎡を境に規模を大小に二分することができる。なお最大のものは17号配石、最小のものは７号配石で、底面積にして約10倍の差をもつ。底面積が小型のものに配石形態Ⅰａ類が伴う傾向がみられる。

形態、規模及びその他の観察事項は第２表にまとめた。

（３）　配石下土壙の長軸方向

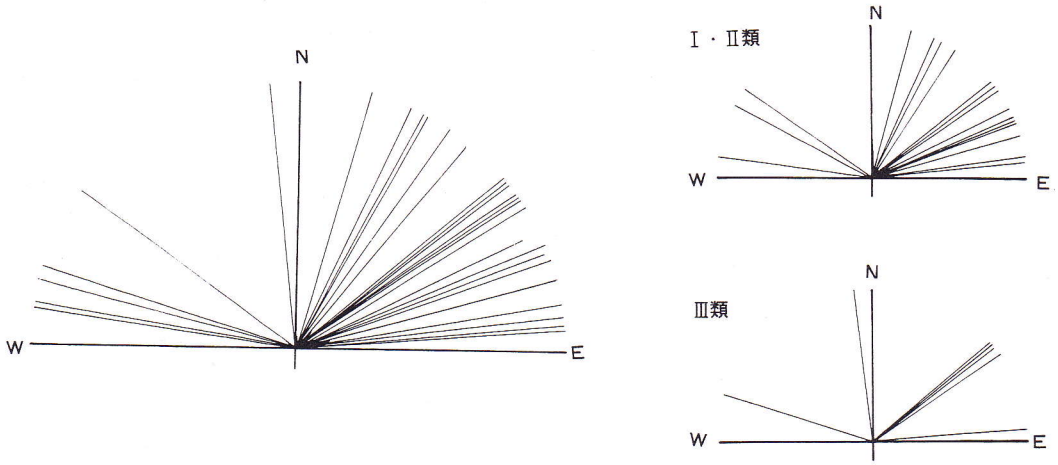
これまで調査された配石遺構のなかで、土壙長軸方向を知ることができる楕円形プランのもの32基を分析資料とした。

第２表　配石遺構観察表

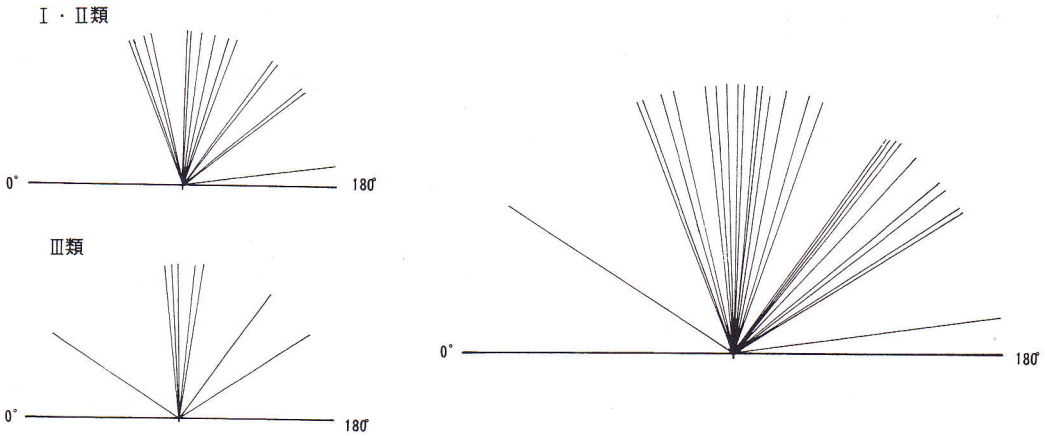
配石No.	確認地点	確認面	配石		土壙					出土遺物	備考
			形態	規模(cm)	平面形	規模(cm)	底面積(㎡)	長軸方向	赤色範囲		
1	P−10	Ⅲd	Ⅰa	109×62	楕円形	154×104×35	0.78	N−53°−E	×	土器片	
2	Q−12	Ⅲd	Ⅰa	(83×64)	楕円形	113×82×46	0.54	N−69°−E	×		
3	R、S−12		Ⅲa	(130×95)	楕円形	165×98×72	0.70	N−51°−E	○	漆塗木製品	
4	R−11	Ⅲd	Ⅰb	(150×90)	楕円形	131×90×70	0.67	N−63°−E	○		
5	R−11	Ⅲd	Ⅲa	(158×108)	楕円形	148×111×73	1.05	N−49°−E	○		
6	R−11、12	Ⅲd	Ⅲ	(径150)	円形	152×150×70	1.34		○	土器片	
7	R−12	Ⅲd	−	(径70)	楕円形	77×61×22	0.28	N−81°−W	○		
8	R−13	Ⅲd	Ⅲ	(径100)	円形	101×92×50	0.55		○		
9	B−14、15	Ⅲd	−	(91×70)							配石遺構群域外
10	P−10	Ⅲd	Ⅰa	115×71	楕円形	125×101×61	0.43	N−68°−E	×	ミニチュア土器、土器片	
11	R−10	Ⅲd	Ⅲa	120×115	円形	127×125×70	0.88		○	土器片	ピット７→本配
12	R−10	Ⅲd	Ⅰd	95×92	円形	108×101×55	0.56	(N−1°−E)	○	カメ棺	
13	R−10	Ⅲd	Ⅲb	(167×152)	楕円形	148×124×47	0.96	N−73°−W	○	土器片	ピット４→15配→本配
14	Q、R−9、10	Ⅲd	Ⅰc		隅丸方形	236×175×53	2.78	N−55°−E	○	土器片	ピット１→本配→15、17、18配
15	R−9、10	Ⅲd	Ⅲ	(径150)	円形	184×184×87	2.04		○	土器片	14配、ピット2、4→本配→13配
16	R、S−9	Ⅲd	Ⅰb	98×90	楕円形	106×84×52	0.60	N−51°−E	○	カメ棺	
17	Q、R−8、9	Ⅲd	Ⅰ	(200×150)	楕円形	223×202×72	2.89		○	石鏃13点、土器片	14配→本配→20配
18	R−10	Ⅲd	Ⅲ	(201×104)	楕円形	180×114×25	1.59	N−85°−E	×	深鉢形土器	14配、23配→本配
19	R−9	Ⅲd	Ⅲ		楕円形	175×92×26	1.19	N−7°−W	×	土器片	本配→23配→18配
20	R−8、9	Ⅲd	Ⅰc	198×185	楕円形	157×128×83	1.16	N−82°−E	○	土器片	17配→本配
21	R−8	Ⅲd	Ⅰc	(98×94)	楕円形	154×132×58	1.18	N−84°−E	○		
22	R、S−8	Ⅲd	Ⅲ	138×130	楕円形	164×115×67	0.91	N−54°−E	○		
23	R−9	Ⅲd	−		円形	124×115×81	0.76		○	土器片	19配→本配→18配
24	P−8	Ⅲd	Ⅰa	(70×50)	楕円形	95×63×54	0.34	N−82°−W	×	土器片	
25	R−8、9	Ⅲd	Ⅰ		楕円形	181×158×60	1.46	N−28°−E	○	土器片	
26	S−9	Ⅲd	Ⅱb		円形	113×103×55	0.65	(N−33°−E)	○	土器片	
27	P、Q−13	Ⅲd	Ⅰa	(73×67)	楕円形	124×98×28	0.78	N−66°−E	○		
28	Q−13、14	Ⅲd	Ⅰ(a)		楕円形	(　)×92×38			○		
29	R−7、8	Ⅳ上	−		楕円形	123×102×57	0.88	N−76°−W	○	土器片	昭和51年Ｘ地域７号遺構
30	R−7	Ⅳ上	Ⅲa		楕円形	153×119×72	1.24	N−50°−E	○	石鏃１、壺形土器	昭和51年Ｘ地域６号遺構
31	R−8	Ⅲd	Ⅲ		円形	132×120×61	0.71		○		
32	R−12	Ⅲd	Ⅰ	(70×54)	円形	86×82×44	0.45		×		
33	R、S−11	Ⅲd	Ⅲ		楕円形	118×100×51	0.58	N−49°−E	×		
34	S−12	Ⅲd	−		楕円形	112×82×35	0.53	N−57°−E	○		
35	Q−4、5	Ⅳ上	Ⅰa	(105×73)	楕円形	127×94×40	0.77	W−E	○		
36	R、S−6、7	Ⅳ上	−		円形	90×83×50	0.33	(N−38°−E)	×	土器片	昭和51年Ｘ地域３号遺構
37	R−7	Ⅳ上	Ⅰ		楕円形	157×117×64	1.18	N−27°−E	○		昭和51年Ｘ地域２号遺構
欠38											
39	R−7	Ⅳ上	Ⅰa		楕円形	88×62×41	0.34	N−55°−E	×	土器片	昭和51年Ｘ地域５号遺構
40	R−7	Ⅳ上	Ⅱa	(160×102)	楕円形	143×105×55	0.93	N−55°−W	○	土器片	昭和51年Ｘ地域４号遺構
41	Q、R−4	Ⅲd	Ⅰ	(175×　)	楕円形	179×146×67	1.50	N−24°−E	○	土器片	
42	Q−6	Ⅳ上	−		円形	106×96×33	0.45	N−37°−E	×		
43	R−2	Ⅲd	Ⅱc		隅丸方形	103×74×38	0.38	N−74°−E	×	土器片	
44	S−3	Ⅲd	Ⅰa	80×75	楕円形	118×82×66	0.50	N−15°−E	○	土器片	
45	R−6	Ⅳ上	−		楕円形	113×102×25	0.76	(N−79°−E)	×	土器片	

第56図は、磁北からの長軸方向のズレを図化したものである。土壙長軸は、東北東方向を中心にN－49°～85°－Eの36度の範囲に19基（これをNE群とする）、北西～西方向のN－54°～82°－Wの28度の範囲に5基（NW群）が集中する傾向をみせるほか、北～北東方向を向くものが数基みられる。言い換えると土壙長軸が北北西方向（または南南東方向）を向くものが存在しないことが指摘される。NW群を180度回転させると、長軸方向はN－7°－W～E－36°－Sの133度の範囲に納まる。これを配石形態別に分解すると、Ⅰ・Ⅱ類はN－51°～79°－Eの28度の範囲内に、Ⅲ類はN－49°～55°－Eの範囲内に集中する傾向がある。

第57図は、配石遺構が弧または円を画く配置を示すものとして、その中心を求め、それによって得られた求心線（遺構と中心を結ぶ線）と長軸方向のズレを図化したものであり、0度または180度に近い程求心線と同一方向を、90度に近い程求心線に対し直交することを意味する。



第56図　磁北にみる下部土壙の長軸方向



第57図　求心性にみる下部土壙の長軸方向

この図から、求心線に対し直交及び直交に近い角度をとるもの（69度～109度、20基）、求心線とほぼ同一方向を向くもの（172度、1基）、求心線に対しいずれかの方向に45度ズレるもの（33度、125度～145度、11基）が存在することがみてとれる。これらを配石形態別にみると、Ⅰa類は24号配石を除き、またⅢa類の多くのものが求心線に対し直交する傾向にある。

このように、配石下土壙長軸が、磁北からのズレ、求心線からのズレとも、ある範囲内に集中することは、土壙長軸方向が任意に決められたものではないことを示すものと思われる。しかし、いずれを意識したものなのかは、この分析結果から判断することができなかった。

（4） 配石遺構の性格

これまでに検出された配石遺構43基（未調査の9号配石を除く）の下には、規模の大小こそあれ土壙が伴うことが判明した。土壙の規模はいずれも埋葬可能なものであり、堆積土は人為的に埋め戻された状況を示している。さらに数例ではあるが土壙底面より副葬品と思われる漆塗木製品や石鏃、カメ棺と思われる土器が出土し、墓としての性格を示唆している。

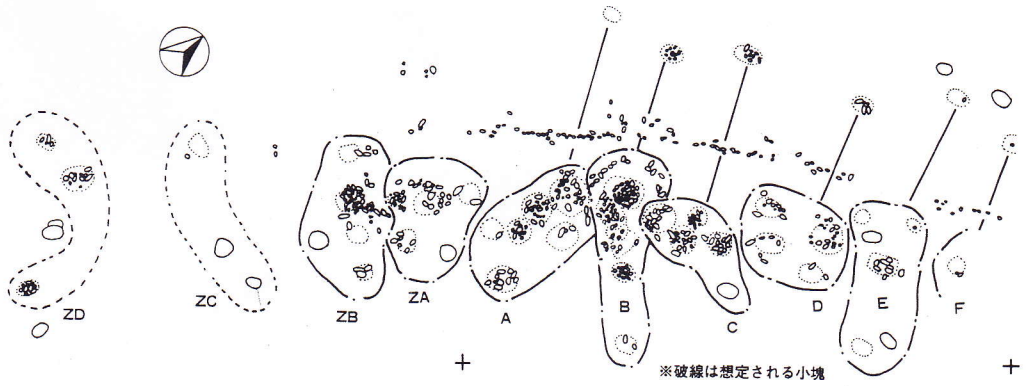
第1、2次調査において、配石の性格を科学的分野から追求することを目的に、配石下土壙内の土壌及び12号配石下土壙出土の壺形土器底部破片の残存脂肪酸分析を、帯広畜産大学、中野益男氏に依頼した。その結果、配石下土壙より採取された資料からは、遺構外より採取された対比資料に比べ、高等動物に特徴的な脂肪酸であるリグノセリン酸（高級飽和脂肪酸、炭素数22以上）が比較的高い割合で検出されたほか、ステロール組成においても動物固有のコレステロールが検出されたことから、配石下土壙内には、高等動物に属する遺体が埋葬されていた可能性があると認定された。また壺形土器胎土内の脂肪酸組成は、オレイン酸、パルミチン酸が約60％を占め、動物・ヒトの脂肪酸パターンに非常に類似し、ステロール組成においても動物固有のコレステロールが組成全体の約70％を占めていることから、土器内には高等動物の遺体が内存していた可能性が極めて高いと認定された。

以上のことから、配石遺構は「配石墓」、配石下土壙出土の壺形土器は「カメ棺」と判断されるに至った。今年度新たに検出された配石遺構についても、下部土壙の存在、堆積状況、規模などから総合的に判断し、昨年と同様の性格と考えられる。

なお、土壙の規模が、長軸160㎝以上、底面積1.40㎡以上と大型のものが数基存在する。鈴木尚氏の研究によると、縄文人の平均身長は男性で160㎝弱、女性で150㎝弱と推定されている。周辺遺跡での埋葬姿勢が縄文時代に一般的にみられる屈葬とすると、その規模が極めて大きい事から、中期末から後期にかけて類例を増す伸展葬も行われたと考えられる。

（5） 配石遺構の配置

これまでの調査において、配石遺構群は配石遺構43基、弧状列石1条、さらには数基の土壙を含んで構成されている。



第58図　配石遺構群と小塊

小塊＼形態	外帯	内帯												
	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰb	Ⅰc	Ⅰd	Ⅰ類	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱ類	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲ類	不明
ZD		44				41			43					
ZC		35												
ZB						37								36、42 45
ZA		39					40				30			29
A	24			20、21		17、25							22、31	
B	10		16	14				26					18、19	23
C	1				12						11	13	15	
D	2		4								5		6、33	
E	27					32					3			7、34
F	(28)												8	

※ 数字は遺構No.を示す。

第３表　各小塊を構成する配石形態表

配石遺構群は、弧状列石を境として外帯と内帯とに区画される。これを分解すると、外帯の配石１基とこれに対応する内帯配石４～６基（土壙を含むものもある）で小塊を構成するもの６小塊（Ａ～Ｆ）と、内帯配石のみで構成するもの４小塊（ＺＡ～ＺＤ）の計10小塊に分割できる（第58図）。これら小塊は若干の間隔を保ちながら大きな弧を画くように連続している。各小塊内の配石平面の広がり、配石下土壙の配置をみると、小塊間にはある程度の間隔が存在するにもかかわらず、その内部で切り合いを示すものがある。これは配石の構築場所が任意でなく、その範囲がかなり限定されていたことを示しているものと思われる。すなわち周辺遺跡においては、すでに墓域の形成がみられ、これらはいくつかの小塊（埋葬区）に区画されていることが看取された。

次に、各小塊内の配石形態の分布（第３表）をみると、Ａ～Ｅ小塊では外帯にⅠa 類を、内帯にⅢa 類が存在（Ａ・Ｂ小塊内にⅢa 類と確実に判断されるものはないが、Ⅲ類としたもの

の内にⅢa類としたものが含まれている可能性がある）し、相関関係にある。また外帯配石をもたないＺＡ～ＺＤ小塊ではⅠa類（ＺＢ小塊にⅠa類と確実に判断されるものはないが、Ⅰ類又は不明としたものにⅠa類に属するものが含まれている可能性がある）がいずれも内在する。

配石遺構群は、その南西側で分布密度を薄くする傾向にある。その要因が何であるかは今回の調査で明らかにすることができなかった。

（６）　配石墓の時期

第２次調査において、配石下土壙から出土したカメ棺土器や、配石近傍からの出土土器は、いずれも大湯式の特徴をもつものである。今年度も44号配石の配石内より磨消縄文による入組状曲線文が横位に展開される浅鉢形土器が出土しているほか、遺構検出面からも大湯式の特徴をもった土器が出土している。

以上のことから、配石墓は縄文時代後期前葉につくられ、配石遺構群域（墓域）が形成されたと考えられる。

（７）　弧状列石について

弧状列石は、人頭大ほどの不規則な形状で扁平な石を数個から十数個程を線状に配列したものが、列石を作る１単位となり、これらが断続的に連なっている。この単位はＡ～Ｆ小塊内に存在し、小塊内を二分している。この列石の性格は、配石遺構群を外帯と内帯とに区画していることから、墓域、埋葬区の区画を目的にしたものと考えられる。大湯万座、野中堂環状列石の外帯と内帯間に存在する空閑地帯や、岩手県下村Ｂ遺跡にみられる溝状遺構に相当するものであろう。

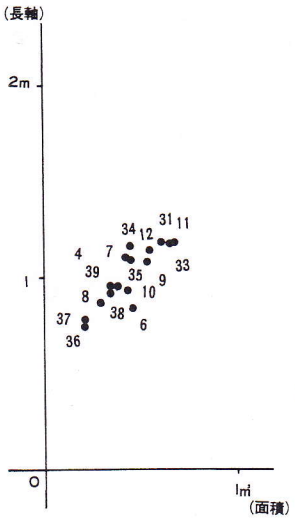
今年度の調査において、弧状列石がＺＡ小塊以西で見られなくなる。この列石の続きの検出を試みたが、石及び石の抜き取り痕は検出されなかった。列石の在存する位置をみると内帯と外帯の区画を必要とする位置にあることから、ＺＡ小塊以西ではもともと存在しなかったものと考えられる。なお、弧状列石の構築時期は、配石遺構群とほぼ同時期と思われる。

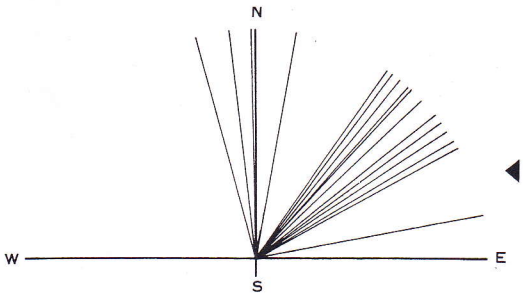
（８）　土壙について

土壙は、これまでの調査において20基が検出された。この項では配石遺構群域及び近傍に存する16基（５号土壙を除く）について分析する。

土壙は、弧状列石を境に、その北側（外帯）に２基、南側（内帯）に14基が分布し、内帯にあるものは、その最も近くにある小塊（埋葬区）に含まれるものもある。

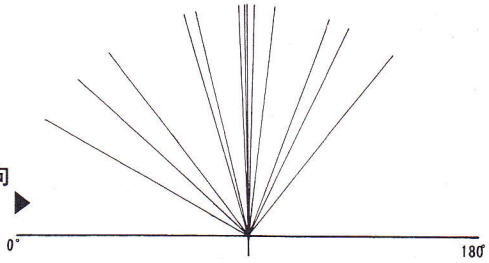
土壙平面形は、楕円形を呈するものが14基と多く、円形が２基存在する。規模（第59図、第４表）は33号土壙を最大とし、36号土壙を最小とし、その底面積の差は３倍で、配石下土壙と比べると、その差が小さいことがわかる。第60図は、土壙長軸方向を図化したもので、北東方向を向くものが11基、北方向を向くものが３基で、北西を中心とした方向（この方向を180度





◀第60図
磁北にみる
土壙の長軸方向

第61図
求心性にみる
土壙の長軸方向



第59図　土壙長軸と底面積の相関図

土壙名	確認地点	確認面	土壙					出土遺物	備　考
			平面形	規　模　cm	底面積㎡	長軸方向	赤色範囲		
1	K－13	Ⅳ上	方　形	120×100×30		N－41°－E	×		時期不明
2	I、J－11	Ⅳ	楕円形	222×152×34	0.62	N－9°－E	×		
3	M－9	Ⅳ上	円　形	86×74×70	0.32		×		時期不明
4	T－9	Ⅳ上	楕円形	96×74×34	0.35	N－10°－E	×	土器片	
5	R－10	Ⅲd	楕円形	90×70×24		N－17°－W	×		時期不明
6	R－7	Ⅳ上	円　形	84×78×19	0.46		×	土器片	
7	S－10	Ⅳ上	楕円形	110×76×44	0.44	N－51°－E	○	土器片	
8	P－13	Ⅳ上	楕円形	87×53×39	0.29	N－41°－E	×		
9	R－12	Ⅳ上	楕円形	108×65×26	0.53	N－38°－E	×		
10	S－12	Ⅳ上	楕円形	93×70×25	0.44	N－42°－E	×	土器片	
11	S－12	Ⅳ上	楕円形	118×93×38	0.68	N－53°－E	○		
12	P、Q－13、14	Ⅳ上	楕円形	114×(75)×28	(0.55)	(N－58°－E)	○		
31	R－5	Ⅳ上	楕円形	118×92×23	0.61	N′－7°－W	×	土器片	
33	R－6	Ⅳ上	円　形	118×112×60	0.65		×		
34	R－3	Ⅲd	楕円形	115×77×31	0.45	N－34°－E	×		36土→34土
35	T－3	Ⅲd	楕円形	109×76×37	0.45	N－56°－E	×	土器片	37土→35土
36	R－3	Ⅲd	楕円形	75×55×38	0.21	N－36°－E	×		36土→34土
37	T－3	Ⅲd	楕円形	78×(55)×35	0.21	N－61°－E	×	土器片	37土→35土
38	S－3	Ⅲd	楕円形	92×64×37	0.34	N－1°－W	×		
39	S－5	Ⅳ上	楕円形	96×70×34	0.38	N－46°－E	×	土器片	

第４表　土壙観察表

回転した場合は南東を中心とした方向）を向くものが存在しないことが指摘される。第61図は、求心線とのズレを図化したもので、そのズレは35度～135度の100度と広い範囲に分布する。わずかに90度付近に集まる傾向を示すが、求心線と一致するものがない。このように土壙長軸

の磁北からのズレ、求心線からのズレともある程度の傾向をつかむことができるが、いずれを意識したものかは判断できなかった。

土壙の性格は、その位置が限定された区域内（墓域）に存在すること、埋葬可能な規模であること、堆積が人為的であること、さらに残存脂肪酸分析を実施した７号土壙においても、配石下土壙の分析結果ほど顕著ではないにしても動物遺体の存在の痕跡が認められ、配石と同じ性格のものと推測されている。以上のことから、配石遺構群域内及び近傍に位置するものは土壙墓と考えられる。

これらの時期は、小塊内に含まれるものは配石と同様の縄文時代後期前葉に、その他のものは、その出土土器から後期初頭～中葉と考えられる。（藤井安正）

２．大湯環状列石周辺について

大湯環状列石の近傍はどうなっているのか、関連する遺構があるのではないか、この問題については大湯環状列石の構造、性格、構築時期等の解明と相まって、古くから関心が持たれ、環状列石のみならず、その周囲にまで調査の手が延ばされている。さらに昭和48年から51年にかけては、関連ある遺構、遺跡の広がりを把握するため、30万㎡に及ぶ範囲の分布調査が実施されている。また、昭和59年からはこれらの調査により確認された遺構の性格、配置等を解明することを主目的に面的な発掘調査が継続されている。

しかし、今日までに発掘された総面積（両環状列石部分を含む）はわずか10,500㎡で、対象面積25万㎡[注1]中4.2％にすぎない。また周辺遺跡のほとんどが果樹園や耕作地であること等調査に制限があり、全域に及ぶ均一な調査とはなっていない。このため、環状列石周辺を論ずるにはまだまだ資料不足ではあるが、これまでに調査された地点及びその検出遺構をまとめ、遺構の分布状況を概観したい。

（１）　調査地点とその検出遺構

ｉ．17年の調査地と検出遺構

大湯環状列石の大規模な発掘は、昭和17年の神代文化研究所による発掘に端を発する。この調査は考古学的研究とは別の目的をもって実施されたものであり、調査方法、記録、分析等に問題を残しながらも、ほぼ大湯環状列石の構造を解明できたこと、これ以降の調査の口火となった事等から軽視できない。

調査は両環状列石に主力が注がれたが、さらにその周囲にまで調査の手を延ばし、万座環状列石西方に２ヵ所、北方に１ヵ所、野中堂環状列石北方に１ヵ所、南方及び西方に３ヵ所の試掘抗が設定されている。これらの調査の概要を記した「中通遺跡発掘日誌」[注2]や『神代文化』第47号によると、万座環状列石西方に設定された２ヵ所の試掘抗中１ヵ所の試掘抗からは「究状

土壙」数基が、北方の試掘抗内、万座外縁より約８間（14.6m）の地点からは東西方向に延びる幅３尺（90cm）余の直線状の列石が確認されている。調査者の一人である吉田氏はその報告書の中で、「幾分地点により屈曲する部分もあって如何なる構造になるかは尚ほ未発掘の部分あることと、相まって明らかにすることはできないが、少くとも延長30間を数えるという。」[注3]と述べ、さらに「尚ほ其の延長上の西方に又別に矢張り円環状を成すと思われる１条の列石があるが…」と別の環状列石の存在を指摘している。また野中堂環状列石周辺に関しては、列石の北側外縁から「６、７間を距る正北にあたる地位」から「深さ５尺内径４尺に近き定洞（尤も掘返し土充満）カメ型の穴」１基が、南方及び西方に設定された３ヵ所の試掘抗のうち１ヵ所からは「究状土壙」１基が検出されている。

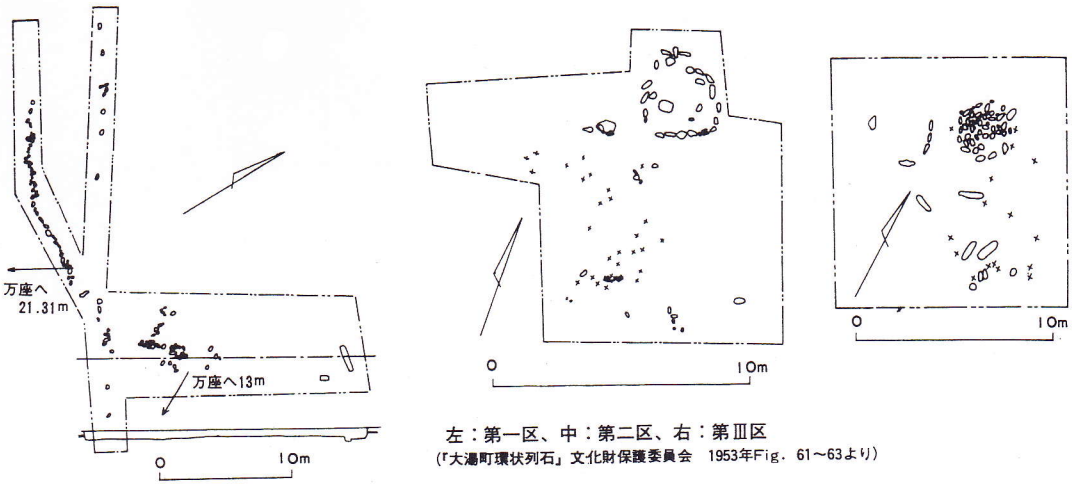
これらの遺構の位置は、その記述が曖昧であり、正確な遺構配置図も作成されておらず、特定できない。ただ万座の直線状列石、西方試掘内の１基の「究状土壙」及び野中堂北方の「カメ型穴」については「中通遺跡発掘日誌」中の概略図にその位置が記されており、昭和26、27年作成の環状列石実測図、51年作成の特別史跡大湯環状列石現況地形図等との調整により次のように、そのおおよその位置を推定できる。

すなわち、直線状列石は、万座環状列石中心から北方（N－27°－E）37mの地点に位置し、その延びる方向は東－西方向、「究状土壙」の位置は万座環状列石中心から南西方向（N－160°－W）の33m前後の地点である。一方、野中堂北方の「カメ型穴」については野中堂環状列石中心から北方（N－14°－W）33m前後の地点と推定できる。

なお、「究状土壙」、「カメ型穴」と記載されている遺構は、その略図から現在フラスコ状土壙（ピット）や袋状土壙と呼称されている遺構に相当するものと考えられる。

ⅱ．21年の調査地と検出遺構

昭和21年に甲野　勇、後藤守一氏らにより実施された調査は、その目的が「環状列石を構築した住民の住居跡と文化をあきらかにし、ついでに列石内部を再検し、その性質を究明すること」にあったため、列石周辺の調査に主力が注がれ、万座環状列石周囲に数ヵ所の発掘区が設定されている。その発掘区については甲野氏の報文[注4]では「万座地区の環状列石を中心に、その西側の第１地区、北側の崖に接する第２地区、これと列石との中間の第３地区～」であるのに対し、後藤氏の報文[注5]では「万座組石群の北辺に一区画（第一区）、西辺に三区画を定めて～西辺の三区画の中では、大湯川段丘面に近いものを第二区とし、組石群の西側に近接のものを第三区、その第二区と第三区との中間にあるものを第四区とした」とその記述に違いがみられる。後藤氏の報文中の第一区の遺構配置図を考慮すると、後者の方が正しいものと考えられる。すなわち、甲野氏の報文中の西を北に、北を西に読み替え、さらに第３地区を組石群の西側に近接した位置とする必要がある。これらの発掘区は、そのおおよその位置は知り得ても、正確な



左：第一区、中：第二区、右：第Ⅲ区
（『大湯町環状列石』文化財保護委員会　1953年Fig．61～63より）

第62図　昭和21年調査地遺構配置図

方向、距離の記載がなく、第一区以外その位置を配置図に記することはできない。なお、第一区は万座環状列石中心から北東（N－39°－E）37mの地点に位置づけられる。

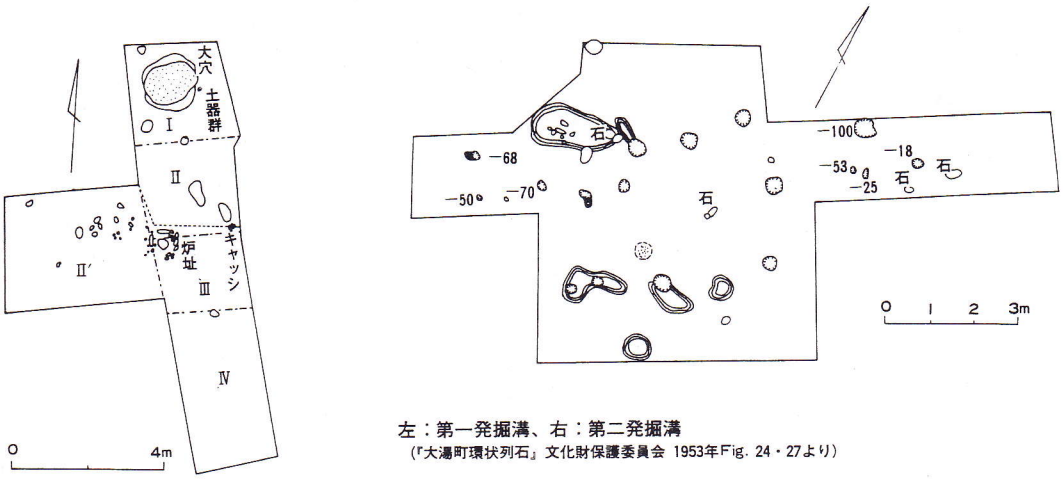
さて、第一区からは「径が一米に近い不整円形に囲んだ炉跡」、「石列」、「貯蔵穴と思われる溝」等が検出されている。「石列」は、その位置が17年の調査で確認された直線状列石に近接し、同一あるいは関連ある遺構と考えられる。また、炉跡の北東12m程に位置する「貯蔵穴と思われる溝」は、図で見る限りはその深さが50cm程と浅く不安は残るが、その平面形状から現在Tピットと呼ばれている遺構と考えられる。

西側の崖際の第二区からは、径3m程の「ほぼ円形をなす石列」が検出され、その中に「単に地を掘りさげたばかりの炉跡」が確認されている。また、この石囲いの南西側からは多数の後期の土器等の出土があった。第三区からは「組石遺構」1基が検出され、その南東側からはやはり多量の後期の遺物の出土をみている。なお第四区からは、遺構は検出されていない。

以上は、後藤氏の報文及び挿図の内容であるが、甲野氏の報文(注6)ではさらに第三区の組石遺構の南東側から焚火跡が見出されたとあり、第一～三区の炉跡及びその周辺を住居跡と推定し、平地住居の可能性を示唆している。また遺跡の時期については、縄文時代後期の初め頃から中頃にかけて営まれたものとしている。なお、同時に実施された環状列石内部の調査については、「この部には多少の遺物の出土を見るが、住居跡のようなものは全くなく、また立石下の地中にもなんらの埋蔵物も発見されなかった」とあり、環状列石の性格について「呪術のために、長年にわたって築かれた一種の霊域であったかもしれない」と推察している。

ⅲ．26、27年の調査地と検出遺構

昭和26、27年の調査は文化財保護委員会によって実施され、斎藤　忠、後藤守一、八幡一郎氏らが調査に参加している。26年の調査は「列石の全貌をあらわし、実測、写真撮影を行なうこと」等列石内の調査に主力が注がれたが、27年には組石遺構の下底部の調査とともに、万座環



左：第一発掘溝、右：第二発掘溝
（『大湯町環状列石』文化財保護委員会 1953年Fig. 24・27より）

第63図　昭和27年調査地遺構配置図

状列石近接地域の調査が行われている。この調査結果については八幡一郎氏により「万座遺跡近接地域の調査」としてまとめられ、『大湯町環状列石』に収録されている。それによると、発掘溝は万座環状列石の南部及び北部の各一条で、南部に設けた発掘溝を第一発掘溝、北部のものを第二発掘溝としている。

第一発掘溝は「万座遺構の外縁に設けた木柵から南へ凡そ四米の辺を起点とし、幅2.5米、長さ11米の南北方向の溝」で、その北端部分より「大穴」、ほぼ中央より石囲炉跡1基が検出され、東端から硅質岩片30余点が集積した状態で出土している。「大穴」は「幾分下拡がりになり、底は丸底」となるもので、口径1.50〜1.60m、最大胴径1.75〜1.80m、深さ80cmを計る。フラスコ状土壙と同一のものと考えられる。

第二発掘溝は「外柵から北へ凡そ四米を起点として、ほゞ西南から東北方向に、幅二米、長さ十四、五米」の溝で、さらにそのほぼ中央部を左右に数m拡張している。またこの発掘溝東北端と21年調査の第一区までの距離が僅か1mにすぎないことが記されている。本発掘溝中央部からは1軒の住居跡が確認されている。

Ⅳ．48〜51年の調査地と検出遺構

昭和48年から51年にかけては、第Ⅱ章1で述べたような経緯で、大湯環状列石周辺のかなり広範囲にわたる分布調査が行われている。

48年の調査は、万座環状列石の南西方向94〜346mの地区と野中堂環状列石の南方向261〜478mの地区の分布調査の他に2地点の部分的発掘が行われている。Ⅰ地点は万座環状列石中心から西方（N−105°−W）59m、Ⅱ地点は同列石中心から北方（N−1°−W）160mの地点で、いずれからも遺構は確認されていないが、多数の遺物の出土があり、近傍に住居跡の存在を予想している。

49年の調査は、両環状列石周囲をかなり広く調査（20万㎡）しているが、そのほとんどは表

面採取及びボーリング調査であり、発掘された総面積は、万座環状列石の南西方向94～346ｍの地区内に任意に設定された２×２ｍの地点発掘６ヵ所、２×５ｍのトレンチ２ヵ所を含め、わずか342㎡であった。グリッド地区とした発掘区は、万座環状列石中心から西方向（N－96°－W）52～66ｍの距離で204㎡を、トレンチ地区は同列石中心から北方向（N－1°－W）86～105ｍの距離で49.5㎡が発掘されている。グリッド地区からは多量の後期の遺物の出土があったが、遺構は検出されていない。トレンチ地区からは多量の後期の遺物と礫を出土、２ヵ所の焼土が確認されている。また、大湯環状列石周辺の航空写真に写る性格不明な小さな白い円と遺構との関連を調べるため、十和田営林署苗畑内（８×５ｍ）とその隣接地（３×1.5ｍ）を発掘しているが、両トレンチからは遺物も遺構も確認されていない。

50年には、両環状列石の近傍から北東280ｍの間の45地点の地点発掘（1.5×1.5ｍ）と、万座環状列石中心から北方向（N－２°－E）166～189ｍの地点（C地区）162㎡及び野中堂環状列石中心から北東方向（N－49°－E）160～168ｍの地点（E地区）45㎡の面的発掘が行われた。45地点の地点発掘ヵ所中、配石遺構が確認されたのは７ヵ所、遺物のみの出土及び性格不明の遺構の検出されたのは14ヵ所である。C地区からは４基の配石遺構と１軒の縄文時代後期の住居跡が検出されている。またE地区からは、その南東端のグリッドより幅１ｍ、深さ45cmの南東－北西方向に延びる溝が確認され、数点の遺物が出土している。

51年には、野中堂環状列石中心から北東約288ｍの地点（現調査A区）の２つの調査区（X地域：10×20ｍ、Y地域：９×10ｍ）の面的発掘と、両環状列石の北東160～450ｍ間の47地点、西側及び東側の37地点の計84地点の地点発掘（２×２ｍ）が行われている。地点発掘84ヵ所中遺構の確認されたのは14ヵ所で、古代の竪穴住居跡２軒、溝状土壙（Tピット）４基、配石遺構３基等が検出されている。またX地域、Y地域からは配石遺構、土壙等計10数基の遺構が確認されている。

Ⅴ．56年の調査地と検出遺構

史跡見学者用便所の増築に伴う調査[注7]で、野中堂環状列石中心から北方向（N－11°－E）36mの地点の3.2×６ｍを発掘、その南東端より土壙、フラスコ状土壙それぞれ１基が検出されている。いずれも出土遺物より縄文時代後期前葉に位置づけられる。

Ⅵ．59～61年の調査地と検出遺構

59～61年の調査は、その調査目的からかなり広い面的発掘が行われている。A区は野中堂環状列石中心から北東方向（N－48°－E）246～306ｍの地点（4067㎡）、B区は同環状列石中心から北北東方向（N－22°－E）32～48mの地点（550㎡）、C区は万座環状列石中心から東北東方向（N－69°－E）80～144ｍの地点（817㎡）である。A区、C区の検出遺構及びその配置等については本書に掲載しているので、重複をさけるため、ここでは省略する。

B区からは縄文時代のフラスコ状土壙7基、Tピット2基、土壙7基、焼土遺構3基、時期不明の土壙1基が検出されている。これらの遺構のほとんどは同心円（環）状に分布し、その外径は36mである。

（2） 大湯環状列石周辺の遺構の分布

昭和17年から61年までに発掘された調査区及び検出遺構をまとめると第64図のようになる。51年の調査までの調査区、検出遺構については、周辺遺跡発掘調査報告書（1）に遺跡の範囲と分布調査結果として図化しているが、いくつかの誤りや不足部分があったために、この機会に訂正、補足した。なお、遺構の相対的位置関係を把握できるよう位置の不明確な発掘区や遺構は除外した。また地点発掘ヵ所や図示できないほど小範囲の発掘区は点（丸印）として表現した。

この図でもわかるように、調査は均一に行われている訳ではなく、未調査範囲が広い地域もある。しかし、遺構、遺物がかなり広く分布すること、均一に遺構が分布せず、いくつかの地域に群集する傾向をつかむことができる。地点発掘間隔が広いことから、それぞれの群の広がりは明確にできないが次のような群が考えられる。

Ⅰ　野中堂、万座両環状列石近傍

Ⅱ　万座環状列石の北北西方向の配石遺構の群集する地域

Ⅲ　野中堂環状列石の北東方向の配石遺構群を中心とする地域

Ⅳ　万座環状列石南方の大湯種苗事業所地内配石遺構検出地域

Ⅴ　両環状列石の北東及び北方向の歴史時代の竪穴住居跡を中心とする地域

（3） 各遺構群域の遺構の配置

Ⅰ群とした両環状列石近傍は比較的面的調査が行われている。万座環状列石近傍からは、17、21、27年の調査により、縄文時代後期の住居跡1軒、住居跡との関連が考えられる炉跡、焚火跡3基、フラスコ状土壙2基以上、配石遺構、Tピット、直線状列石それぞれ1基が検出されている。住居跡、炉跡、焚火跡、フラスコ状土壙は、環状列石中心から29～44mに位置し、フラスコ状土壙は南～南西側の発掘区から検出され、北東側の2つの発掘区からは検出されていない。一方、住居跡、炉跡等は北東側の2つの発掘区、南側及び北西側の発掘区から検出されている。

これらの遺構が万座環状列石を中心とし、同心円あるいは円環状に一巡するか、さらに野中堂環状列石とも関連する配置となるかは、野中堂、万座環状列石間の調査が行われておらず、不明である。

野中堂環状列石北側近傍からは、17、56、61年の調査によりフラスコ状土壙9基、土壙9基、Tピット2基、焼土遺構3基が検出されている。Tピットと時期不明の土壙1基を除くすべて

の遺構は環状列石中心から45m内に分布し、36m内の分布密度が高い。万座環状列石近傍の遺構分布状況を考慮すると、野中堂においても、住居跡、フラスコ状土壙等から成る居住区域が、環状列石を中心とする同心円（環）状に分布するものと考えられる。

Ⅱ群とした万座環状列石の北北西方向69～144mの地域からは配石遺構4基以上、住居跡1軒、焼土状遺構2基等が検出されている。この周辺の調査は、ほとんどが地点発掘であり、その間隔が広いため、遺構の配置の規則性や相関関係はつかめない。地点発掘により検出された4基の配石遺構を中心とする同心円（環）状の配置か、斜面中に源泉を有する台地縁辺部に集中する配置と考えられる。なお、21年調査の第二区の住居跡と考えられている炉跡を有する「石囲い」も本群に位置づけられる。

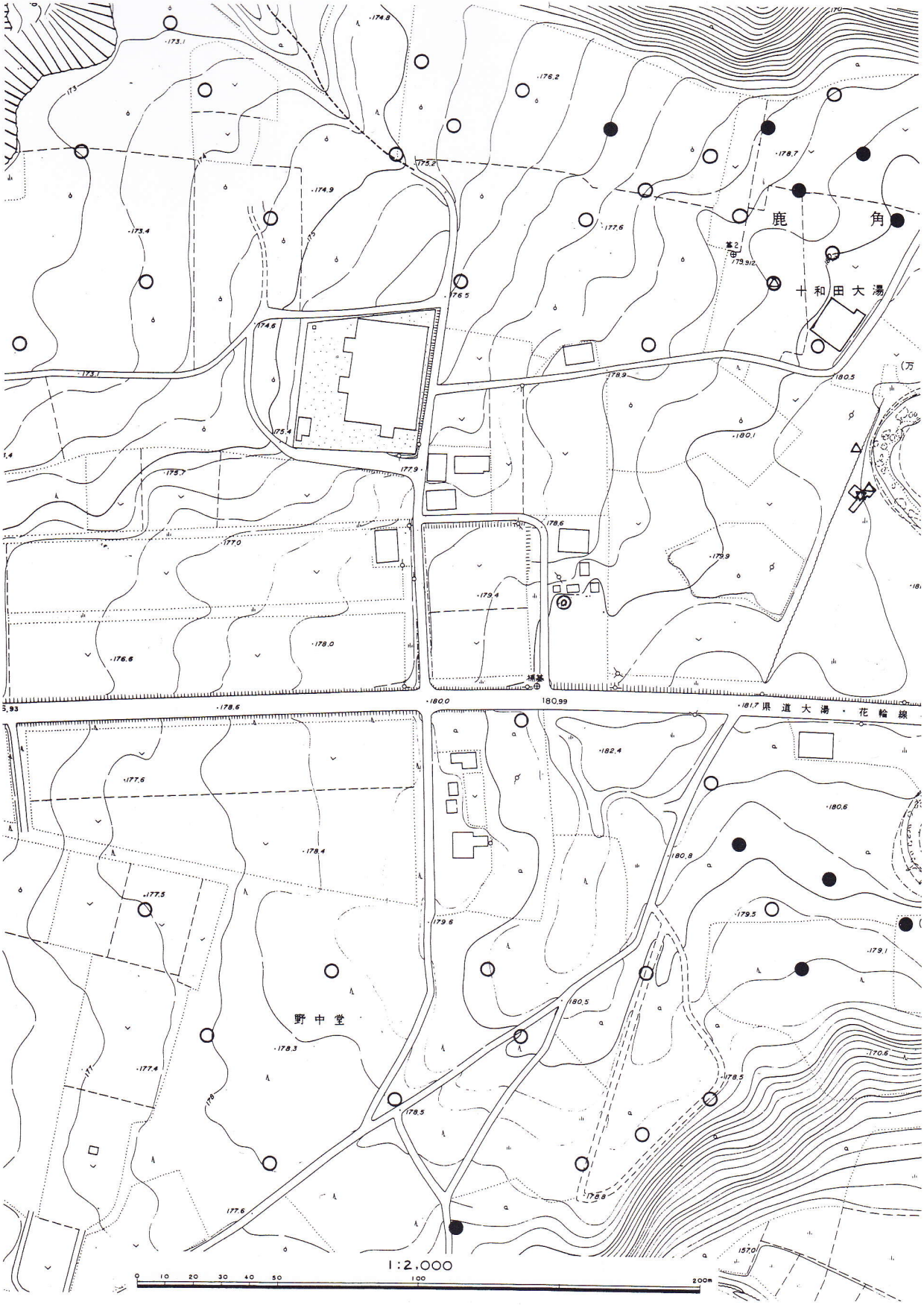
Ⅲ群とした地域は59年から継続調査されている地域（A区）で、弧状配石遺構群等が検出されている。その詳細については、本章1を参照にされたい。本地域については、50、51年の調査も含め、かなり広範囲に発掘されているが、51年の調査において竪穴住居跡の可能性がある落ち込みが確認されている程度で、住居跡は確認されていない。なおA区南端から検出された歴史時代の掘立柱建物跡は、その東北東側のⅤ群の地域との関連が考えられる。

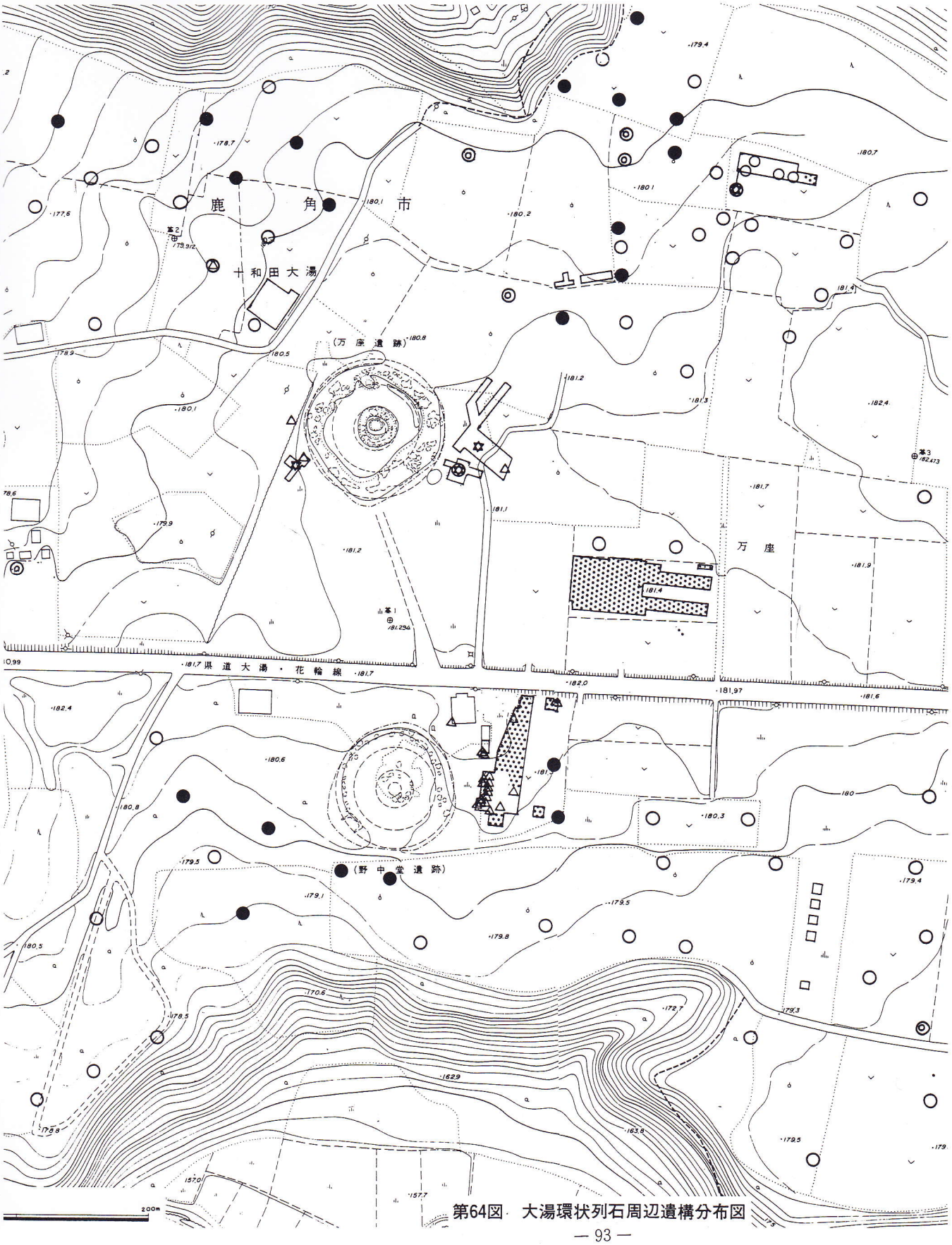
Ⅳ群の地域については、調査がほとんど行われておらず、詳細は不明である。種苗造成時に多数の配石遺構が確認されているらしい。

Ⅴ群とした周辺遺跡縁辺部（北東部及び北部）のいずれからも歴史時代の竪穴住居跡が確認されている。北東部と北部は連続せず、分割できると考えられる。なお北部からは時期不明のTピット2基、土壙1基が検出されている。また環状列石中心から南西方向311mの地点から、歴史時代の竪穴住居跡1軒を確認している。(注8)

（秋元信夫）

注1．昭和48～51年に実施された分布調査により確認された大湯環状列石周辺遺跡の範囲
注2．高木新助、諏訪富多著　『特別史跡大湯環状列石発掘史』に収録
注3．吉田富夫　「環状列石遺蹟の標式的型式を具備」『神代文化』第47号　1947年
注4．甲野　勇　「ストーン・サークル後記―秋田県大湯町石器時代遺跡調査―」
『科学朝日』第7巻第11号　1947年（・点は筆者が付した）
注5．後藤守一　「昭和21年における大湯遺跡の調査」『大湯町環状列石』に収録
注6．注4に同じ。
注7．秋元信夫　「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」『よねしろ考古』1号　1985年
注8．土留め工事に伴う試掘調査（昭和61年）において筆者らが確認。


鹿角
十和田大湯
県道大湯・花輪線
野中堂
1:2,000
0 10 20 30 40 50 100 200m



第64図　大湯環状列石周辺遺構分布図

地点発掘部分
…配石遺構
…フラスコ状土壙、Tピット、土壙
…歴史時代の竪穴住居跡
…遺物の出土がある地点
…遺構・遺物ともない地点
面的発掘部分
…発掘範囲
…配石遺構
…縄文時代の住居跡
…炉跡
…フラスコ状土壙、Tピット、土壙
…歴史時代の掘立柱建物跡
…礫群

第Ⅵ章　調査のまとめ

大湯環状列石及びその周辺遺跡は、米代川の一支流、大湯川の南東岸の台地（標高180ｍ前後）上に位置する。大湯環状列石は約90ｍの距離を保つ野中堂と万座の２つの環状組石（配石）遺構群の総称であり、その規模は野中堂で42ｍ、万座で46ｍを測る。

大湯環状列石と関連ある遺跡が広がることは、昭和17、21、26～27年の環状列石近傍の調査及び畑中からの表採資料によりある程度予想されていたが、昭和48年から51年にかけて行われた周辺遺跡分布調査により、直接あるいは間接的に関連する遺跡が両環状列石から北東300ｍ、南西180ｍにも及ぶことが判明した。

昭和59年からは、53年作成の「特別史跡　大湯環状列石保存管理計画書」を具体化し、今後の実施計画の基礎資料を得ることを主目的に周辺遺跡の発掘調査が継続されている。

第１、２次調査では、51年の分布調査において第３の環状列石の存在が予想された野中堂環状列石の北東250ｍの地点（Ａ区）を調査対象とし、弧（環）状の配石遺構群の一部を確認、個々の配石遺構の性格については配石下の土壙の存在、堆積状況、甕棺や副葬品と考えられる遺物の出土、残存脂肪分析結果等から配石墓と推察され、その構築時期を配石下土壙出土土器より縄文時代後期前葉と推定できた。

本年度の調査は、このＡ区配石遺構群域の遺構の配置の解明を主目的に、さらにＡ区を南西方向に拡張、調査を継続、さらに万座環状列石近傍の遺構の確認を目的に同環状列石の東方80ｍに新たに調査区（Ｃ区）を設定した。なお発掘面積はＡ区1222㎡、Ｃ区817㎡であった。

調査の結果、Ａ区からは新たに縄文時代後期の配石遺構10基、土壙８基、焼土遺構14基が検出され、遺構内・外より縄文時代後期の土器ダンボール箱２箱と８点の石器、４点の土製品、１点の石製品の出土があった。またＣ区からは、Ｃ区ほぼ全域を覆う礫群が検出され、縄文時代後～晩期の土器ダンボール箱７箱と58点の石器、45点の土製品、４点の石製品の出土があった。

配石遺構は第１、２次調査部分においては、幅20ｍの弧状帯上に位置し、この帯は弧状列石により内・外帯に二分割され、内帯側の配石遺構は４～６基を一単位とする小塊（Ａ～Ｆ小塊）に細分され、それぞれ最も近い距離の外帯に位置する配石遺構１基に対応するという規則的な配置を呈していた。しかし、今年度調査部分からは、弧状列石や外帯の配石遺構は検出されず、配石遺構10基と同性格と考えられる土壙３基は、いずれも幅10ｍの内帯の延長帯上に位置する。これらの遺構は、やはり小塊（ＺＡ～ＺＤ小塊）に細分されるが、その一単位の構成数が、３～５基と少なく、各小塊間の距離も広くなる。またＡ～Ｆ小塊ではⅠa類（縁辺部に立石を一巡し、その内部に平石を置くタイプ）の配石形態の配石遺構が外帯を構成し、内帯の各小塊に内在するⅢa類（縁辺部に平石を長軸が連結するように円形に一巡させ、その内部に石を雑然

と積むタイプ）と相関関係にあったが、ＺＡ～ＺＤ小塊ではⅠa類の配石遺構は内帯の小塊に内在するという相違がみられる。このような配石遺構の配置の違い、言い換えれば墓域における埋葬区形態の相違は何に起因するのであろうか。各小塊（Ａ～Ｆ小塊においては外帯部配石遺構）に普遍的に存在するⅠa類の配石に着目し、追求を続けたい。

これらの配石遺構群はさらに南西及び東方向へと延びる様相を呈しているが、野中堂、万座環状列石のように円形に一巡することはない。これは発掘部分の曲率から、円と仮定してその直径を出すと300ｍとなり、その南東部が台地からはみ出るからである。第２次調査の考察において、曲率を変え、南西―北東方向に長い楕円形状に一巡するか、一巡せず弧状で終わると考えたが、今年度の調査から後者の可能性が高くなった。

配石遺構の性格、その構築時期等については、第２次調査結果と変わらない。

これまでの配石遺構群の調査によって、配石遺構の集合体という点では野中堂、万座両環状列石と同じであるが、その配置はやや異なる。この相違については構築時期の差を考えているが、土器編年の問題とともに野中堂、万座環状列石の構築時期を推察できる資料が少なく、断言できない。

Ｃ区ほぼ全域を覆う礫群は、人為的に配置された痕跡を有しないが、それらの礫がその検出された層中に本来存在せず、自然的要因により形成されたとも考えられず、何らかの形で人間が関与しているものと考えられる。礫群は配石遺構、土壙等と重複せず、分布位置を異にする傾向にある。また配石遺構の石材が大型の河原石であるのに対し、礫群の礫はあまり水磨されていない角礫が選択されている。この辺に礫群の性格解明の糸口があるものと考えられる。

Ａ区、Ｃ区とも出土遺物の大部分は後期前葉から中葉に位置づけられるものである。Ｃ区においては、これらの遺物が南西側ほど多く出土する傾向を示し、本発掘区の南西側すなわち環状列石近傍に住居跡、土壙等の遺構の存在が考えられる。

（秋元信夫）

参考・引用文献

阿部義平　「配石墓の成立」『考古学雑誌』第54巻１号　1968年
〃　「“日時計”の考察ー大湯環状列石の配石類型の意味」『よねしろ考古２号』　1986年
今井富士雄・磯崎正彦　「十腰内遺跡」『岩木山』に収録、岩木山刊行会　1968年
江坂輝彌　「配石遺構とは」『考古学ジャーナルNo.254 』　ニュー・サイエンス社　1985年
鎌田・大里・秋元他　『鹿角市史』　鹿角市　1982年
斎藤　忠　「配石遺構ー特に環状列石について」『考古学ジャーナルNo.254』　ニュー・サイエンス社　1985年
諏訪富多　『特別史跡大湯環状列石発掘史』　大湯郷土研究会　1973年
田村誠一　「大曲Ⅰ遺跡」『岩木山』に収録、岩木山刊行会　1968年
冨樫泰時　「大湯環状列石研究史と今後の課題(1)」『よねしろ考古１号』　1986年
林　謙作　「縄文期の葬制　第Ⅱ部」『考古学雑誌』第63巻３号　1977年
〃　「縄文期の村落をどうとらえるか」『考古学研究』第26巻３号　1979年
〃　「東日本縄文期墓制の変遷（予察）」『人類学雑誌』第88巻３号　1980年
本間　宏　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古１号』　1985年
水野正好　「環状列石の意味するもの」『信濃』第20巻４号　1968年
岡田康博　「十腰内第Ⅲ群、第Ⅳ群、第Ⅴ群の再検討」『弘前大学考古学研究３号』　1986年
山内静男　『日本先史土器の縄紋』　先史考古学会　1979年
成田滋彦　「切断蓋付土器考」『弘前大学考古学研究３号』　1986年
〃　「青森県の土器」『縄文文化の研究４』雄山閣　1981年
鈴木　尚　『日本人の骨』岩波書店　1961年
秋元信夫　「大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告」『よねしろ考古１号』　1985年
〃　「秋田県の配石遺構」『よねしろ考古２号』　1986年
文化財保護委員会　『大湯町環状列石』　1953年
葛西　励　『螢沢遺跡』　青森県教育委員会　1979年
坂本　洋一　『韮窪遺跡』　青森県教育委員会　1984年
成田滋彦　『大石平遺跡』　青森県教育委員会　1985年
小田野哲憲　『岩手県の土器』　岩手県立博物館　1982年
鈴木優子　『下村Ｂ遺跡』　岩手県埋蔵文化財センター　1983年
中村良幸他　『立石遺跡』　大迫町教育委員会　1979年
宮城県教育委員会　『上深沢遺跡』　1978年
小林　克　『大岱Ⅱ遺跡』　秋田県教育委員会　1984年
秋田県教育委員会　『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1975年
十和田町教育委員会　『黒森山麓縄文期竪穴群』　1971年
小坂町教育委員会　『小坂町環状列石墳墓』　1969年
秋田県教育委員会・鹿角市教育委員会　『大湯環状列石周辺遺跡緊急分布調査報告書』　1974年
鹿角市教育委員会　『昭和50年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』　1976年
〃　『昭和51年度大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書』　1977年
〃　『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)』　1985年
〃　『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』　1986年

付１　大湯環状列石周辺遺跡より出土した棒状木製品及び樹脂状凝固物について

岩手県立博物館　　赤　沼　英　男

大湯環状列石周辺遺跡より出土した棒状木製品の表面黒色樹脂及び土器内付着樹脂状凝固物質の自然科学的調査結果について報告する。

１．調査資料及び調査方法

調査資料は次の２点である。

① 第３号配石遺構土壙底面出土赤色彩色棒状木製品

② 第102号フラスコ状土壙出土土器内付着漆状凝固物

資料①はその形状から木質の表面に黒色樹脂膜を貼付し、さらに赤色顔料を施した棒状製品と推定されるが、埋蔵中に腐朽が進み木質部の大半が失われている。保存状態はきわめて悪い。

自然科学的調査は、それぞれの資料から採取した微小な樹脂のはく離片0.1～0.2ｇをもとに行った。採取した資料は蒸留水に浸して十分クリーニングした後、アルコールおよびエーテルによって脱水させたものを十分乾燥させ、赤外分光分析に供して同定を試みた。特に資料①については赤外線による分析に先だって、樹脂表面のところどころに付着している赤色顔料を削ぎ落としメノー乳鉢で粉砕した後、Ｘ線回析による顔料の同定を行った。

２．調査結果

図１は資料①の表面に施されている赤色顔料のＸ線回析像である。分析に供した資料が微量なため強度は弱いが、2.71、2.52、2.20、1.84および1.69Å を主とする回析線を確認することができる。これは赤鉄鉱（Haematite－Fe_2O_3）の標準粉末データと一致する。このことから棒状木製品に施されている赤色顔料は赤鉄鉱（ベンガラ）である。

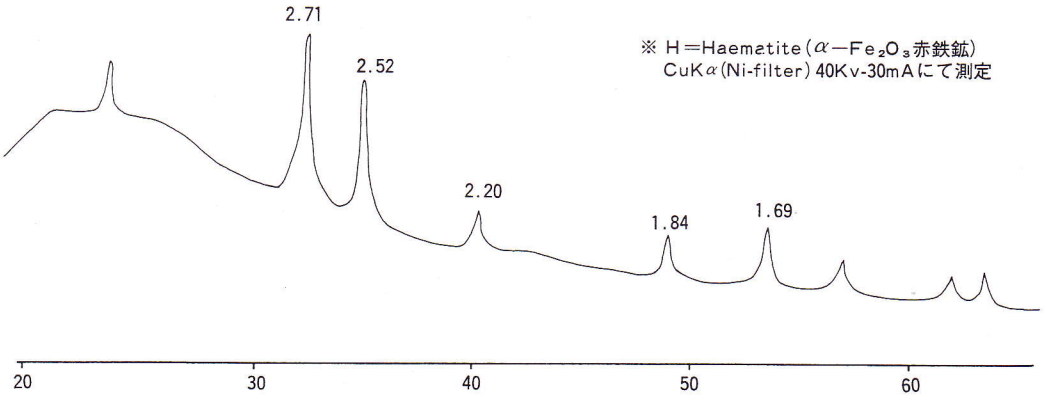


図１　赤色顔料のＸ線回析図

次に黒色樹脂膜について検討する。図２－ａは資料①の黒色樹脂膜、図２－ｂは資料②の赤外吸収スペクトルである。いずれも3,600～3,400cm^{-1}の巾広い吸収帯、2,930、2,860cm^{-1}の鋭い吸収、1,720～1,600及び1,450～1,400cm^{-1}の吸収が特徴的であり、ａ、ｂとも吸収パターンは一致している。このことから資料①②の黒色樹脂は同一物質であると考えられる。図３は浄法寺産漆の吸収スペクトルであるが、図２に示す吸収スペクトルと比較するとそのパターンは酷似している。図３で観察される3,050cm^{-1}の弱いオレフィン－ＣＨ伸縮、及び1,460～1,440cm^{-1}付近の比較的鋭い吸収が資料①、②において認められないのは、酸化の進行および金属・珪酸塩による汚染の影響によるものと判断される。資料①②の黒色膜はいずれもCCl_4に不溶であること等を考え合わせれば、これらは漆と推定される。

資料②土器底部には多量の黒色樹脂が残存していることから、この資料は漆の保存容器として使用され、またその漆を用いて赤色彩色棒状木製品は作られたのであろう。

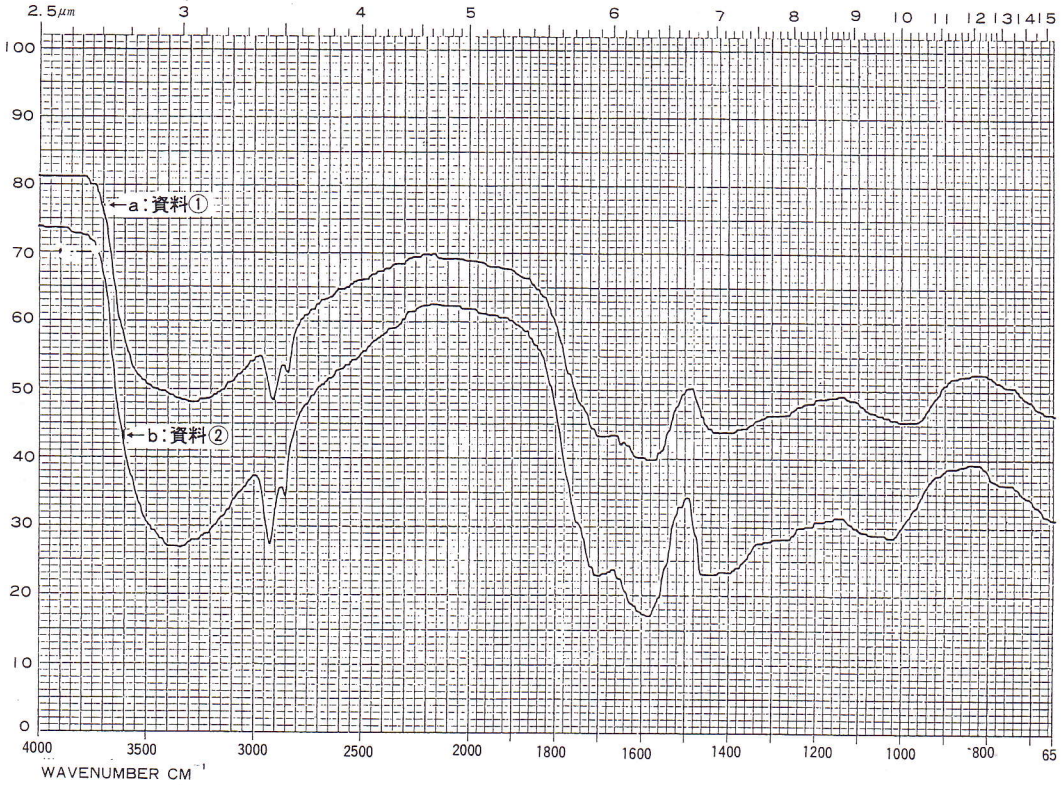


図２　黒色樹脂膜の赤外吸収スペクトル

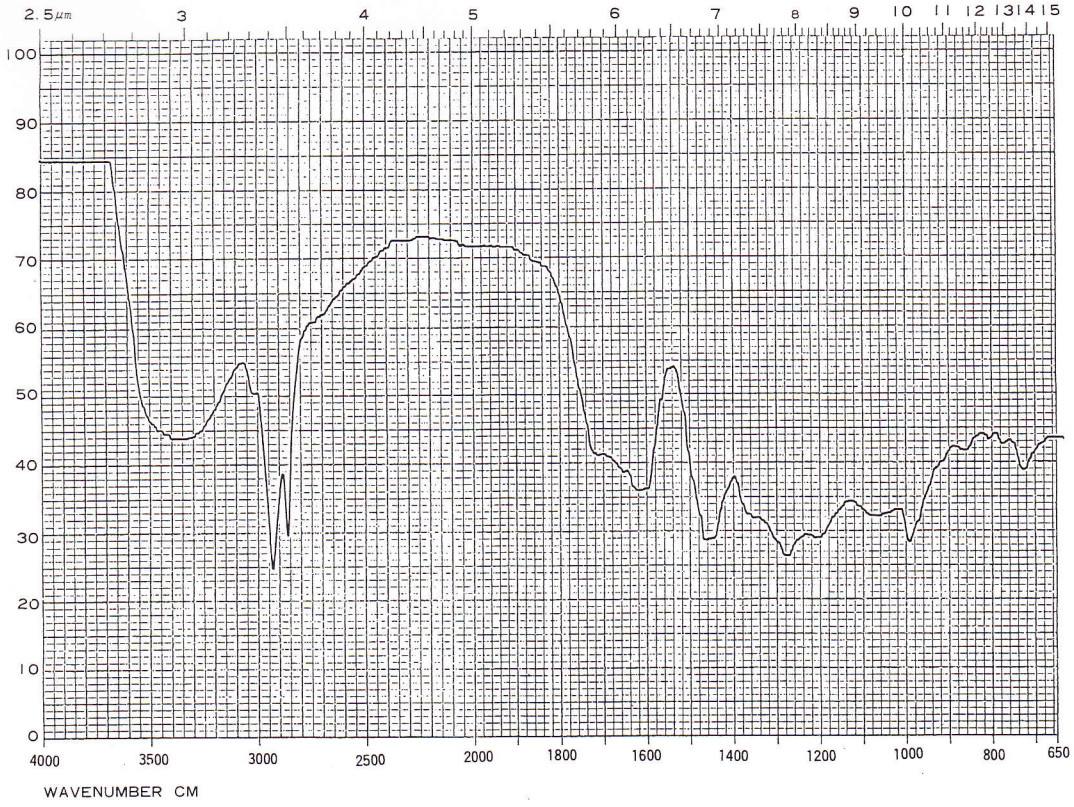


図３　浄法寺産漆の赤外吸収スペクトル

注）資料①は第１次調査において、Ａ区配石遺構群域南東部のＲ、Ｓ－12グリッドに位置する第３号配石下土壙底面から出土した２点の赤色彩色棒状木製品である。大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)で「いずれも幅５～７mm、厚さ２～４mmの棒状の木製品で、表面には漆と思われる赤色塗料が塗られている。現存長はそれぞれ4.2cm、4.8cmであるが、断面形状が似ていること、近接する位置関係にあること、周囲に同様の小破片があったことから同一個体と考えられる。木質部が腐食しており、本来の形状は推定できない。」と記載したものである。

資料②は第２次調査において、Ｂ区のＫ－101グリッドに位置する第102号フラスコ状土壙３層から出土した縄文時代後期前葉の小型深鉢形土器内に付着していた黒色の凝固物である。

第３次調査において内面に黒色彩色の施された土器片が４点出土し、そのうち２点も分析を依頼したが、資料量が少なく、分析不可能ということであった。（秋元）

付２　大湯環状列石遺跡出土火山灰の螢光Ｘ線分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

（１）　分析方法

火山灰試料は空気乾燥器の中で120℃で５時間乾燥したのち、タングステンカーバイト製乳鉢で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は約15トンの圧力を加えて固め、コイン状の錠剤を作成した。この錠剤試料にＸ線を照射し、発生する螢光Ｘ線を理学電機製エネルギー分散型螢光Ｘ線分析装置で測定した。定量分析には岩石標準試料ＪＧ－１を標準試料として使用した。

分析値は、ＪＧ－１による標準化値で表示した。

（２）　分析結果

図１のRb－Sr分布図より、No.１、２とも十和田系火山灰であることは確実である。

十和田系火山灰のうち、十和田ａ、十和田ｂ、二ノ倉火山灰の相互識別にはK－Ca分布図が有効である。図２のＫ－Ca分布図によると、十和田ａ火山灰の端に分布することが判る。Fe因子でも十和田ａ火山灰に対応したので、No.１、２とも十和田ａ火山灰と推定される。

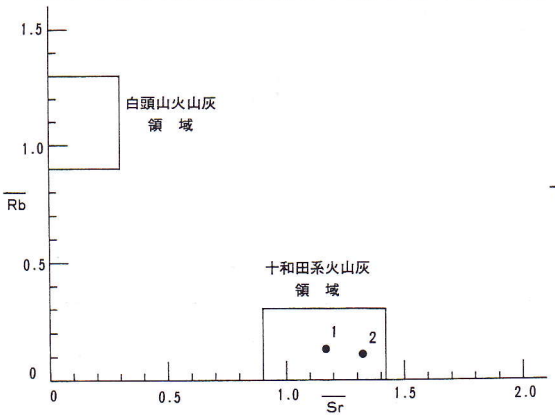


図１　大湯環状列石遺跡出土火山灰のRb－Sr 分布図

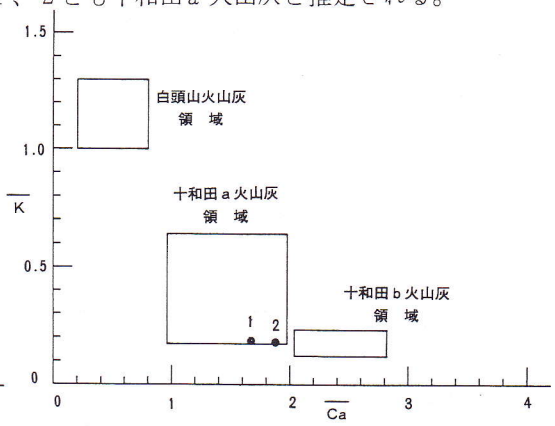


図２　大湯環状列石遺跡出土火山灰のＫ－Ca 分布図

注）試料No.１、２は、第２次大湯環状列石周辺遺跡発掘調査（昭和60年）時に、同遺跡Ｂ区南東端（Ｎ－102 ～103杭間）の基本層序Ⅱａ、、Ⅱｂ層から、それぞれ採集したものである。鹿角地方を中心に分布する軽石質火山礫は、大湯浮石と命名され（藤岡・佐藤、1953）、青森県一帯に分布する十和田ａ降下火山灰が大湯浮石と一連のものであり、約1000年前の噴火によって噴き上げられた降下軽石（大池、1972）と考えられている。

十和田ａと大湯浮石の一次鉱物組成の相違については、井上・山田（1986）により次のようにま

とめられている。「十和田a 火山灰は火山灰全体、浮石部分とも重鉱物含量が4～5％と少なく、その組成は、シソ輝石＞磁鉄鉱＞普通輝石であり、軽鉱物組成は火山ガラスが圧倒的であり、少量の斜長石を含む。火山ガラスの形態はスポンジ状≧扁平状＞繊維状＞顆粒状であり、扁平状が多いのが特徴である。」一方、「大湯浮石の重鉱物含量は浮石全体で約9％、浮石部分で6％と少なく、その組成は磁鉄鉱＞シソ輝石＞普通輝石、普通角閃石である。軽鉱物組成は火山灰、浮石部分ともに火山ガラス＞斜長石であるが、長石もかなり含んでいる。ガラスの形態は火山灰全体では顆粒状が大部分であるが、浮石部分ではスポンジ状を主体とし複雑である。」

なお鹿角地方では、はりま館遺跡、大岱Ⅱ遺跡（小坂町）、案内Ⅴ遺跡（鹿角市）出土の火山灰がが同法及び磁鉄鉱の化学組成の点から分析され、「十和田a の噴出直前に十和田カルデラより噴出した大湯浮石と思われる」（庄子・山田、1983）という結果を得ている。

引用・参考文献

藤岡一男・佐藤久　「地学より見たる大湯環状列石」『大湯町環状列石』文化財保護委員会　1953年

大池昭二　「十和田火山東麓における完新世テフラの編年」『第四紀研究』11－4　1972年

井上克弘・山田一郎　「安代町・浄法寺町における平安遺跡埋土中の火山灰について」『水神遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986年

庄子貞雄・山田一郎　「秋田県はりま館、大岱Ⅱ、案内Ⅴ、払田柵および平鹿の各古代遺跡中の火山灰の鉱物化学的分析」『平鹿遺跡』秋田県教育委員会　1983年

（秋元）

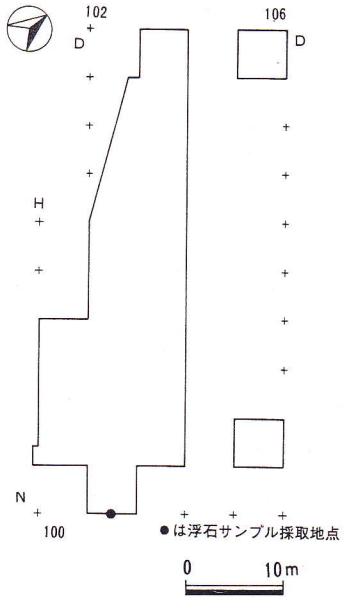


図3　浮石サンプル採取地点

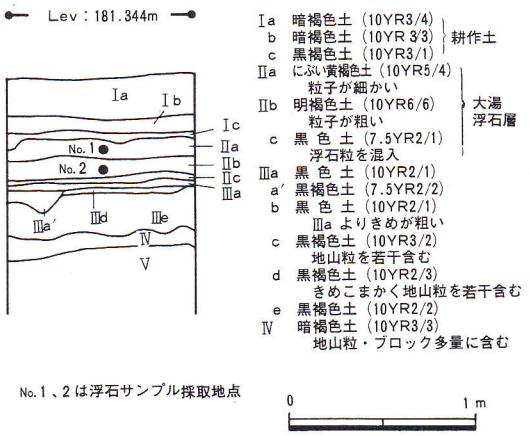
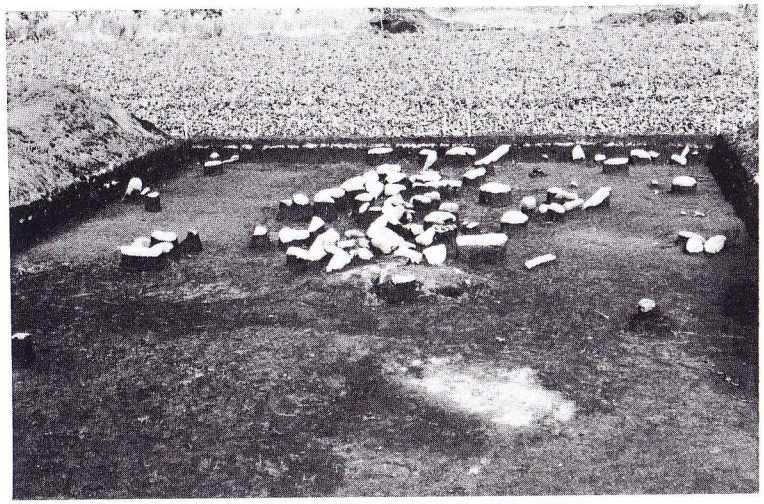


図4　浮石サンプル採取地基本層序

ＰＬ１　Ａ区配石遺構群域全景

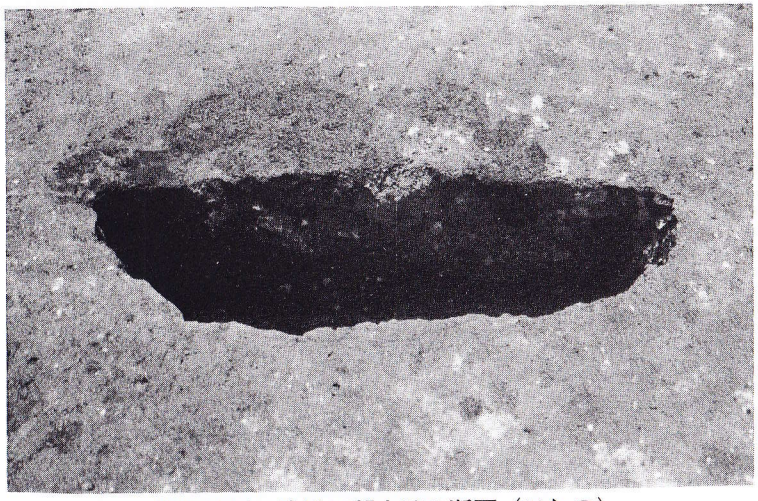
ＰＬ２　Ａ区配石遺構群域(1)

ＰＬ３　Ａ区配石遺構群域(2)

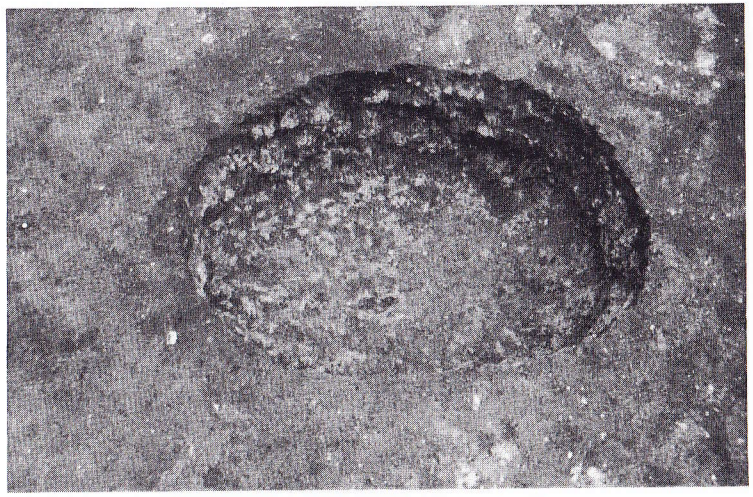


昭和51年時のＸ地域（Ａ区）配石状況

第35号配石遺構確認状況（Ｗ▶Ｅ）



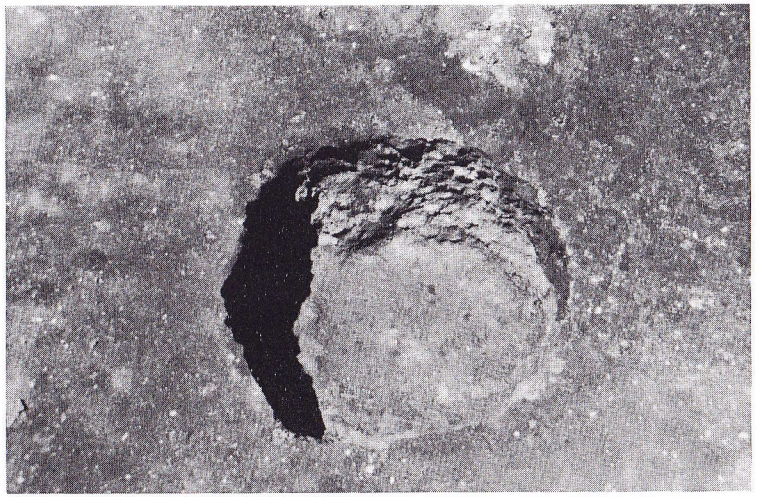
第35号配石遺構下部土壙の断面（Ｎ▶Ｓ）



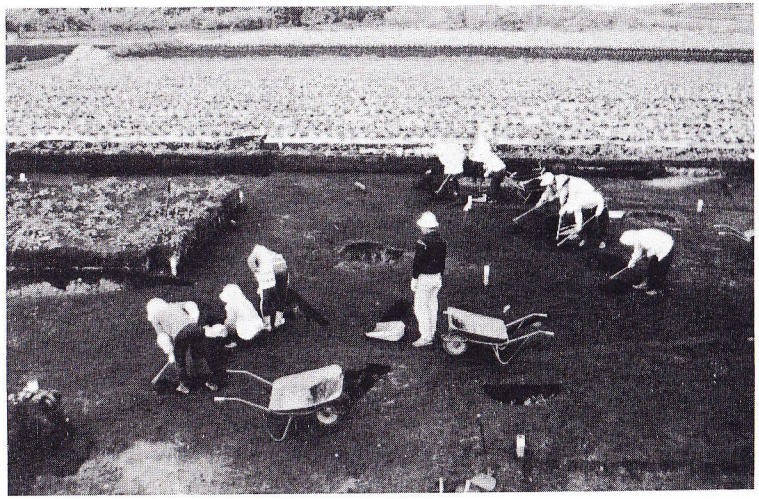
第35号配石遺構下部土壙（Ｎ▶Ｓ）

昭和51年時のＸ地域第３号遺構（現36配）の状況

第36号配石遺構確認状況（Ｓ▶Ｎ）

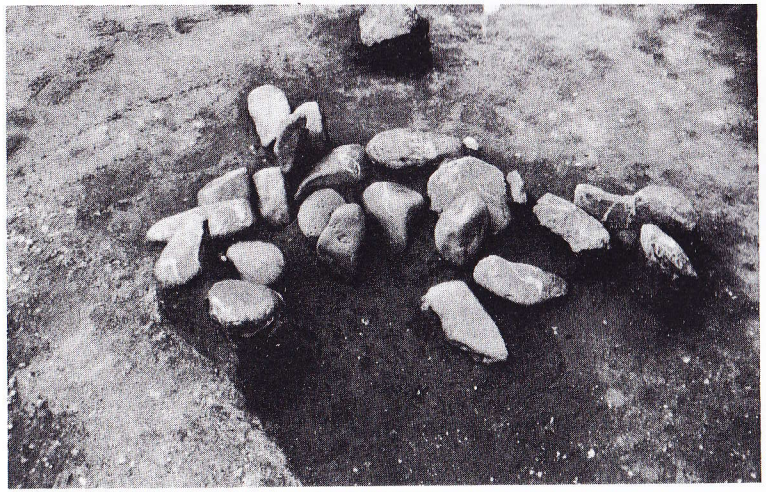


第36号配石遺構下部土壙（Ｓ▶Ｎ）

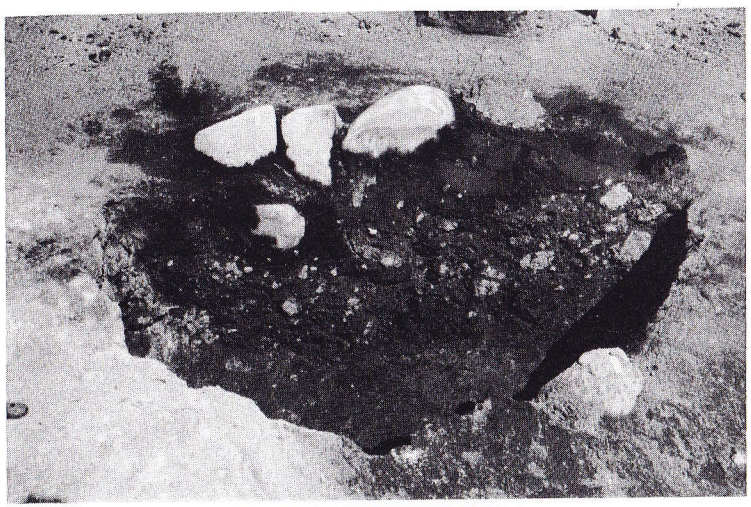


Ａ区調査風景

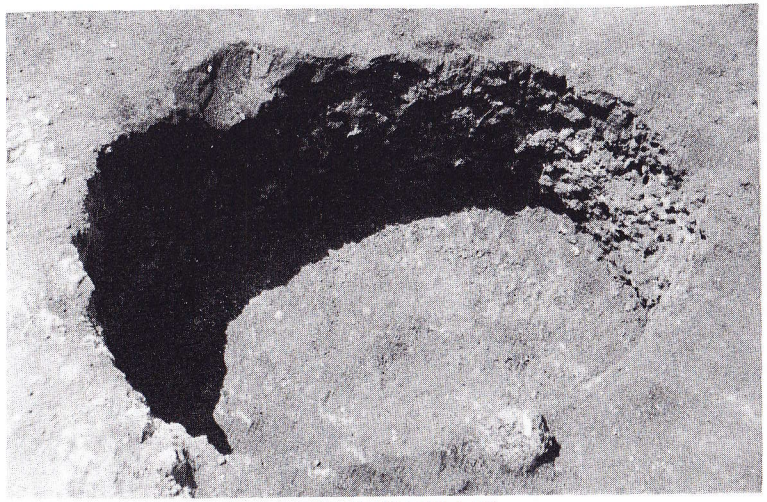
昭和51年時のＸ地域第２号遺構（現37配）の状況



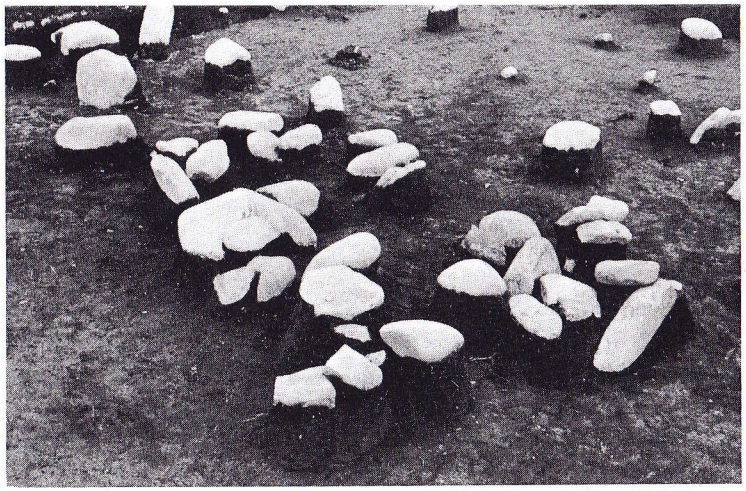
第37号配石遺構確認状況（Ｓ▶Ｎ）



第37号配石遺構土層断面



第37号配石遺構下部土壙

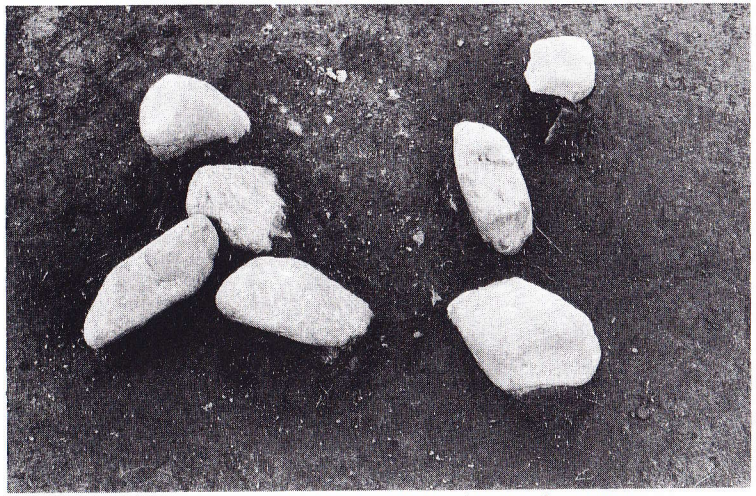


昭和51年時のＸ地域第５号・10号遺構（現39配）の状況

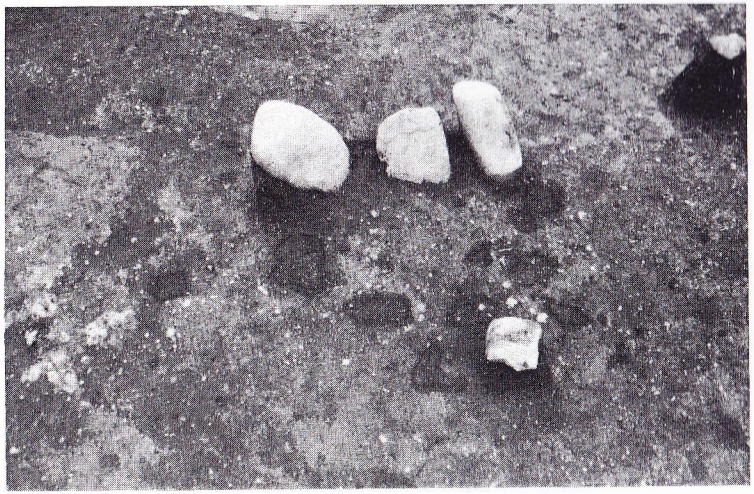
第39号配石遺構確認状況（Ｗ▶Ｅ）

第39号配石遺構土層断面（Ｓ▶Ｎ）

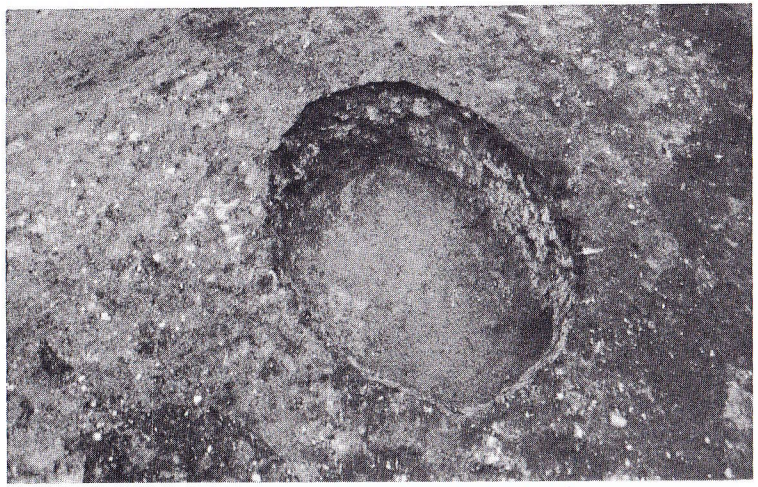
第39号配石遺構下部土壙（Ｓ▶Ｎ）



昭和51年時のＸ地域第１号遺構（現40配）の状況

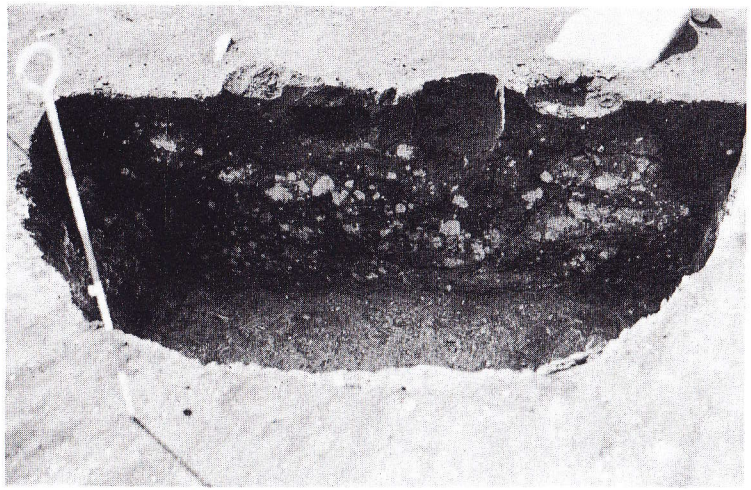


第40号配石遺構確認状況（Ｅ▶Ｗ）

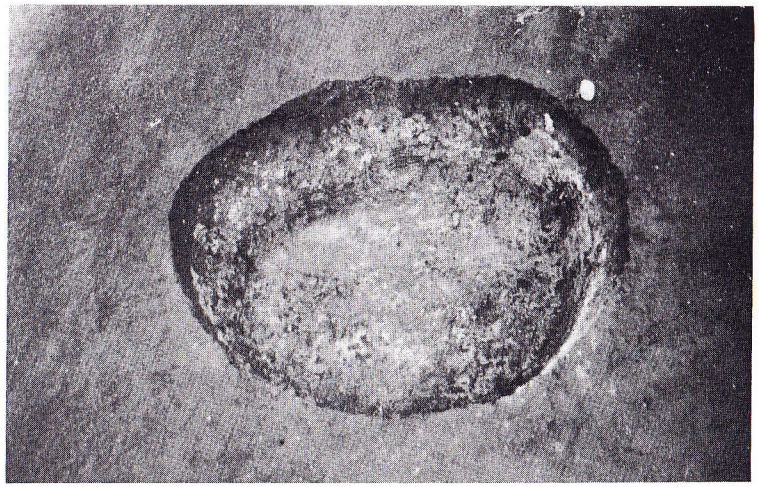


第40号配石遺構下部土壙（Ｓ▶Ｎ）

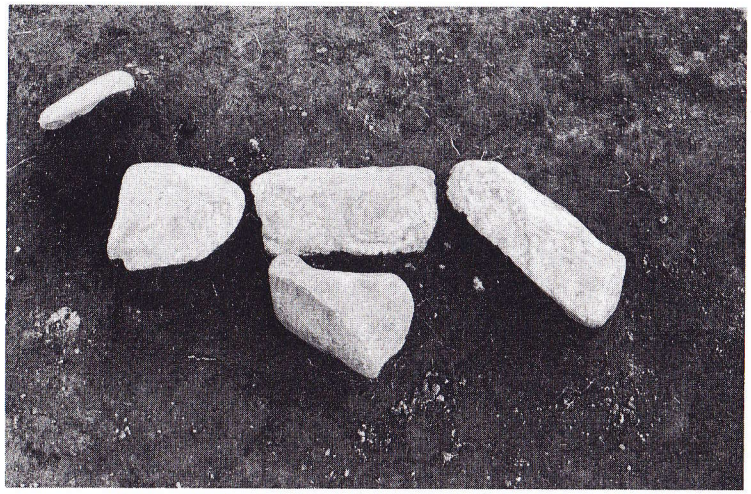
第41号配石遺構確認状況（Ｓ▶Ｎ）



第41号配石遺構土層断面（S▶N）

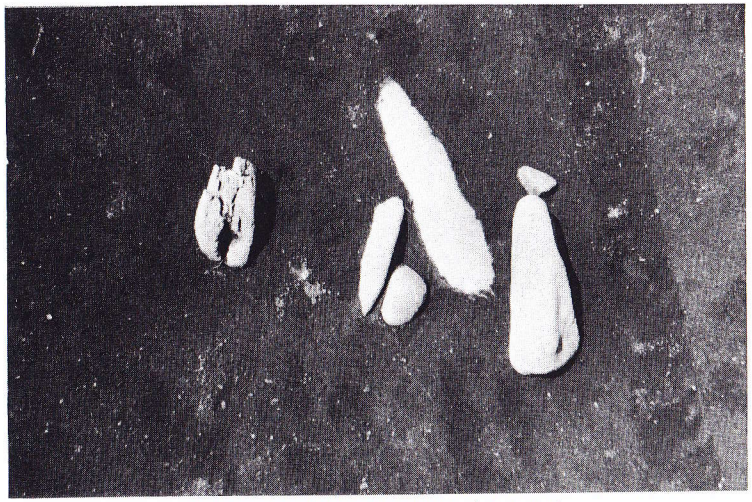


第41号配石遺構下部土壙（S▶N）



昭和51年時のＸ地域第９号遺構（現42配）の状況

第42号配石遺構下部土壙（S▶N）

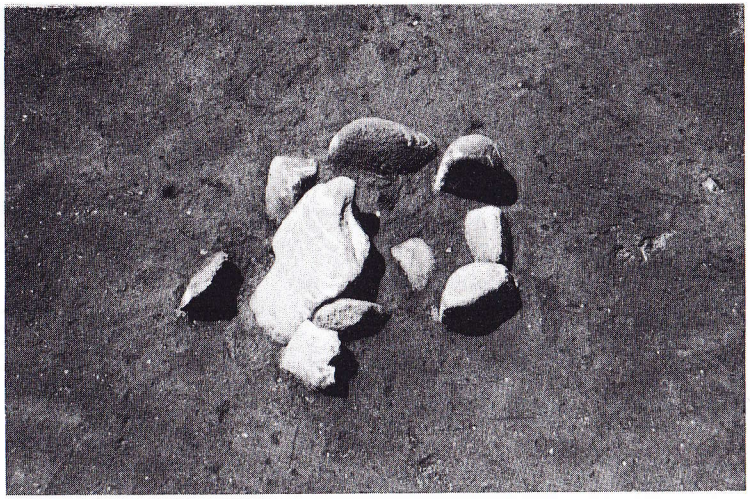


第43号配石遺構確認状況（S▶N）

第43号配石遺構土層断面（S▶N）

第43号配石遺構下部土壙（S▶N）

A区配石遺構群（W▶E）



第44号配石遺構確認状況（S▶N）

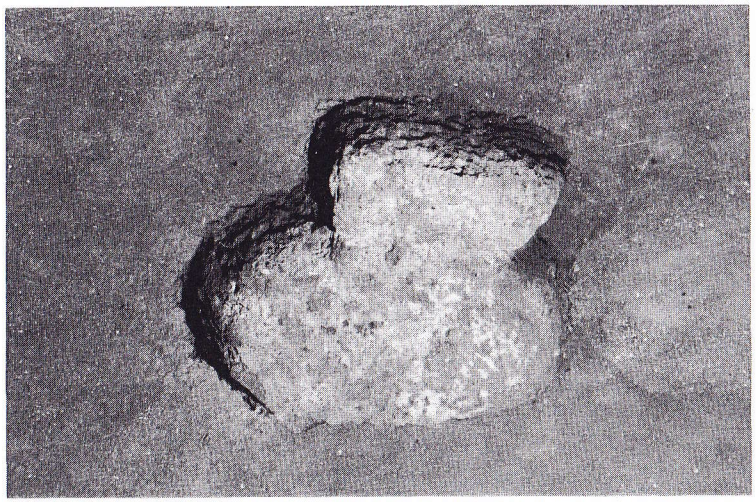
第44号配石遺構下部土壙（S▶N）

昭和51年時の第45号配石遺構確認状況（写真中央奥）

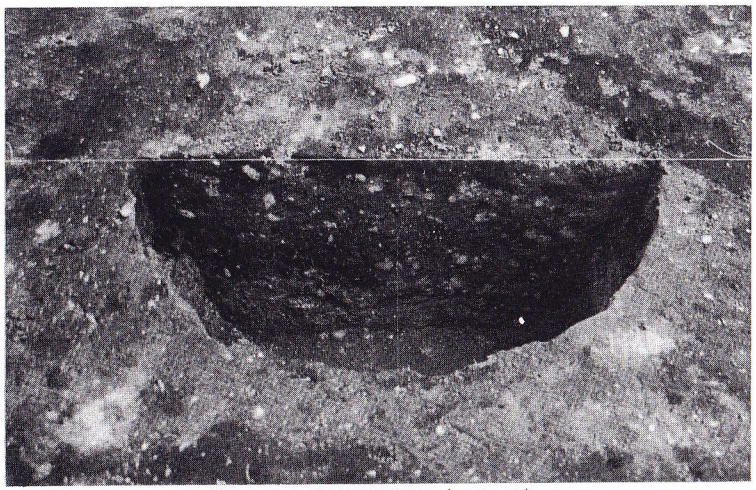
第45号配石遺構下部土壙（S▶N）

PL11　第44、45号配石遺構

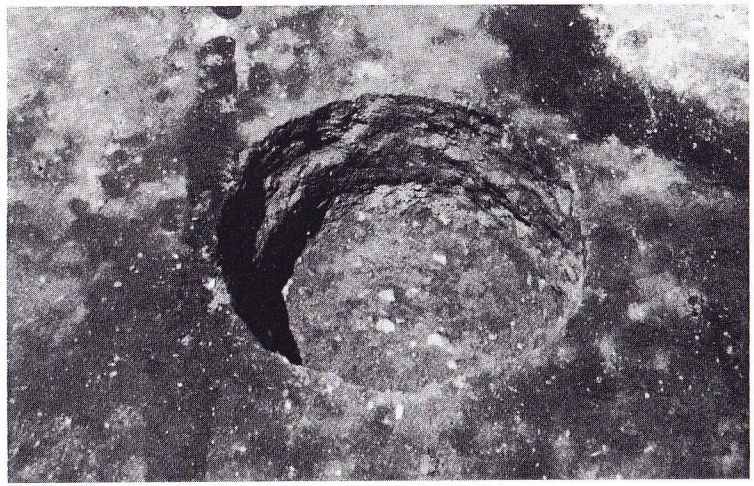
第 31 号 土 壙（S▶N）



第34・36号土壙（S▶N）

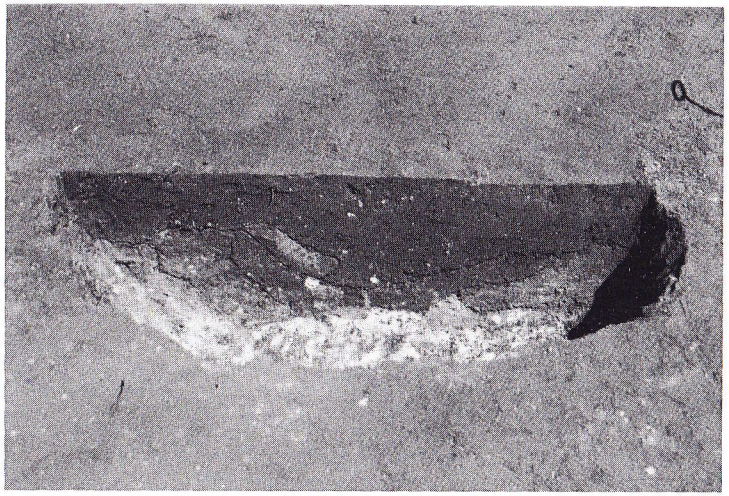


第33号土壙土層断面（N▶S）

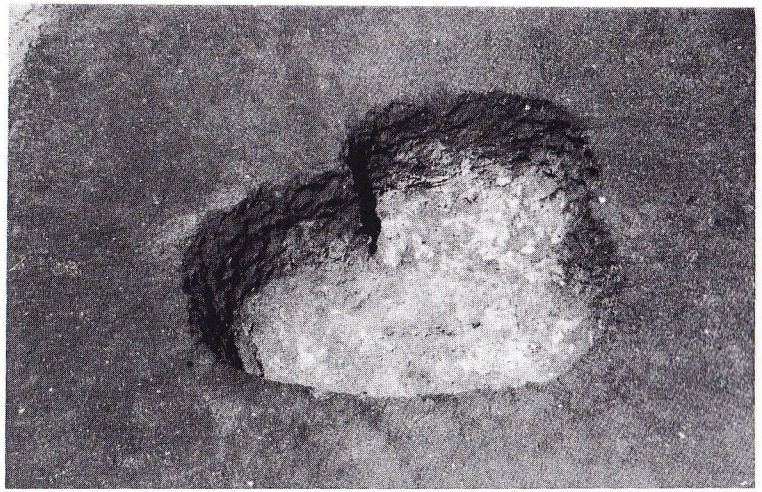


第 33 号 土 壙（S▶N）

PL12 第31、33、34、36号土壙



第35号土壙土層断面

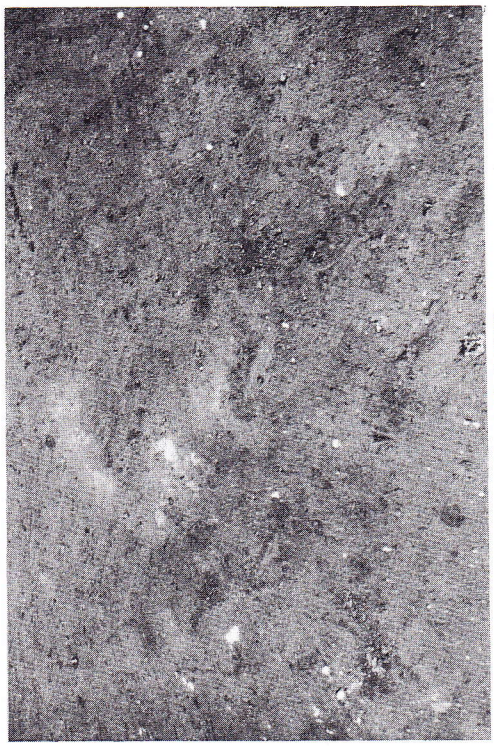


第35・37号土壙

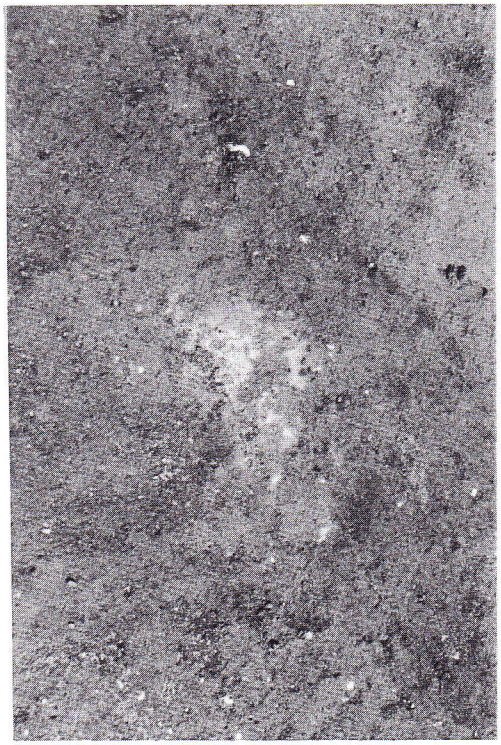
第 38 号 土 壙

第 39 号 土 壙

PL13 第35、37～39号土壙



第21号焼土遺構

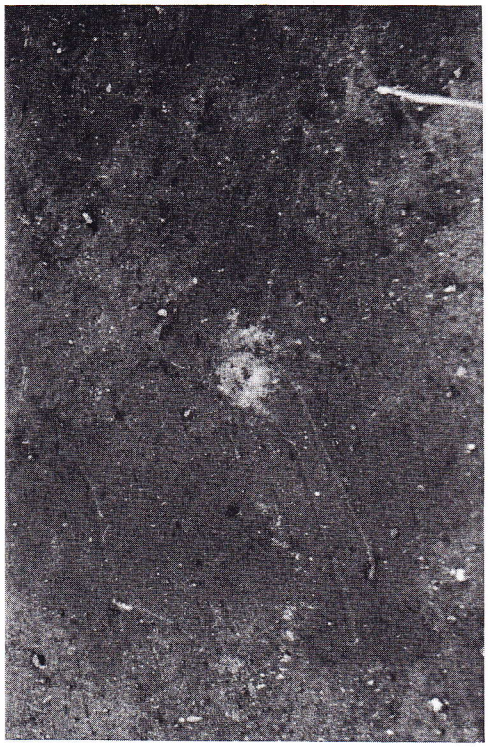


第23号焼土遺構

第21号焼土遺構土層断面

第22号焼土遺構

ＰＬ14　第21～23号焼土遺構



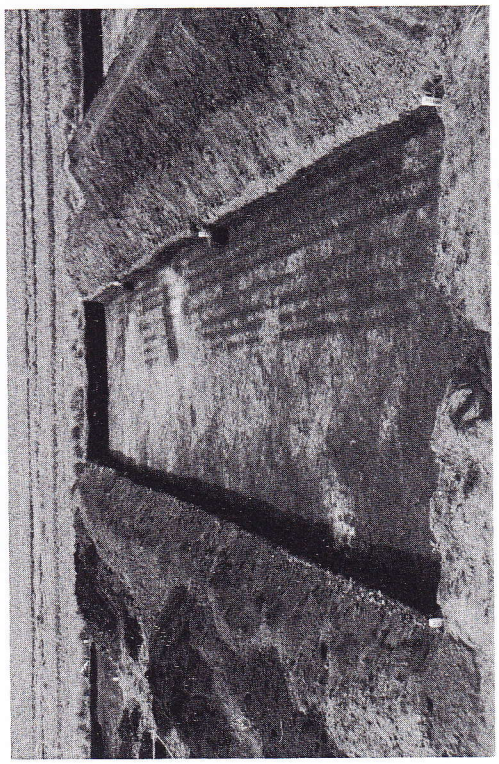
第29号焼土遺構

A 区 基 本 層 序

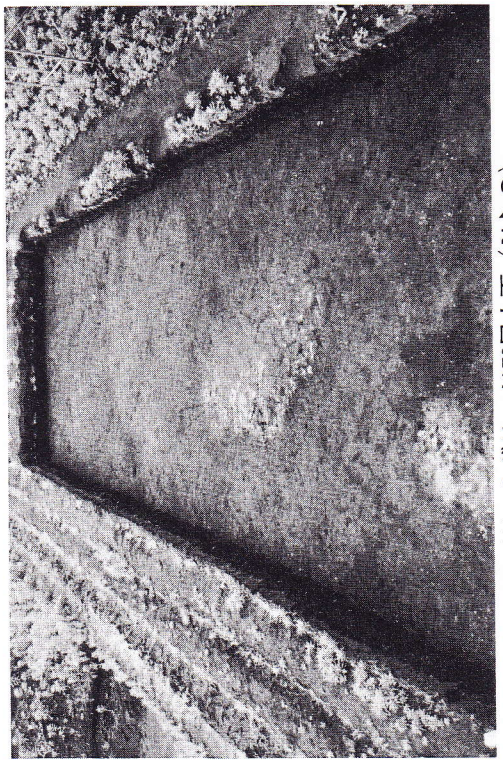
第28号焼土遺構

第 2 号風倒木痕土層断面

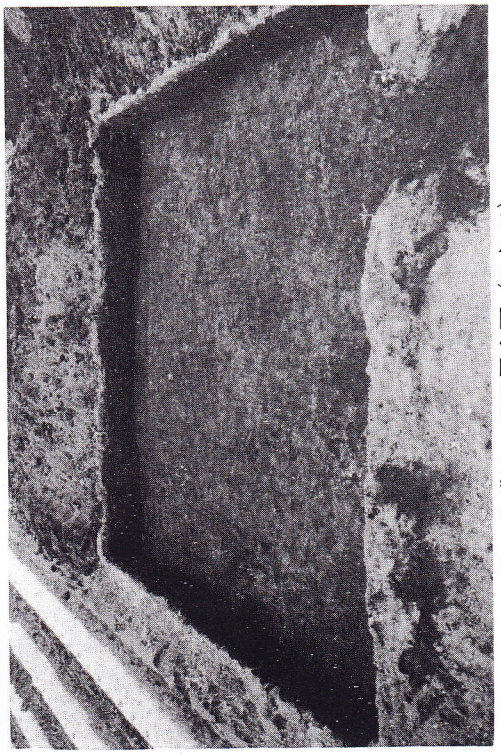
ＰＬ15　第28、29号焼土遺構Ａ区基本層序



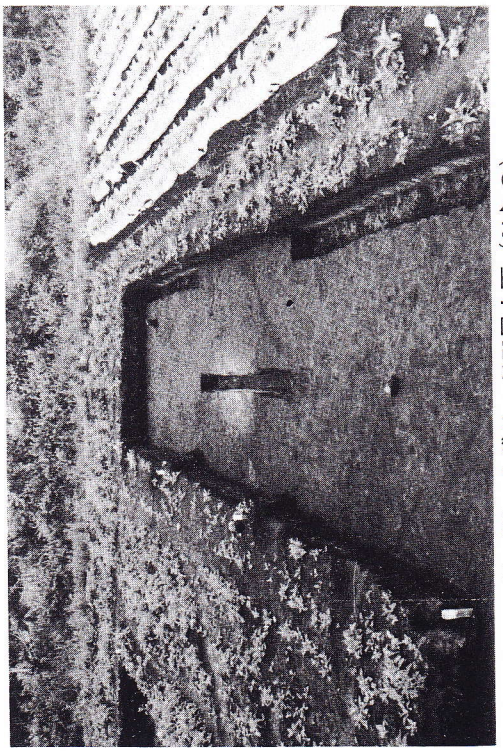
K～N－2グリッドⅣ層上面（S▲N）



U～W－6グリッドⅣ層上面（N▲S）



N－2グリッドⅣ層上面（S▲N）



U～W－2グリッドⅣ層上面（N▲S）

PL16　A区北西部、南東部

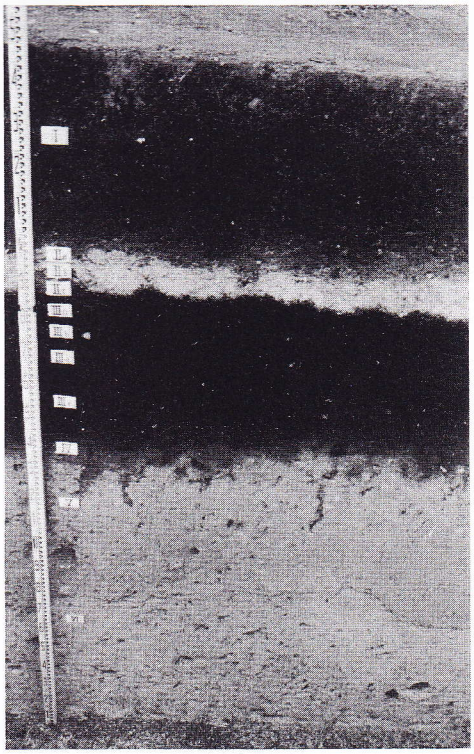
遺物出土状況（ＺＨ－115グリッド）

遺物出土状況（ＺＨ－105グリッド）

遺物出土状況（ＺＨ－115グリッド）

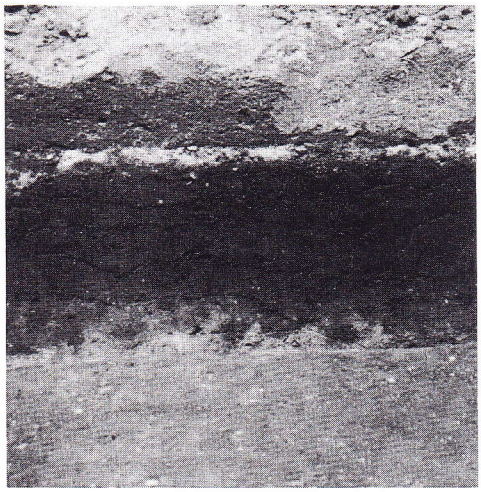
遺物出土状況（ＺＥ－106グリッド）

ＰＬ17　Ｃ区遺物出土状況



C区基本層序

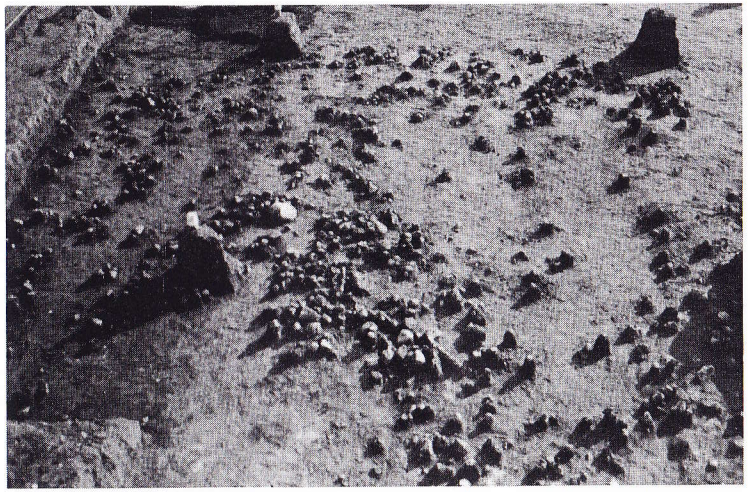
ZF111～115グリッド



C区基本層序

ZH－111～115グリッド

PL18　C区基本層序、C区北東部



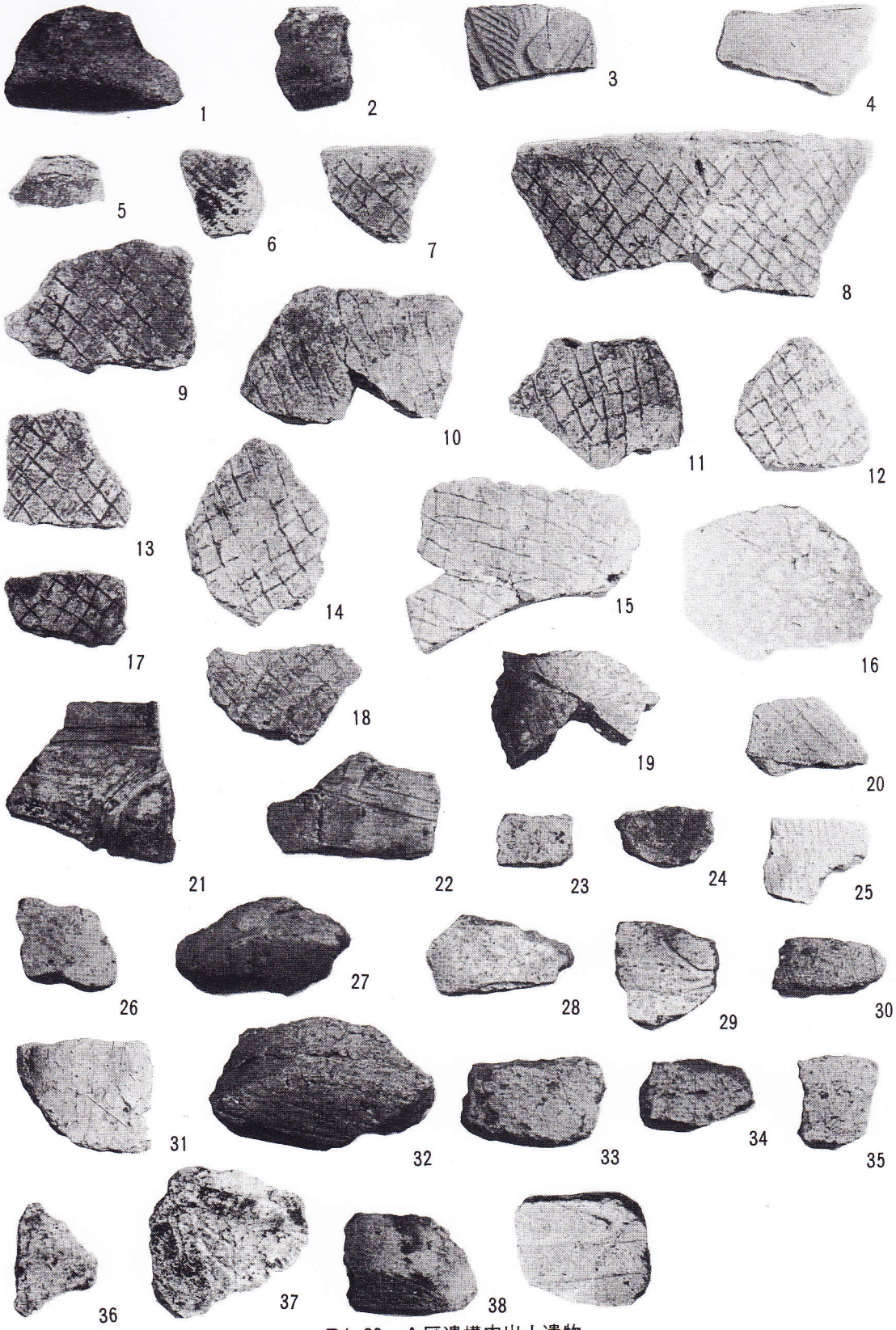
礫出土状況（ZE・ZF－110・111グリッド）（E▶W）

作　業　風　景

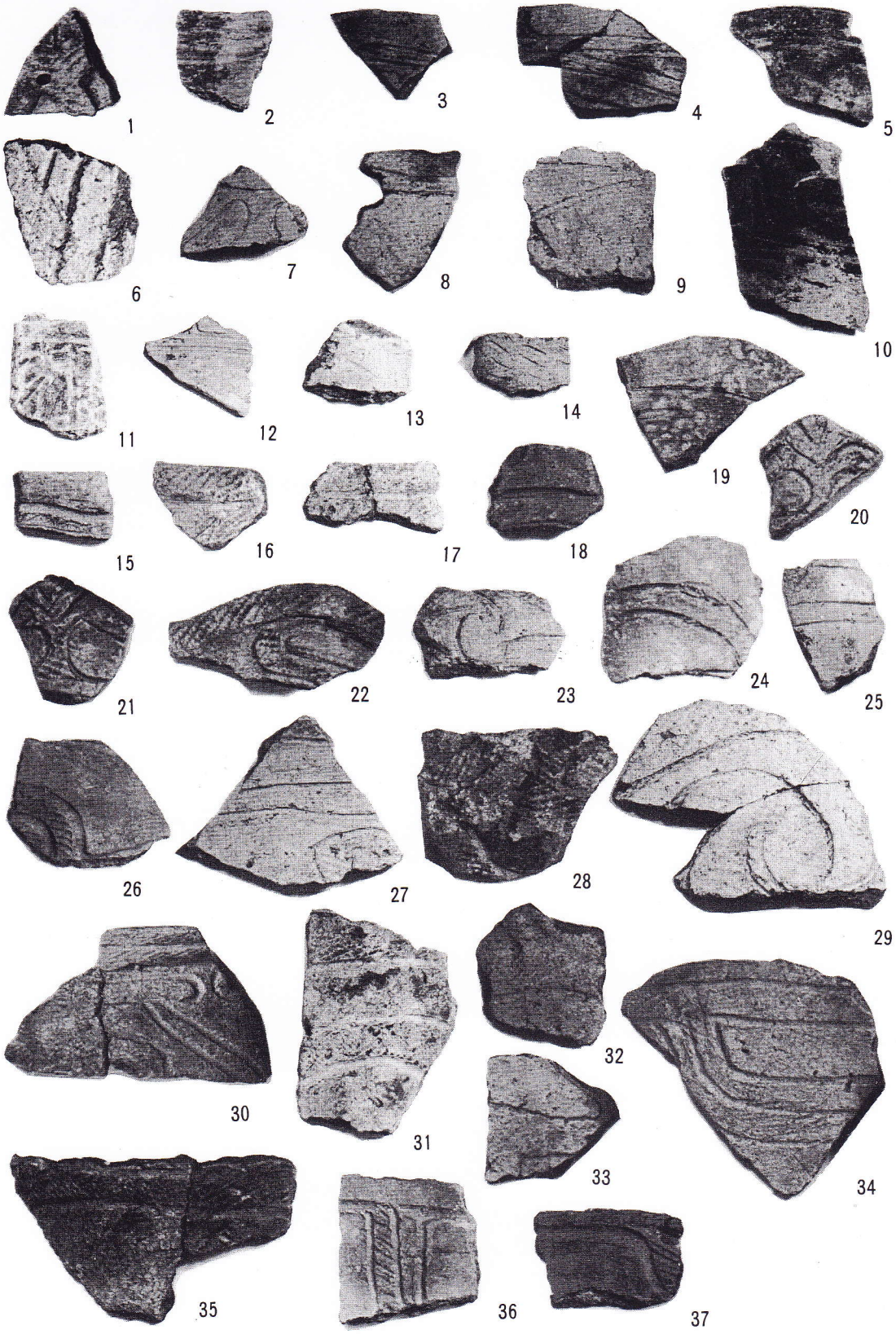
C　区　全　景（S▶N）

調査参加者

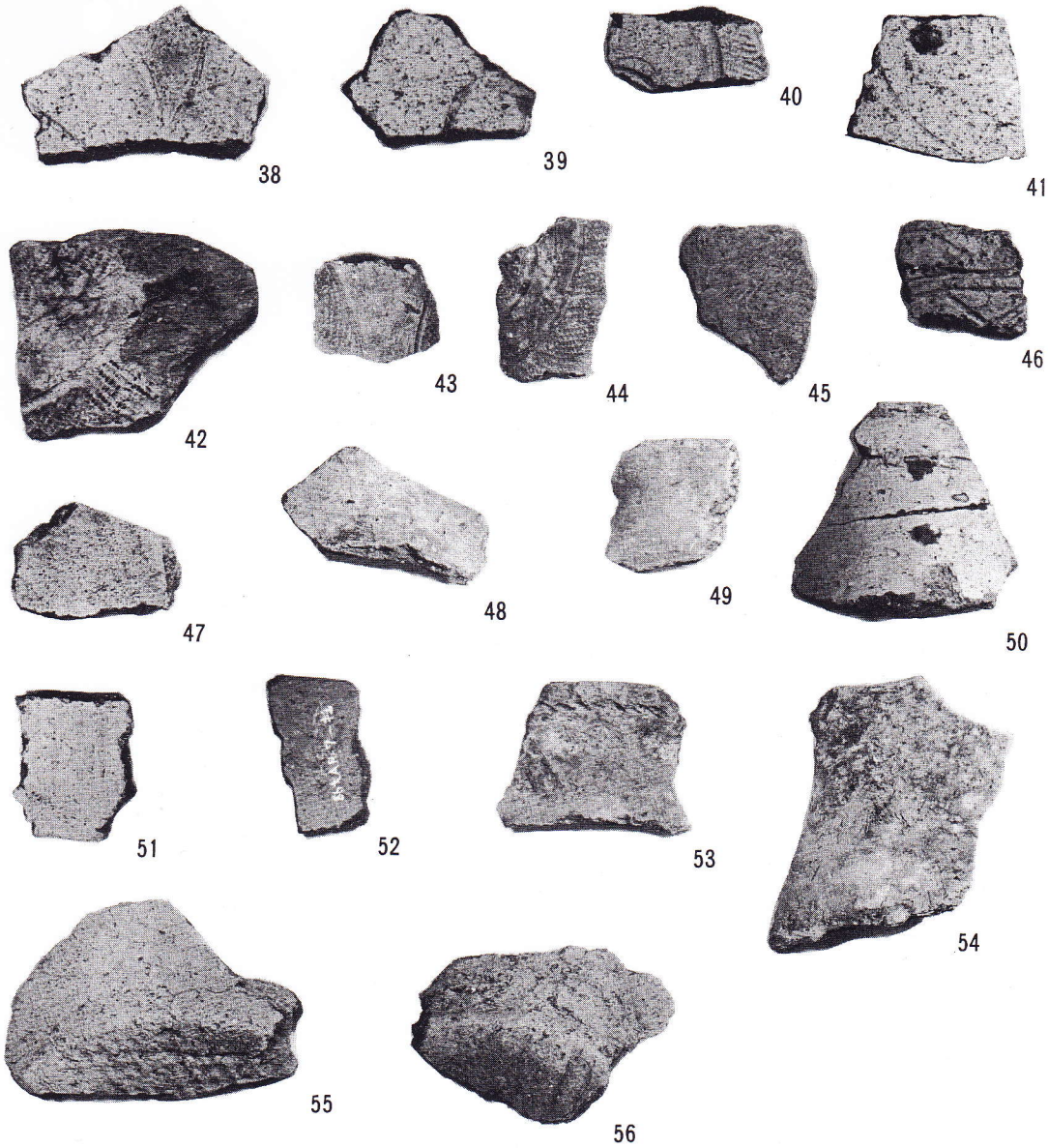
PL19　C区礫群、C区全景



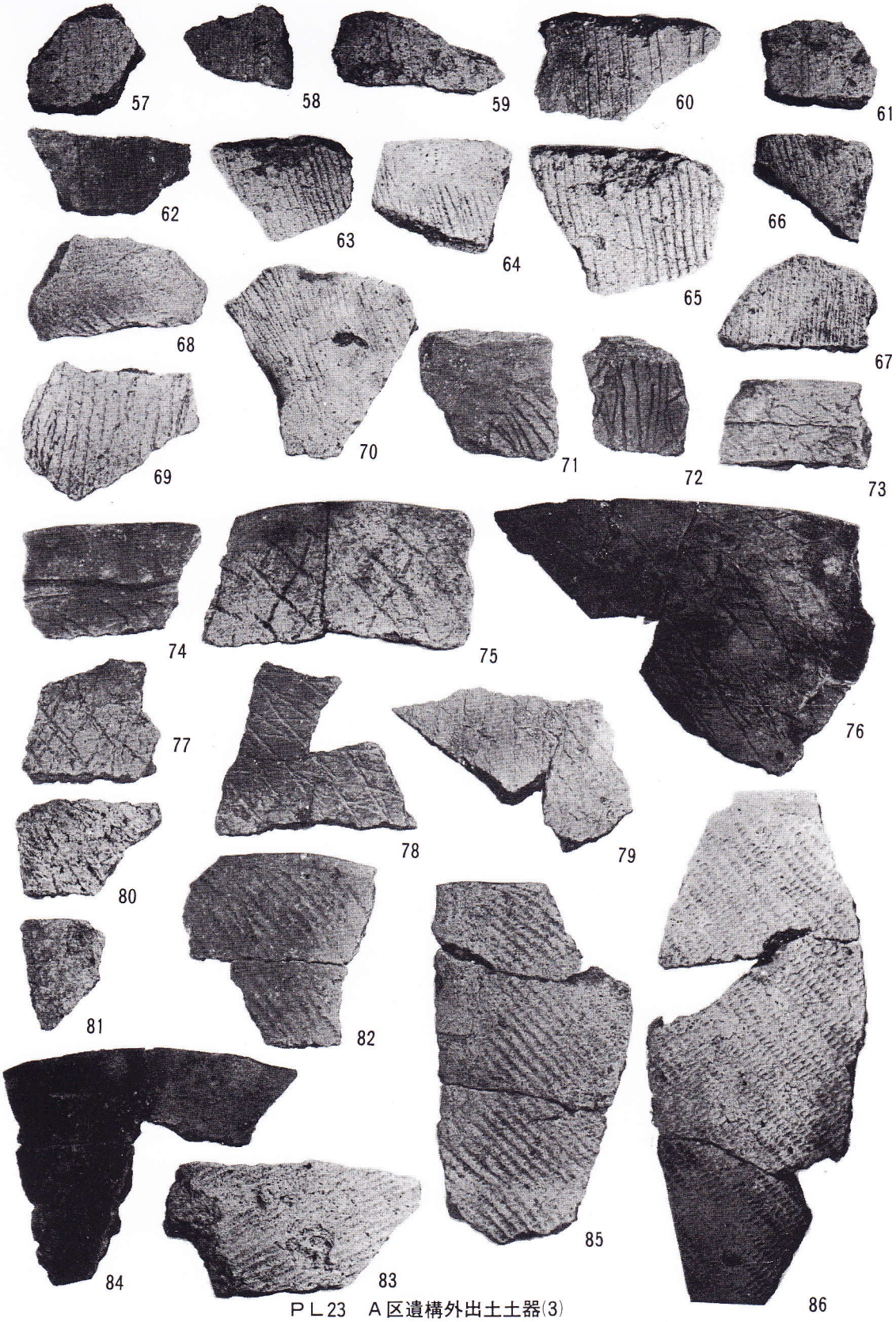
ＰＬ20　Ａ区遺構内出土遺物



ＰＬ21　Ａ区遺構外出土土器(1)

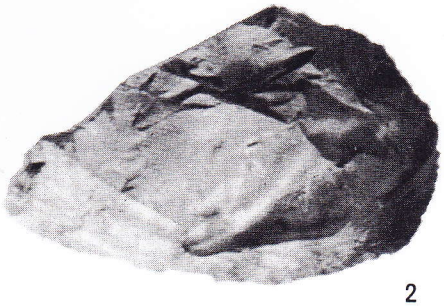


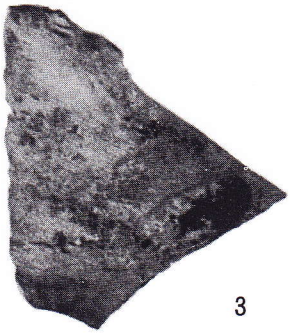
ＰＬ22　Ａ区遺構外出土土器(2)

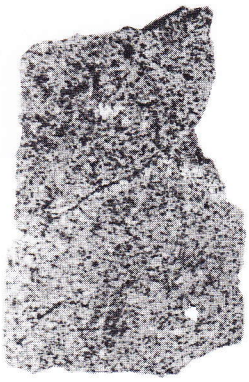


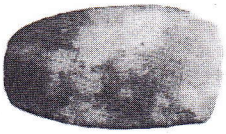
ＰＬ23　Ａ区遺構外出土土器(3)

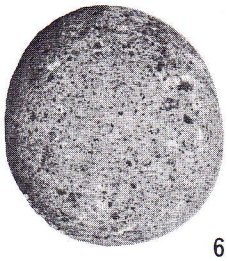
1


2


3


4

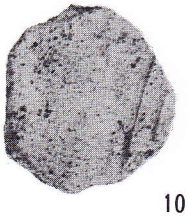

5


6

7

8

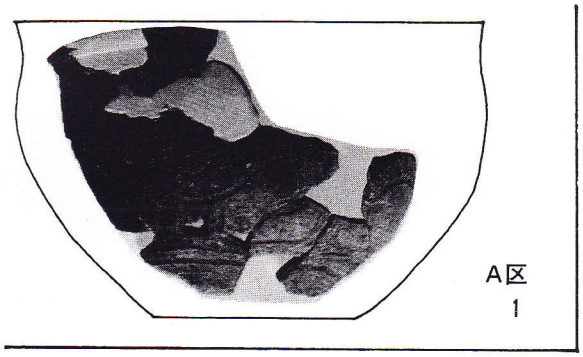
9

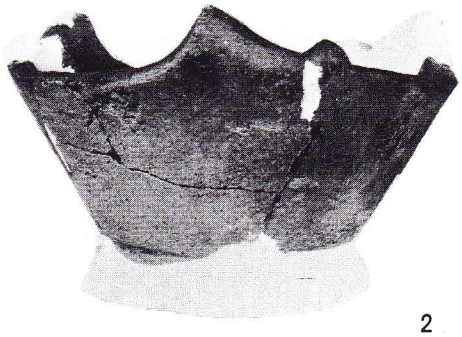

10

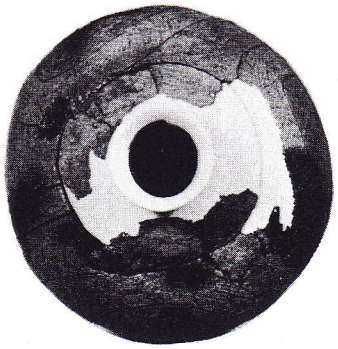
11

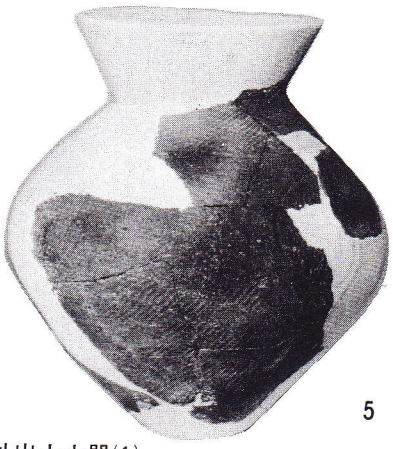
12

ＰＬ24　Ａ区遺構外出土石器土製品、石製品

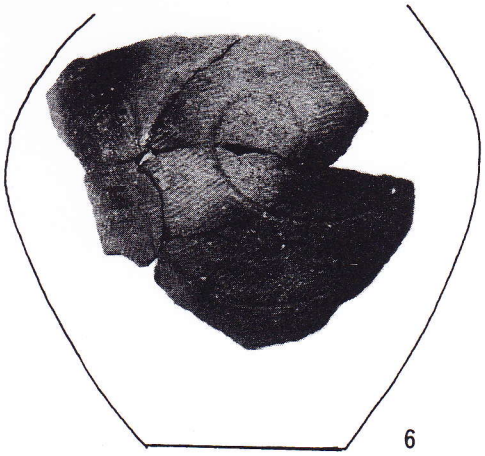






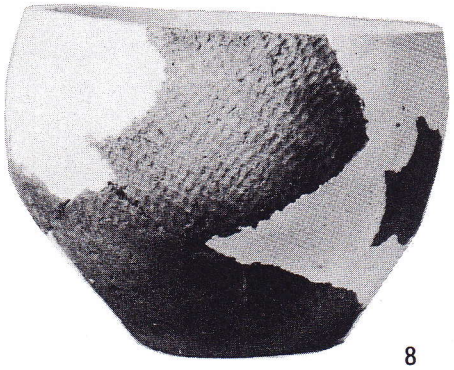


ＰＬ25　Ａ区遺構内、Ｃ区遺構外出土土器(1)

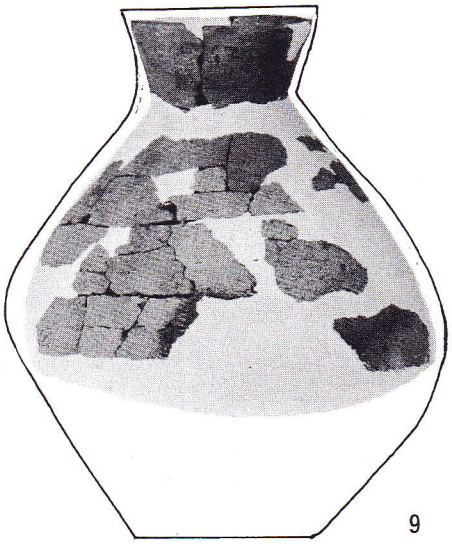


6

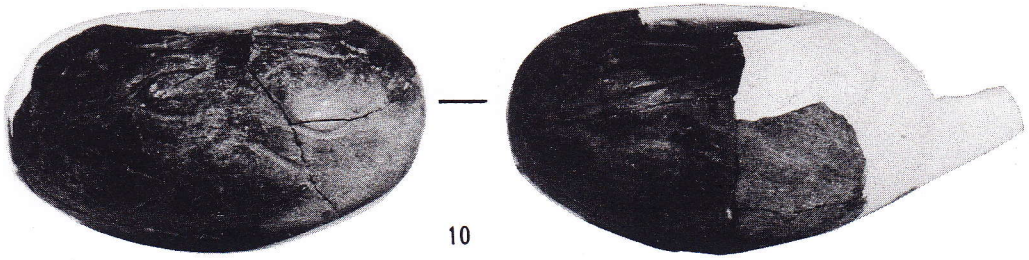
7



8

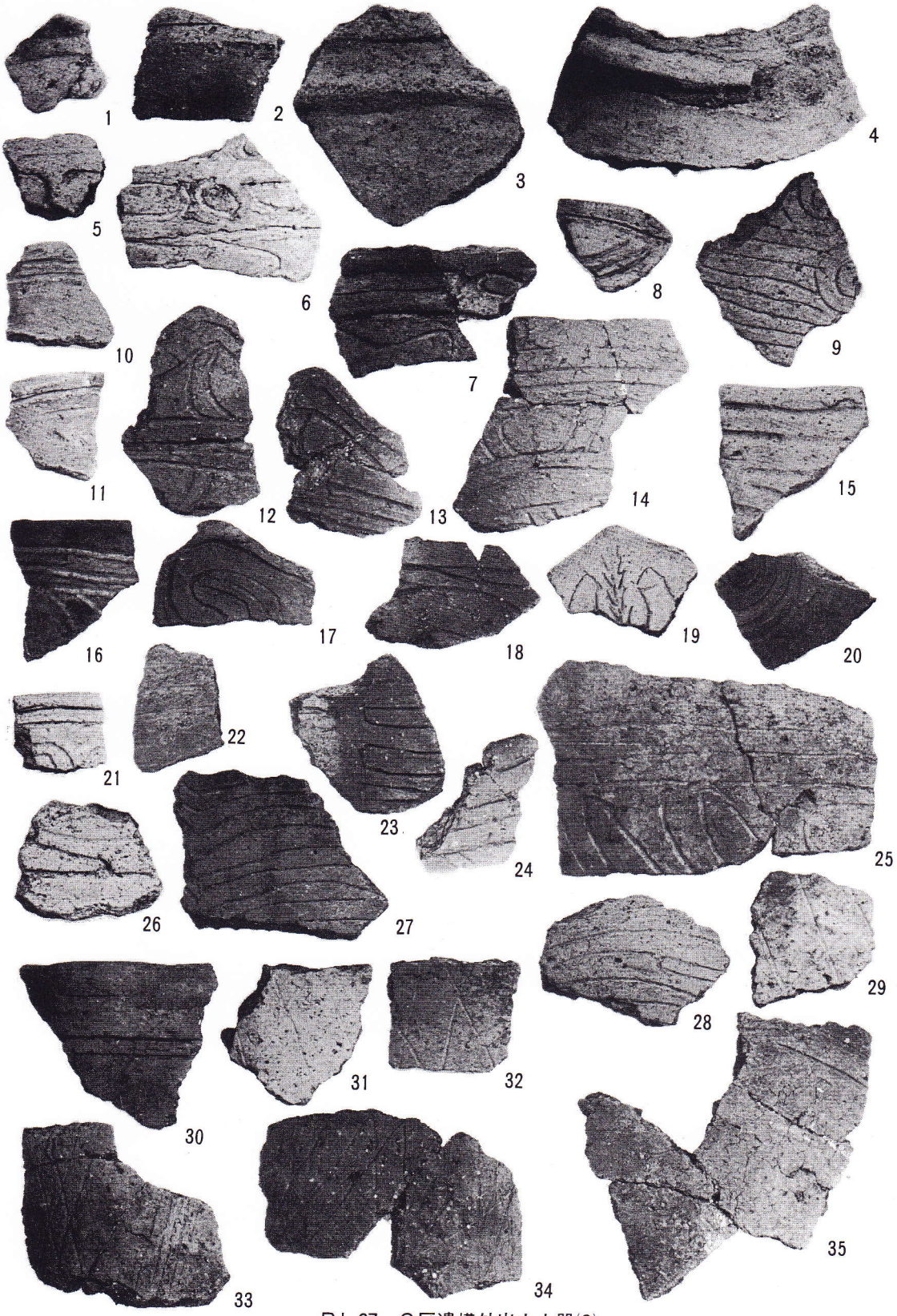


9

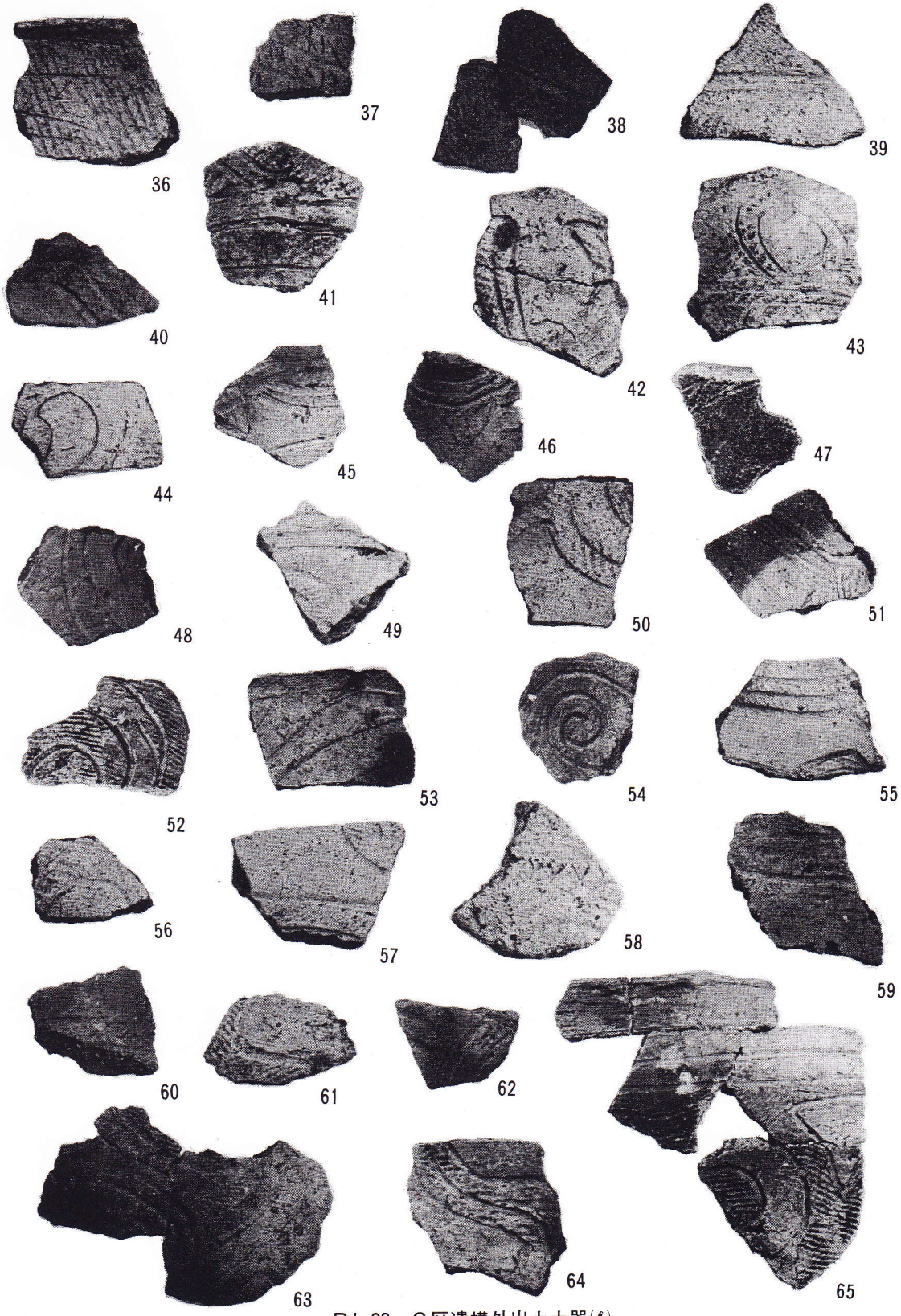


10

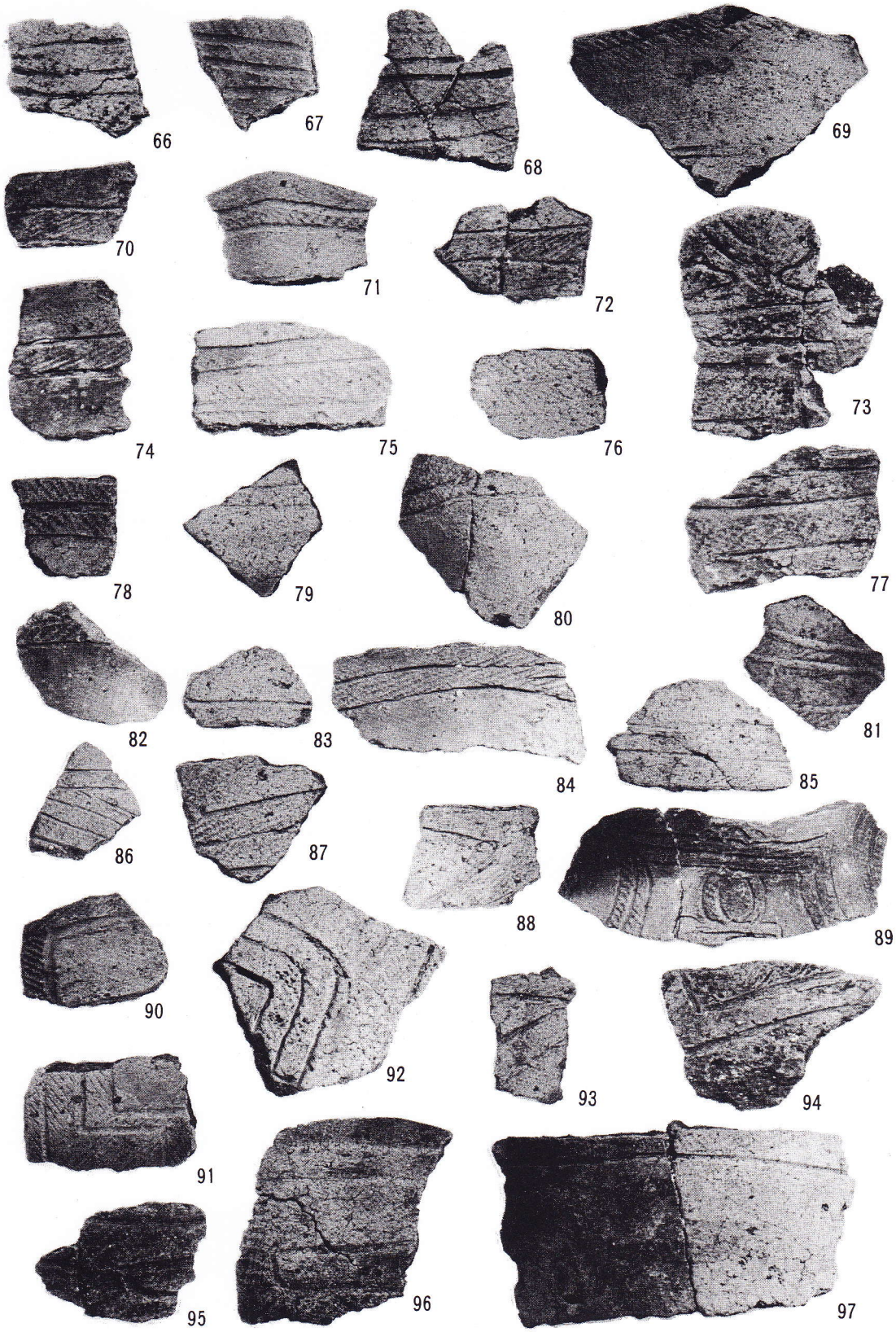
ＰＬ26　Ｃ区遺構外出土土器(2)



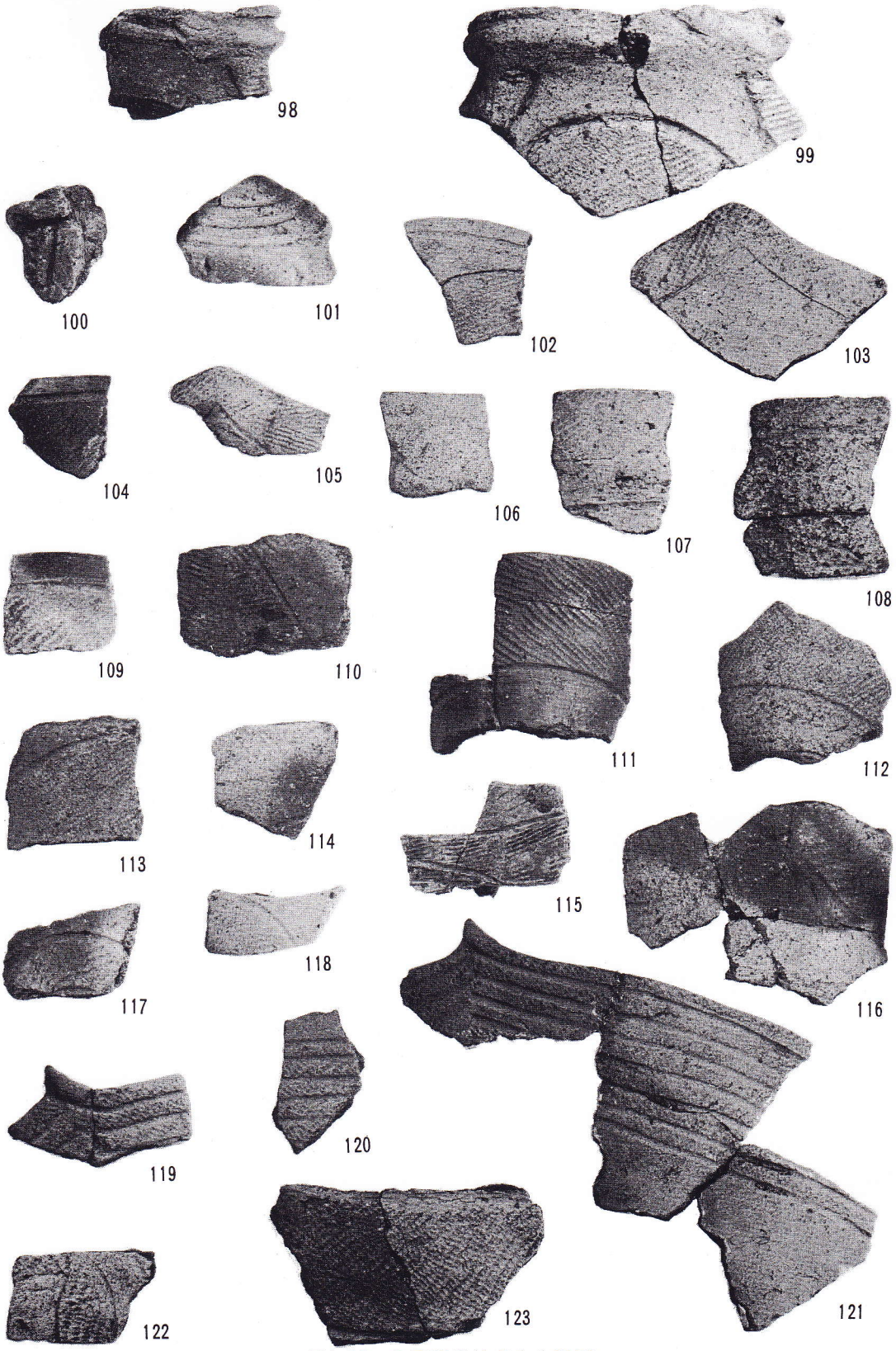
ＰＬ27　Ｃ区遺構外出土土器(3)



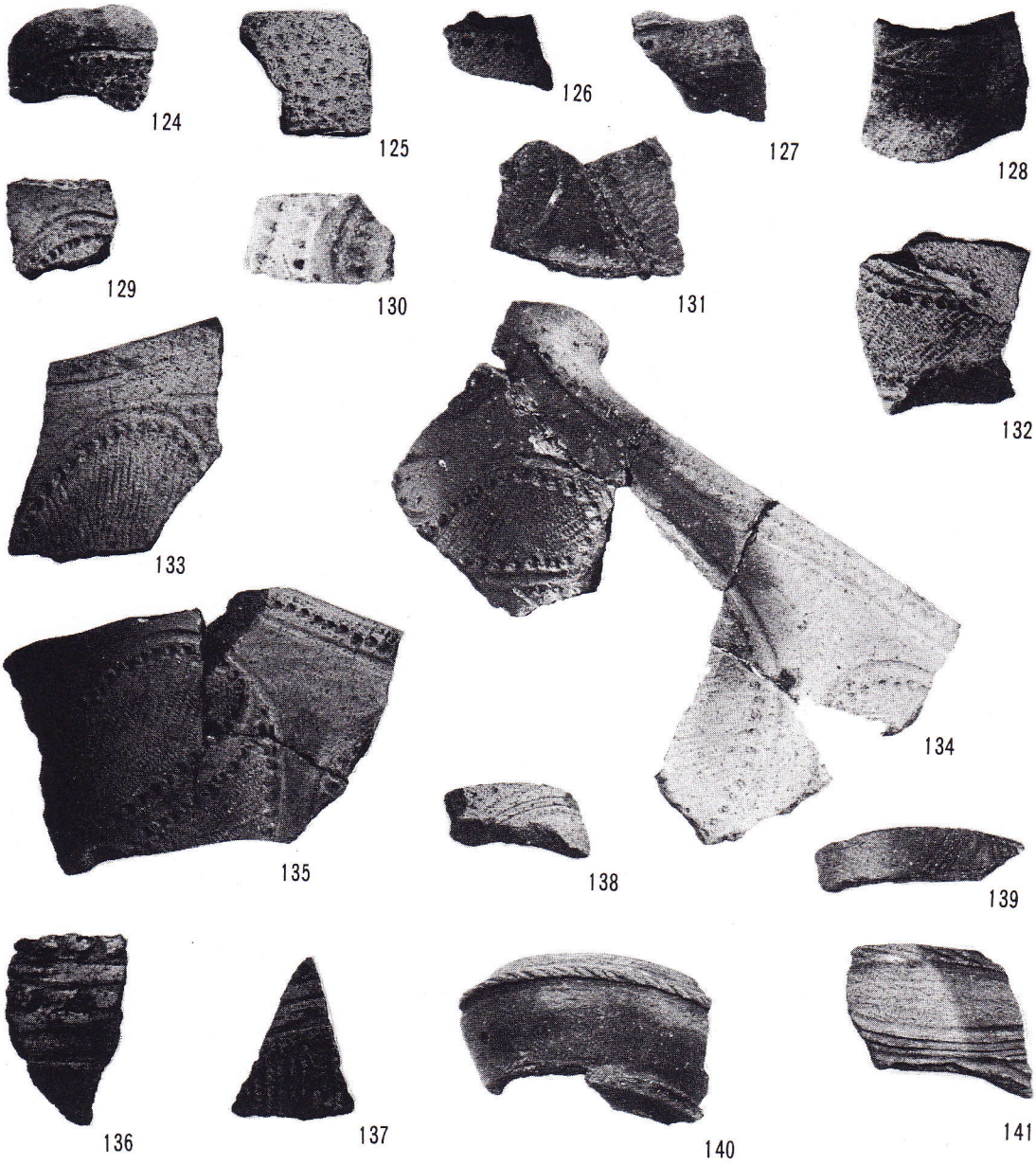
ＰＬ28　Ｃ区遺構外出土土器(4)



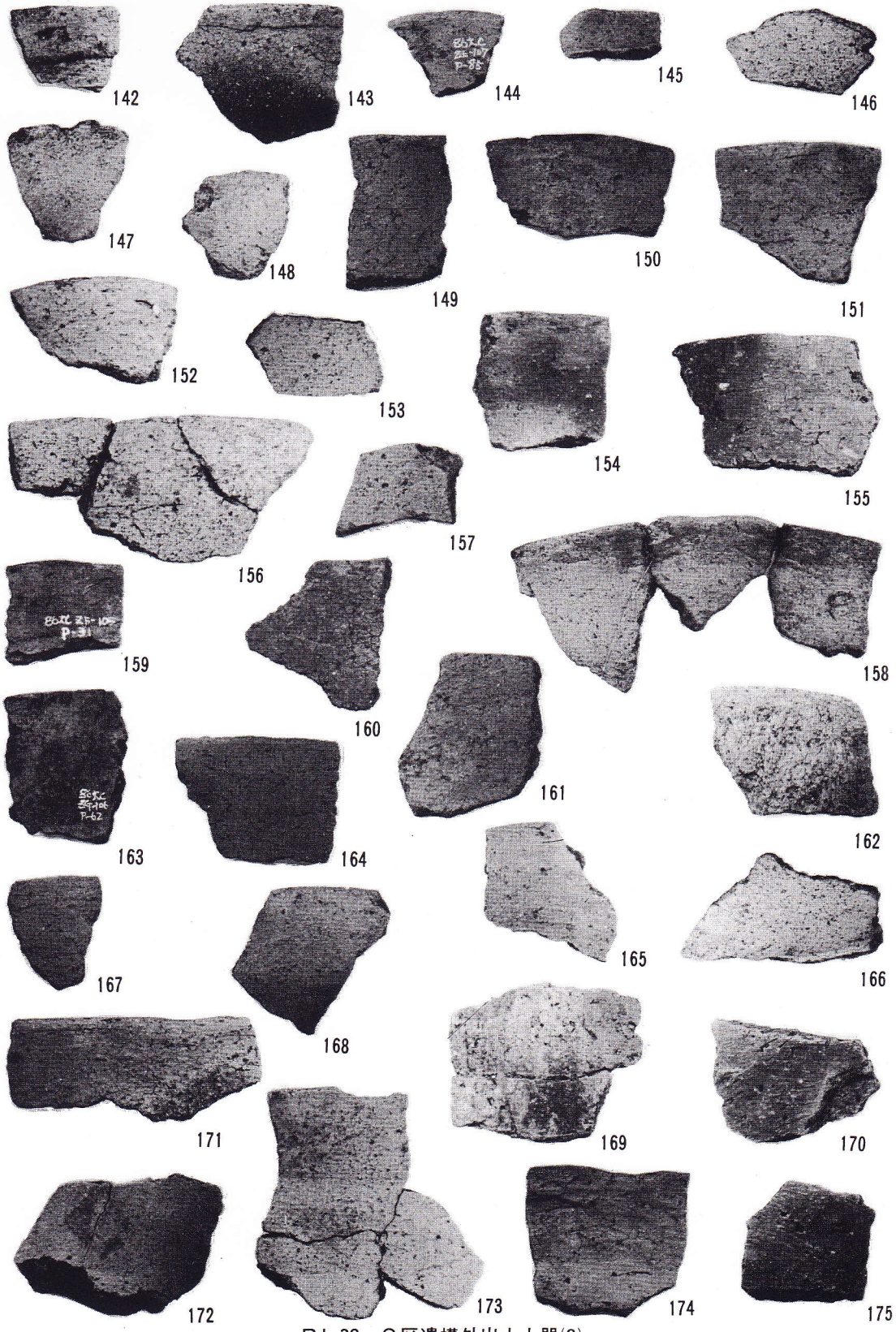
ＰＬ29　Ｃ区遺構外出土土器(5)



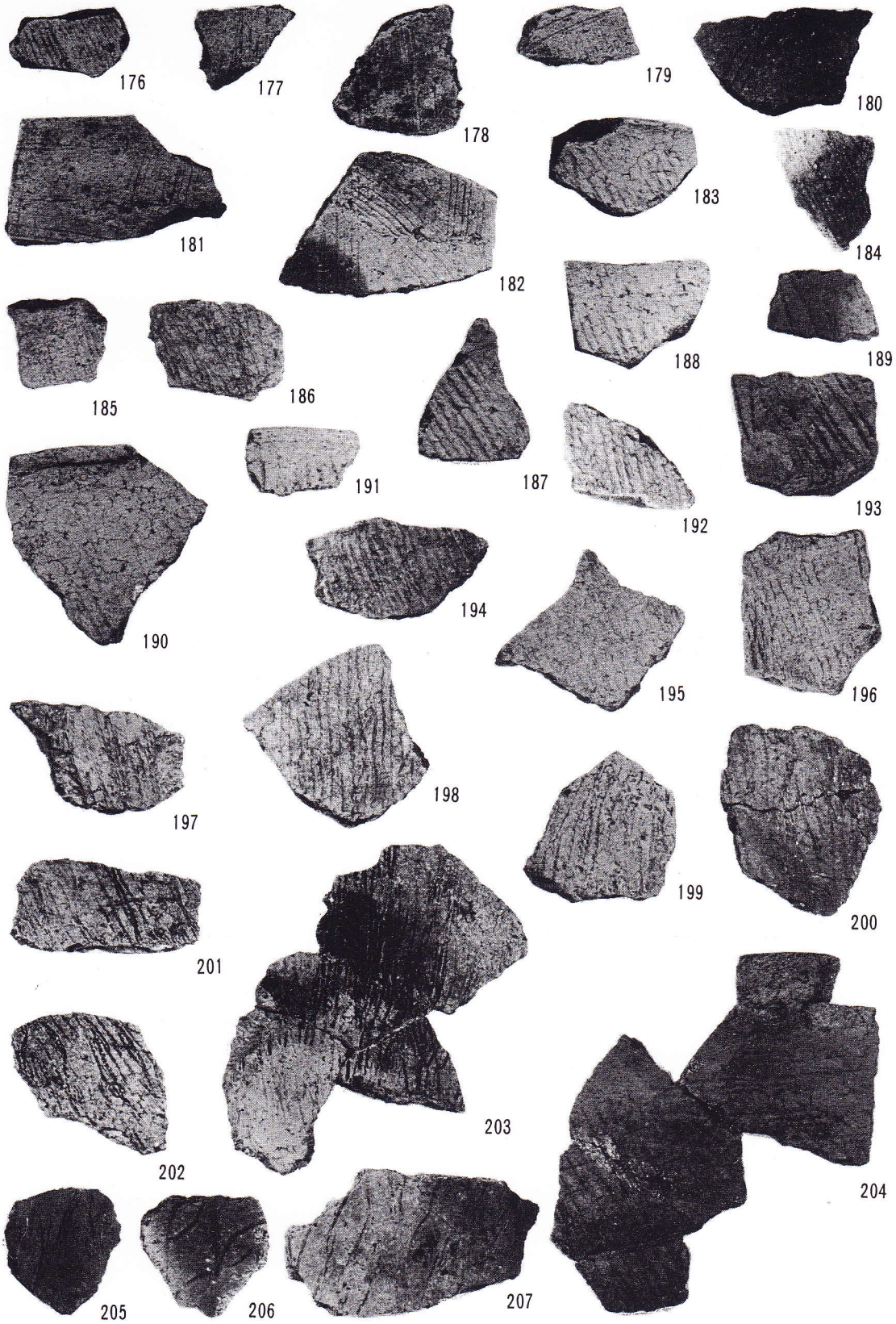
PL30　C区遺構外出土土器(6)



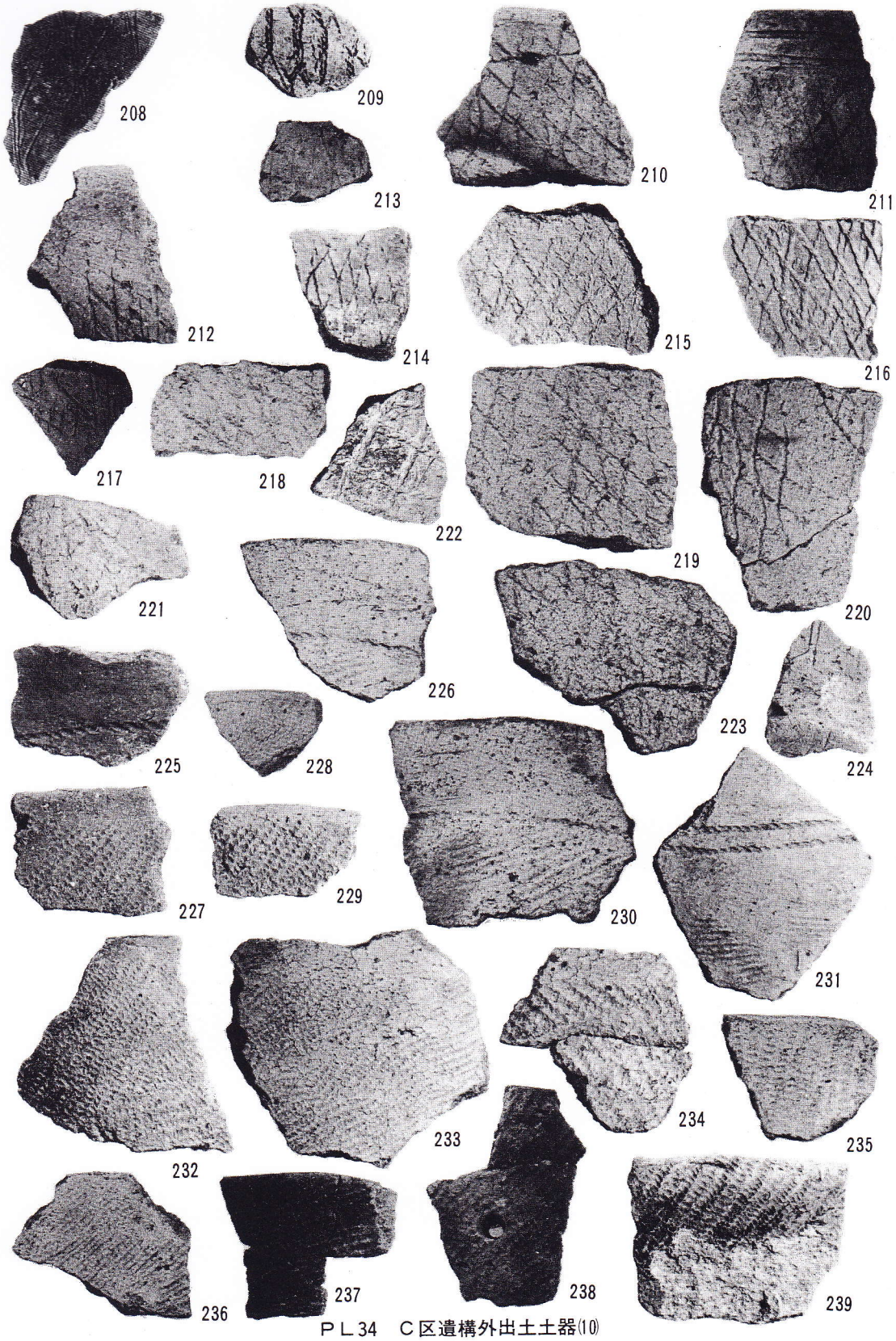
ＰＬ31　Ｃ区遺構外出土土器(7)



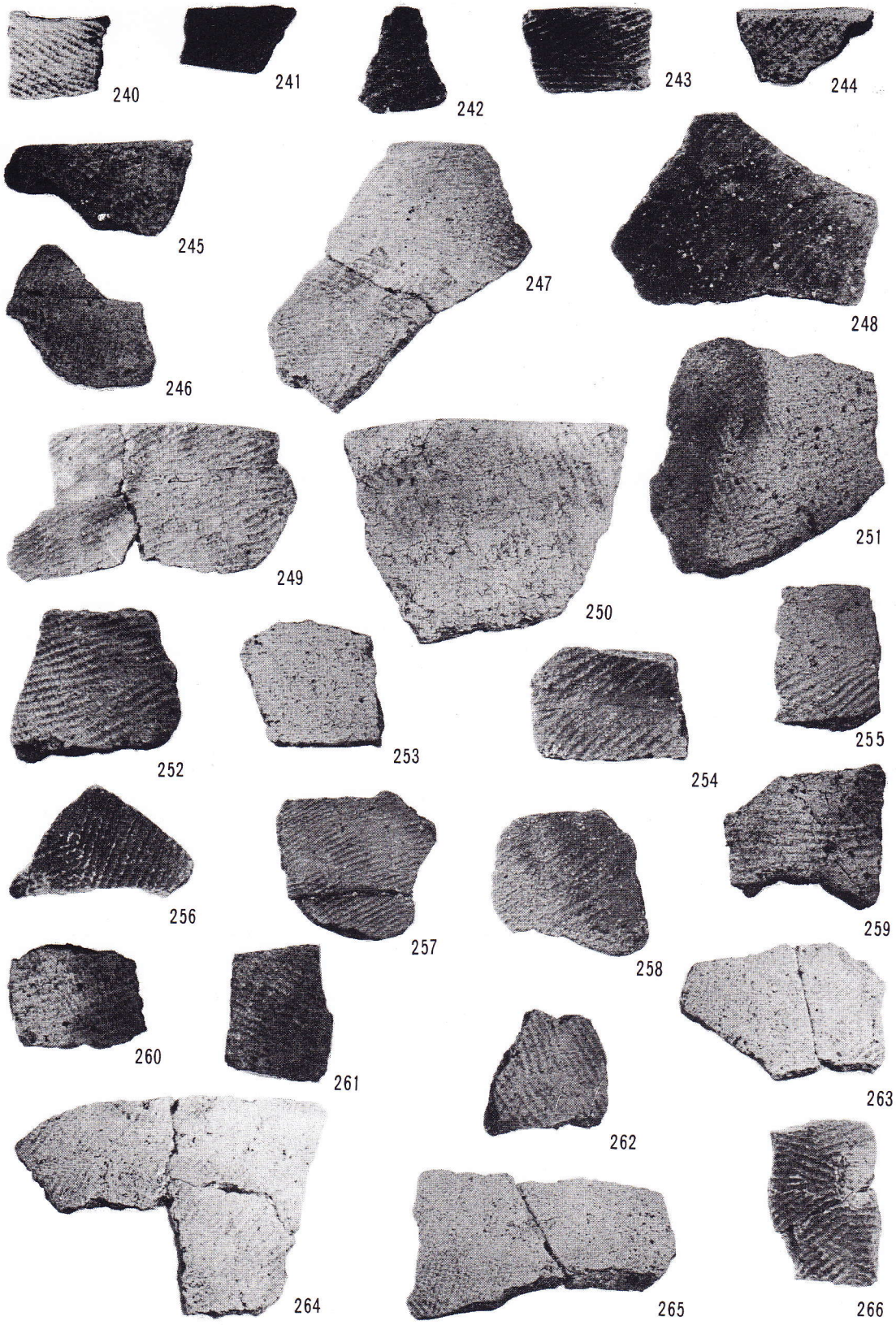
ＰＬ32　Ｃ区遺構外出土土器(8)



ＰＬ33　Ｃ区遺構外出土土器(9)



ＰＬ34　Ｃ区遺構外出土土器(10)

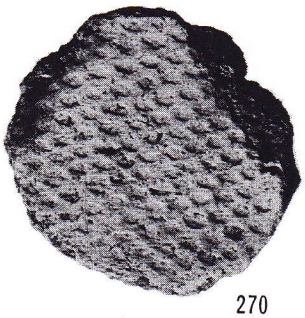


ＰＬ35　Ｃ区遺構外出土土器(11)

267

268

269


270

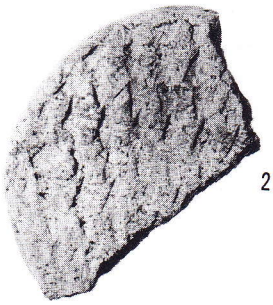
271

272

273

274

275


276

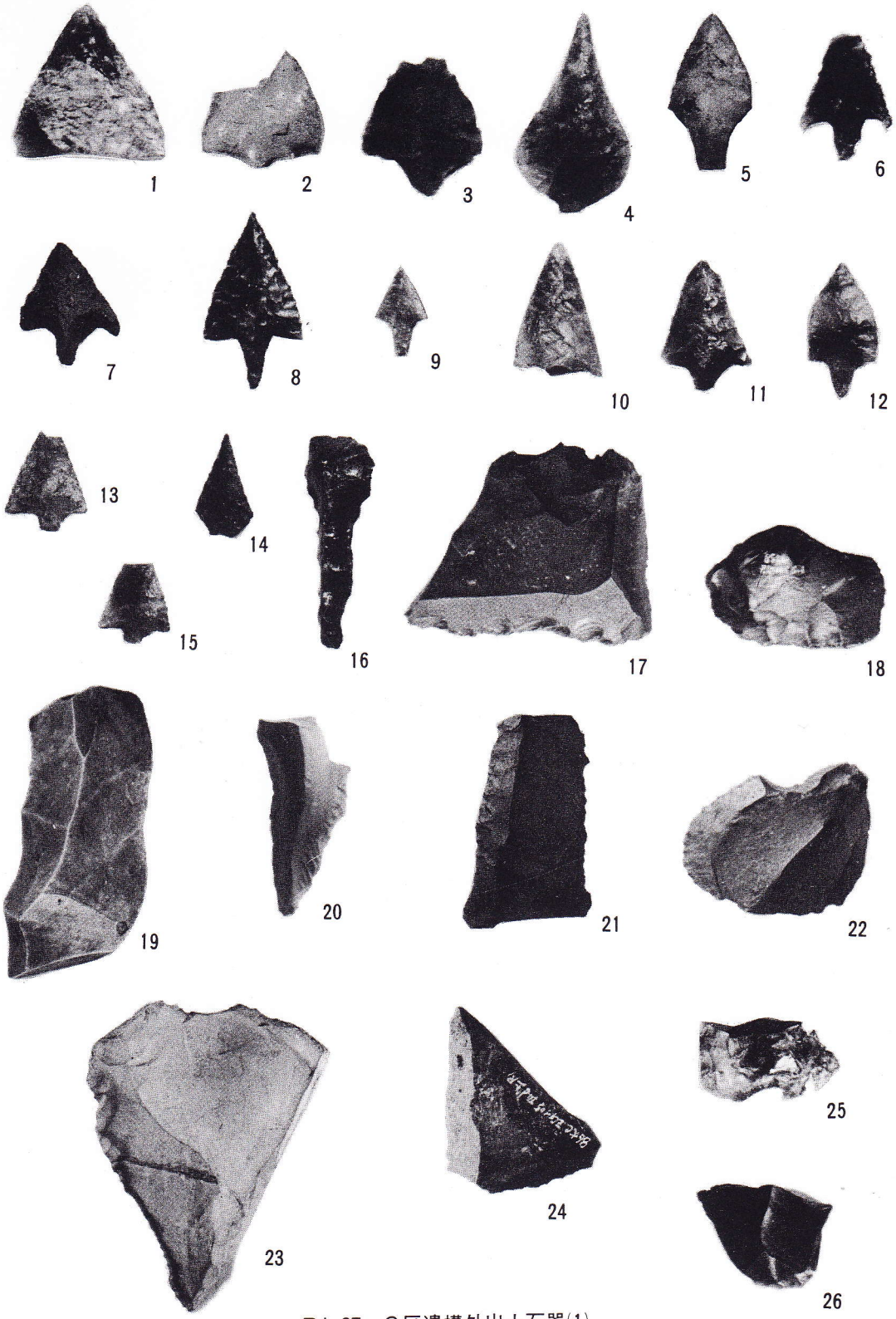
277

278

279

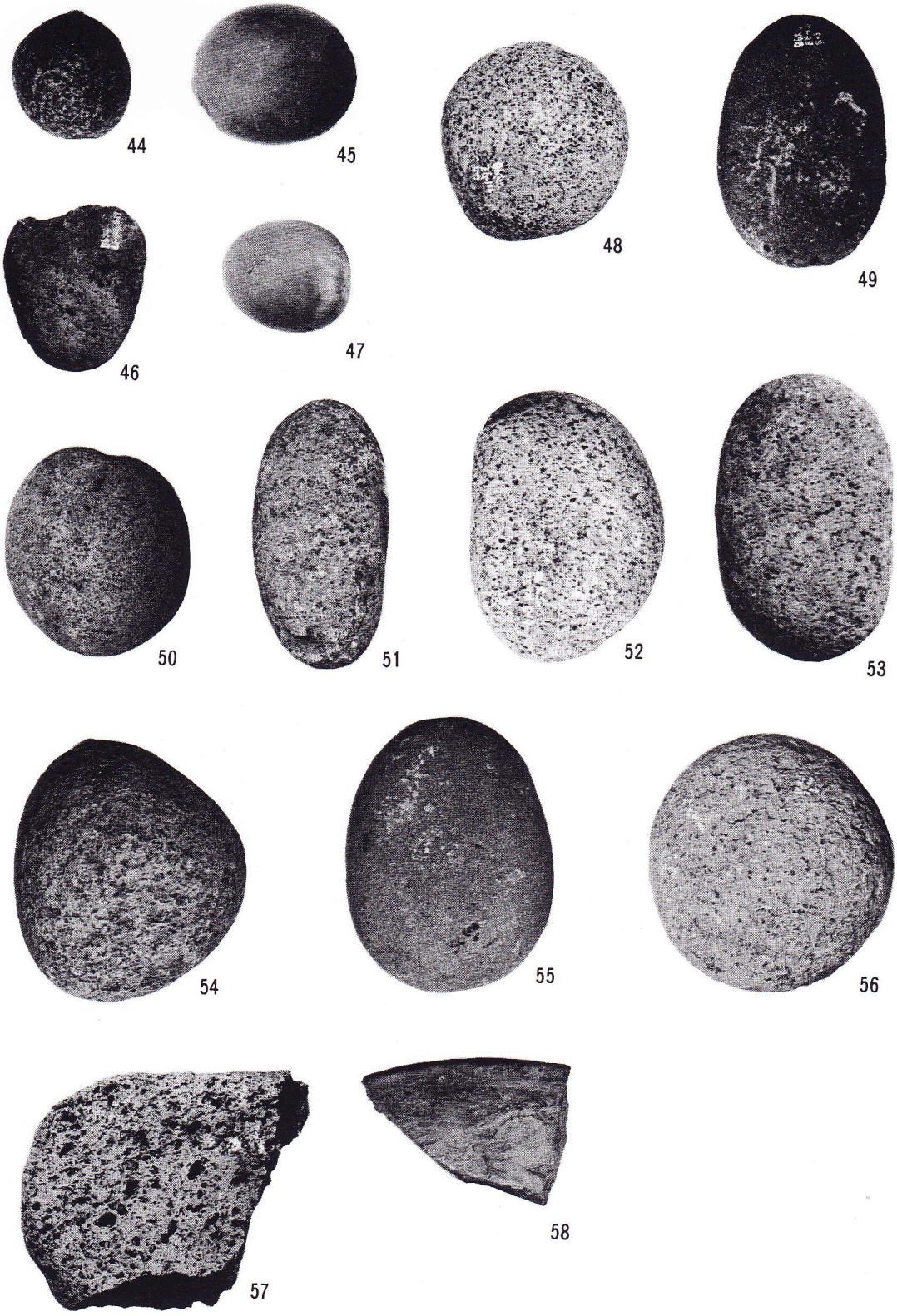
280

ＰＬ36　Ｃ区遺構外出土土器(12)

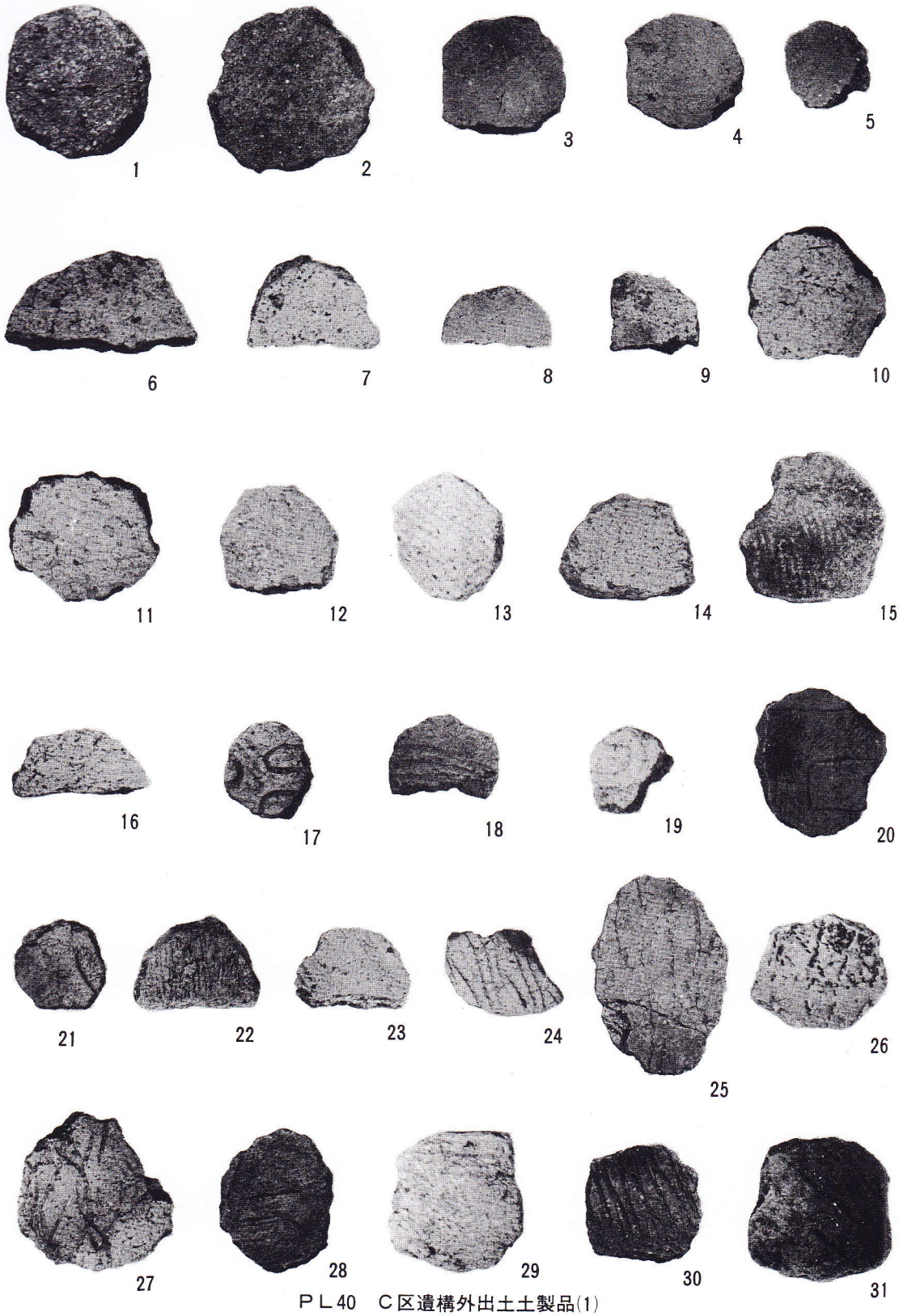


ＰＬ37　Ｃ区遺構外出土石器(1)

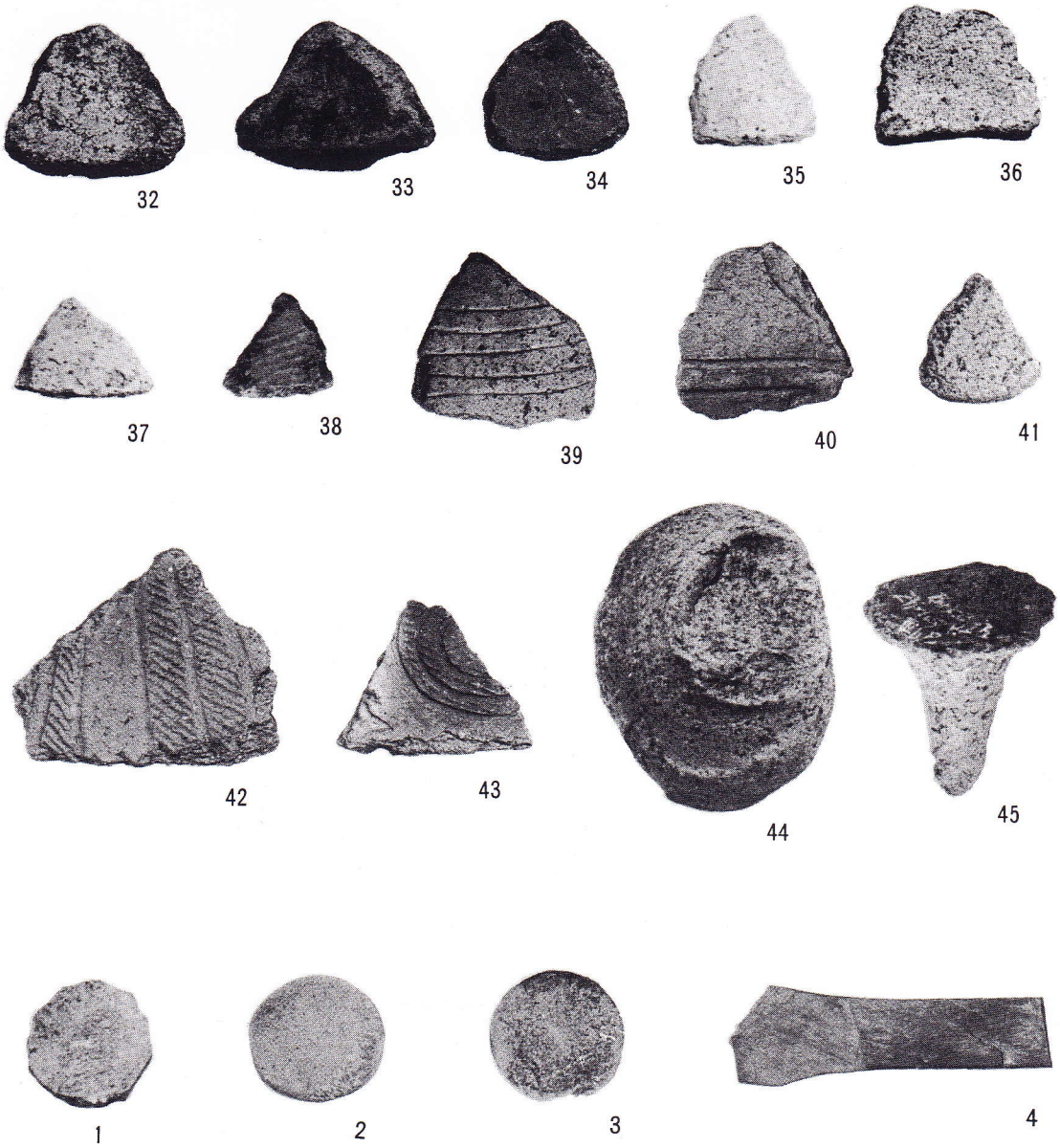
ＰＬ38　Ｃ区遺構外出土石器(2)



ＰＬ39　Ｃ区遺構外出土石器(3)



ＰＬ40　Ｃ区遺構外出土土製品(1)



ＰＬ41　Ｃ区遺構外出土土製品(2)石製品

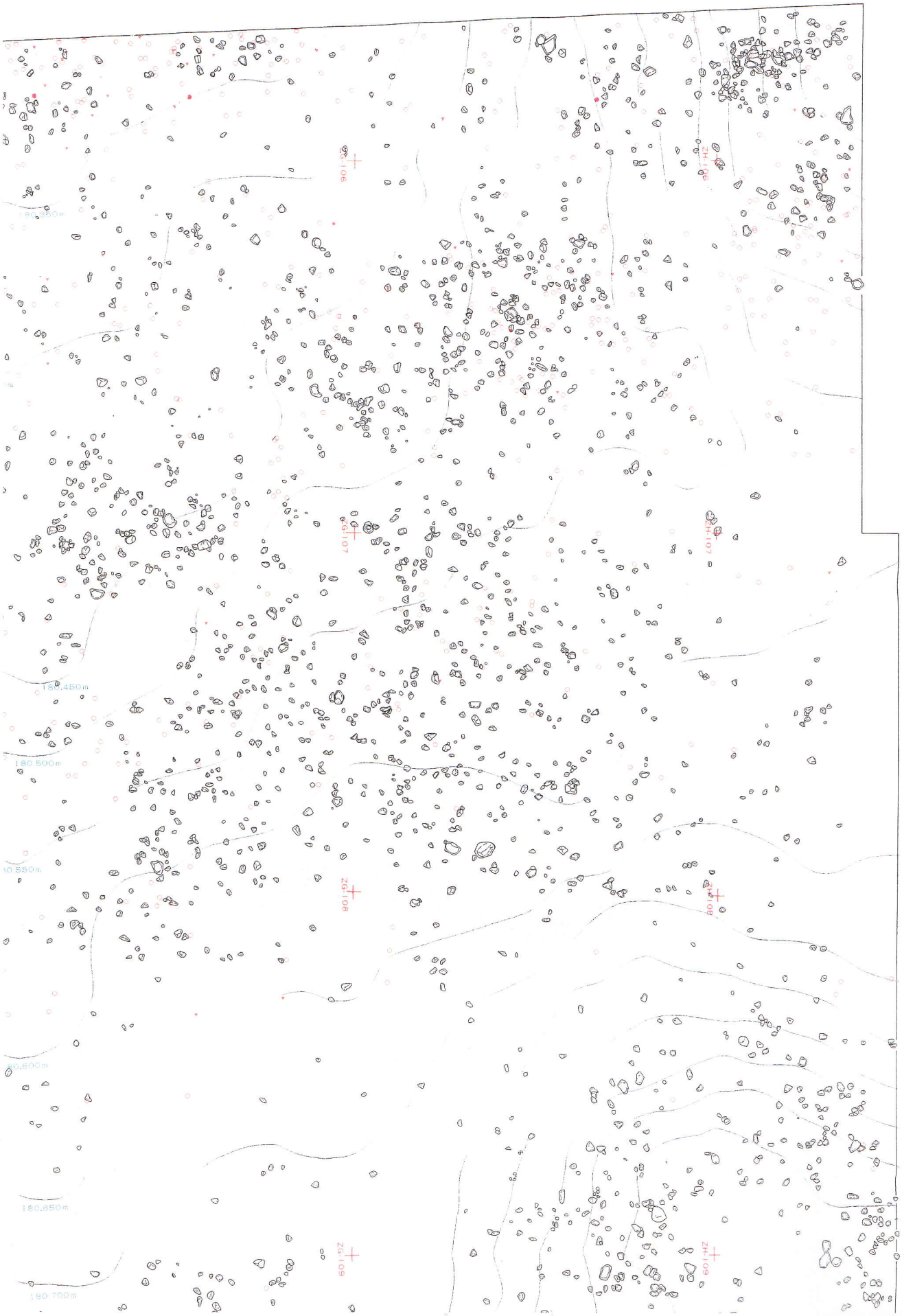
鹿角市文化財調査資料一覧

刊年	行月	集	報告書名	遺跡名・備考
48	11	1	鹿角市文化財目録　第１集	
49	12	2	鹿角市文化財目録　第２集	
50	3	3	黒沢家文書目録（希婦の細布関係文書）	古文書調査資料１
51	1	4	川口月嶺絵画調査報告書	
51	3	5	鹿角市文化財目録　第３集	
51	3	6	大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報	
52	2	7	大湯環状列石周辺遺跡分布調査報告書	
52	3	8	尾去沢鉱山関係文書－川口家文書から－（その１）	古文書調査資料２
53	12	9	尾去沢鉱山関係文書－川口家文書から－（その２）	古文書調査資料３
54	3	10	小平遺跡発掘調査報告	
54	3	11	鹿角市の民俗資料	有形民俗文化財調査報告書１
55	2	12	鹿角市の建造物(1)	旧花輪公民館ホール・内藤深蔵氏宅（内藤湖南旧宅）
55	3	13	毛馬内盆踊	昭和54年度文化庁記録選択事業報告書
55	3	14	新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書	
55	3	15	尾去沢鉱山関係文書－川口家文書から－（その３）	古文書調査資料４
56	3	16	新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書	
56	3	17	長牛城跡発掘調査報告書	
56	3	18	鹿角市の建造物(2)	仁叟寺山門・阿部家
56	3	19	御休堂遺跡発掘調査報告書	
57	3	20	鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(1)－	小枝指館、玉内館、長牛館（城）
57	3	21	遺跡詳細分布調査報告書	天戸森遺跡、八幡平山麓切留平地区
57	3	22	高市向館跡発掘調査報告書	
58	3	23	鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(2)－	大里館、小豆沢館、石鳥谷館
58	3	24	鹿角市の建造物(3)	月山神社本殿・田村家
59	2	25	鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(3)－	鹿倉館、大湯館、瀬田石館、高屋館、高瀬館
59	3	26	天戸森遺跡発掘調査報告書	
59	3	27	花輪館跡・下沢田遺跡発掘調査報告書	
60	3	28	鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(4)－	長嶺館、谷内館、夏井館、三ケ田館、長内館、尾去館 上山館、茶臼館
60	3	29	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)	
61	3	30	鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(5)－	小平館、高市館、柴内館、一ッ森館、万谷野館 地羅野館、黒土館、花輪古館
61	3	31	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)	
62	3	32	大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)	

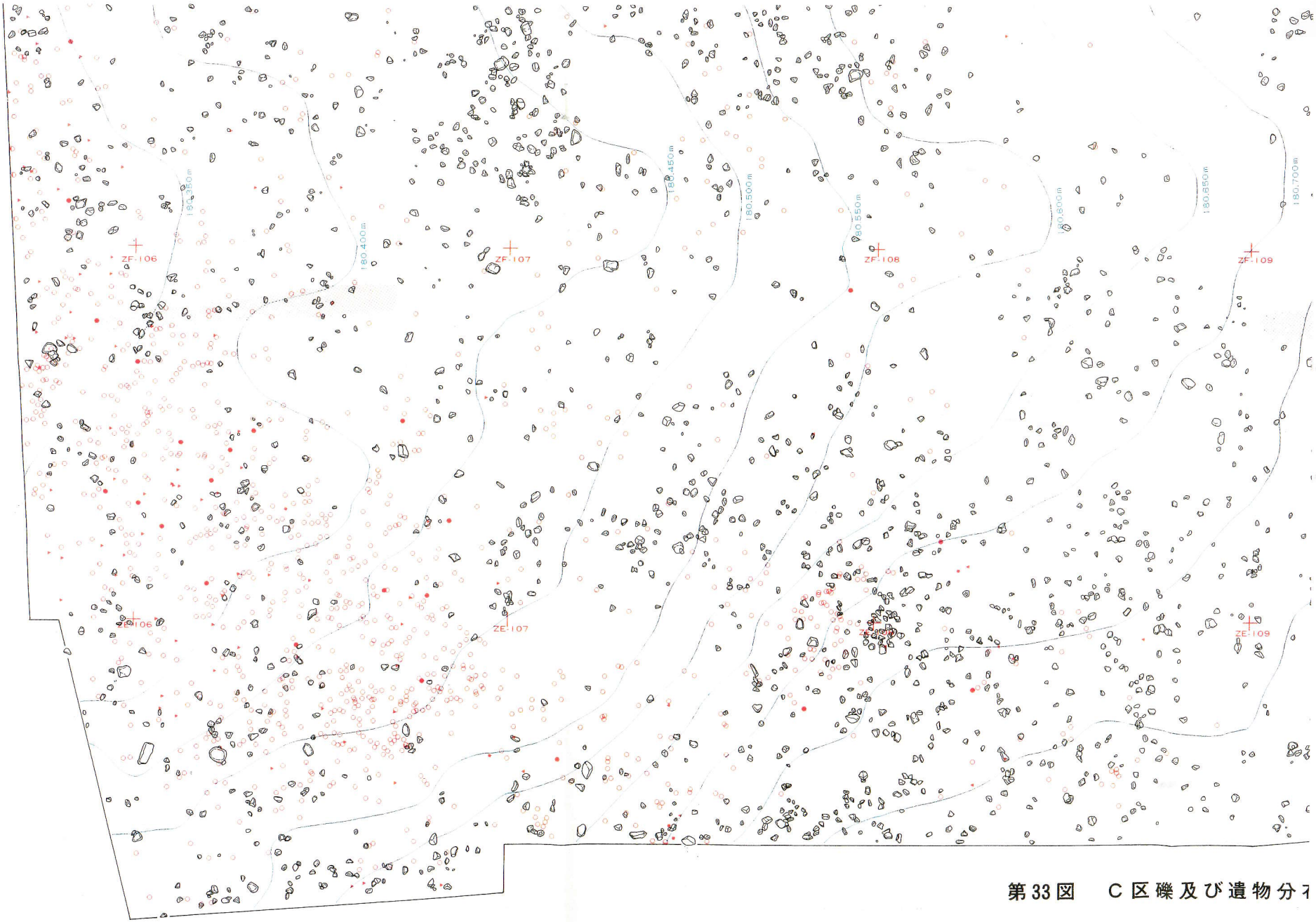
鹿角市文化財調査資料　32

大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)

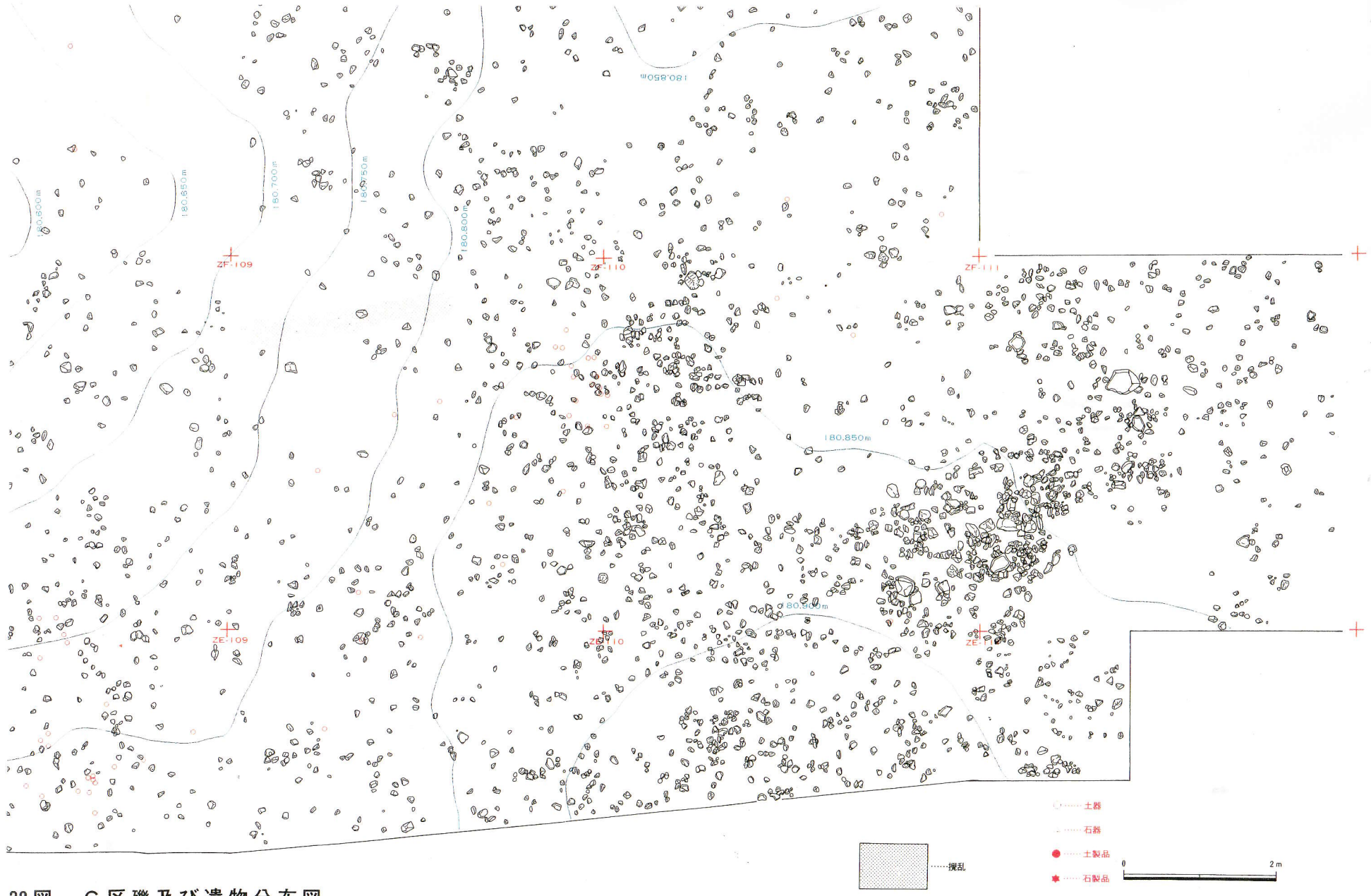
発行年月日　　昭和62年３月31日
発　行　者　　鹿角市教育委員会
〒 018－52　　秋田県鹿角市花輪字荒田４－１
ＴＥＬ　0186－23－5111
印　刷　所　　（有）　大館孔版社
秋田県大館市谷地町後60


ZG-106
ZH-106
ZG-107
ZH-107
180.450m
180.500m
ZG-108
ZH-108
180.600m
180.650m
ZG-109
ZH-109
180.700m

180,600m
180,650m
180,700m
180,750m
800m
180,850m
180,900m
180,950m
26-109
26-110
26-111
2H-109
2H-110
2H-111



第33図　C区礫及び遺物分布



33図　C区礫及び遺物分布図